


560
43

560-43-(1)

1200501512029

5

24. 11. 21

音 樂 概 論

蕭 友 梅 著

上海 樂 學 社 印

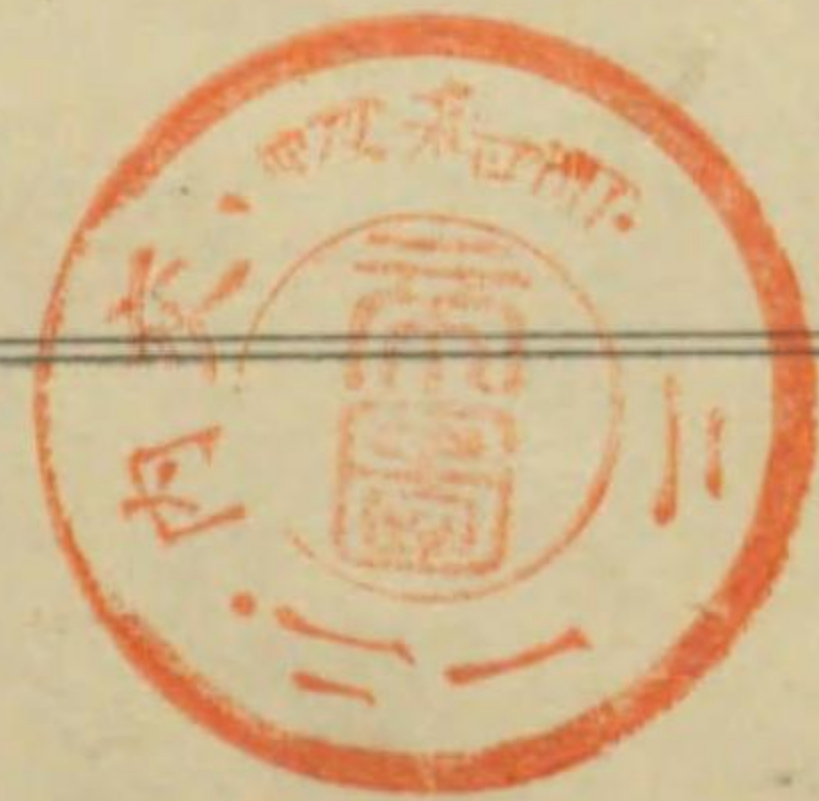
音 樂 概 論

兼 常 清 佐 著

學 藝 叢 書

1

岩 波 書 店



はしがき

一

一般の讀者諸君に申し上げます。この本は研究の本でもなく、また理論の本でもありません。一種の漫筆であります。放談であります。音楽はどう聞くべきものかとか、或は、音楽はどんな構造を持つてゐるものかとか、いふ様な事を、論理正しく論じて行つたものではありません。ただ私の考へついた事を、そこはかとなく、書きつらねた、といふだけの事であります。表題の『概論』の字は、岩波書店の編輯部のつけたもので、必ずしも適切とは言はれないでせう。漫筆と思つて読んで下さい。

二

若い讀者諸君に申し上げます。概論といへば、大抵は老大家の書くものとなつてゐます。事實の全般をよく知つてゐる老大家が、要領よくその輪廓だけを初學者に教へるものが概論であ

ります。それで、書く人がよほどの大家でない限り、概論といふものは、讀んでも、あまり面白いものではありません。

私はまだ老人でもなければ、大家でもありません。たゞ諸君と同じ様な音樂の聴衆の一人であります。音樂概論を書くがらでない事は、私はよく知つてゐます。またそんなものを書かうと思つた事ありません。諸君はこの本をたゞ肩がこるだけで、面白くも何ともない本當の音樂概論だなどと思ふと、書店に大變氣の毒です。それかと言つて、もちろん、この本を面白い本だなどとは私は決して言ひません。また私の言ひたい事がよく諸君の頭に徹底する様に、自分ながら、くどいと思ふほど、物を練り返へしたり、いらぬ例を取つたりしました。讀者諸君の中には、そんな事で或は退屈を感じる人もあるでせう。或は、こんな事なら、自分はおつづくに知つてゐる、と言ふ人もあるでせう。そんな事で、この本を下だらないといふ人は、あつてせうが、しかし、この本を讀んで、他の老大家の概論を讀む時の様な退屈さを感じる人は、恐らく甚だ些いだらうと思ひます。ともかくも、諸君は、この本を、諸君の仲間の一人が、ピールのきげんで氣焔をあげたもので、讀んだ後は捨てゝもいゝ、といふぐらゐな、ごく樂な氣

持で買つて下さい。

三

最後に老人諸君に申し上げます。もし萬一、この様な本を讀んで見ようといふ老人の方があつても、この本の附録の樂譜を御覽になつたら、恐らく、うんざりしてしまふでせう。實際、今五十歳前後の人で、樂譜のわかる人は極めて僅でせう。たとへ文教の府にある高官でも、たとへ音樂學校の管理者でも、とにかく若い時に習はなかつたものは、今更どうにもしかたありません。やはり樂譜を出されたら、あきめくらです。従つて樂譜なんか書いてある本は、とても異端外道の本の様に見えるでせう。その上、その様な老人諸君の音樂といつたら、まづ藝者の三味線か、謠曲などでせう。不幸にしてこの本には、三味線や謠曲の事はあまり書いてありません。

しかし、樂譜のページはごく僅です。そして、あれは私の道樂氣から、ちよつと附録にしたまでで、決してこの本の重要な部分ではありません。讀まなくとも、また讀めなくとも、少しもさしつかへない事です。諸君は旅行に出る時に、旅行案内を一冊買ふでせう。そして、實際

讀む處は、ほんの一二ページだけではありませんか。それに比べると、この本の方がまだまし

です。また老人諸君は、始めからあの部分だけは切取つて、反古にしておいてもいゝでせう。

私は、そのぐらゐな事では、別に腹も立ちません。癪にもさまりません。

三味線や謠曲のないのは、これは老人諸君にとつては、非常に不都合な事の様に見えるでせ

う。しかし、諸君の子供は、やはりそんな原始的なものよりも、ベートーヴェンの雄大なジマ

フォニーの方を好みます。諸君が諸君の子供の好むものゝ事を知るために、この小著一冊を買

ふのも、また一興ではないでせうか。

とにかく、音楽の本だと言ひながら、楽譜の附録があつたり、三味線や謠曲がなかつたりす

るので、老人諸君がこの本を異端外道の本だと思つたのでは、それでは書店は、いよく／＼す

ます氣の毒です。實際の社會で經濟力を握つてゐる老人諸君は、どうか度肝を大にして、この

様な本も、たまには澤山にお買ひ上げになる様にお願ひ申します。

目次

第一 音楽の聴衆——我々自身……………一

一 藝術品……………三

二 カフェーで聞く音楽……………四

三 音楽會の退屈……………一〇

四 歴史の追憶……………二一

五 註釋……………二七

六 内省……………三六

七 音楽の構造……………四四

この章についての附記……………五四

一 參考書……………五四

二 樂 譜……………五八

第二批 評 家……………六七

一 註釋をする人……………六九

二 値ぶみをする人……………七七

第三 音 樂 家……………一〇三

一 カフェーの音楽の作家……………一〇五

二 ベートーヴェン……………一一五

(1) 音楽の量 (2) 音楽と数学 (3) 音楽の表情——面白い音楽 (4) 音楽の表情——音楽と生活 (5) 近代の音楽 (6) ベートーヴェンの藝術

三 音楽の美しさ……………一七一

四 音楽の難關……………一七八

(1) 啞 (2) 雄辯なる啞 (3) 技巧 (4) 妥協

附 録 音楽の形について

第一 樂 曲 の 形……………二〇七

一 樂曲の構造……………二〇七

二 参 考 書……………二〇八

三 ベートーヴェンのゾナーテ……………二一二

第二 和 聲 の 形……………二二七

一 和絃の構造……………二二七

二 参 考 書……………二二八

三 和絃の表の説明……………二〇〇

第三 和 聲 一 覽 表……………二四四

一 音階の種類……………二四四

二 和絃の種類……………二四五
三 アルテラチオン……………二四九
四 基本の和絃一覽表……………二五〇
五 和絃の例……………二五八

第一 音樂の聽衆——我々自身

一、藝術品

藝術家は藝術品を作る。それは、新たに、また別の世界を一つ創造する事である。そして、その新たに創造された世界は、この亂雑な普通の人間世界と違つて、誠に清淨な、美しい世界である。その清淨な、美しい世界を享樂するのが、藝術を愛する一般の民衆である。つまり私共自身である。

藝術家が造り出した美の世界も、或る意味では、神が造り出したこの大自然の様なものである。それには限りなく深さがある。限りなく廣さがある。神の造り出したこの大自然は見る人のでいろく姿に變る。動植物學者には動植物學者の自然がある。天文學者には天文學者の自然がある。畫家には畫家の自然がある。歌人には歌人の自然がある。そして、何も考へない凡人には、大自然は全く意味のないものともなる。その様に、藝術家の造り出した美の世界も、見る人々によつていろく見える。

„Von Herzen — Möge es
zu Herzen gehen.“

Beethoven

音楽家も、もちろん、藝術家である。音楽は、もちろん、藝術品である。清淨な、美しい世界である。それには、大自然の様に、限りない深さがある。限りない廣さがある。そして私共の鑑賞のしかた一つで、いろくさまぐくの變つた姿をあらはすものである。また何も考へない凡人や、音楽に全く無關心な人々には、音楽は全く無用の長物ともなる。音楽の中に限りない美しい世界を見出すのも、または塵芥に等しいと思ふのも、それはみな私共の心がら一つである。

私は、諸君と共に、そのいろく變つた音楽の姿を、少々考へて見たいと思ふ。

二、カフェーで聞く音楽

カフェーで音楽を聞くのは非常に愉快である。

ベルリンのポッツダム廣場に『ファーターランド』といふカフェーがある。私は地方を旅行した歸りの汽車がベルリンのポッツダム停車場に着くと、すぐこのカフェーに立ちよること

してゐた。そしていつでも、そこで楽しかつた旅のたよりを日本にゐる人に書いた。この様な時には、たいていは、二階の奏樂席では小さい管絃樂隊が舞蹈曲だの、或はその時々のはやりの歌などを演奏してゐた。日本への手紙を書きかけて、しばらく、この音楽を聞きながらコーヒーを飲んでゐる事は、私を心の底から愉快にした。そして、すべての音楽は嬉しい、氣もちのいゝ音楽に聞えて來た。そのおかげで、私はさらにピルゼンのビールの大杯を注文する事もあつた。實に楽しい思ひ出である。嚴肅なフィルハーモニーの音樂會で聞いたベートーヴェンやマーレの名曲を忘れる事が出來ない様に、私は『ファーターランド』で、渦巻く煙草の煙と、喧しいコーヒー皿の響と、大衆の話し聲の間から、かすかに聞いたオスカル・シュトラウスの軽い舞蹈曲も到底忘れる事は出來ない。

カフェーに音楽がないのは、さしみに山葵がない様なものである。カフェーで音楽を聞くのは、全く愉快である。

カフェーで、音楽を聞くのは、氣もちのいゝ耳の刺戟を楽しみたいからである。音楽は、そ

の場合には、氣もちのいゝ音の塊である。愉快な音の流れである。

舌ではモッカのコーヒーを味つてゐる。鼻ではその香ばしいかきを嗅いでゐる。眼では葉巻の紫の煙の立ちのぼる姿をぼんやり眺めてゐる。そして卓上に頬づゑをついて、遙に日本にゐる人に書送る手紙の文句を考へてゐる。その時、耳ではきれいな管絃の音が斷えたり續いたりして流れて行くのを聞いてゐる。――かうした場合には、この人の心はこの様ないろ／＼なもので十分に満足されてゐる。別に何の不足もなければ、何の不安もない。心の中には何の空虚な場所もない。コーヒーも、葉巻も、音楽も、各々その處に安んじてゐる。

音楽も、實際、その處に安んじてゐる。きれいな管絃の音を、時々、この人の耳に送つて、耳を樂しましめてゐればそれでいゝ。もしその耳の楽しみに倦きたら、コーヒーを飲む事も出来る。葉巻を吸ふ事も出来る。その間に音楽の方は、どのくらゐ曲が進行しようが、少しもかまふ事はない。或る一曲を始めから終りまで聞かなければならぬといふ事はない。たゞ時々、きれいな音が耳にはいれればそれでいゝ。その音楽が何の曲であるかなどは、決してこの場合の問題ではない。たゞ音楽でありさへすればそれで十分である。そして心は常にこの様な一つの

ものから他のものへ移りあるいて、しばらくは決して退屈する事はない。

もちろん、人の性質によつて、音楽を好む人と好まない人がある。また好むにしても、絃の音を好む人もあれば、管の音を好む人もある。或は歌が好きだといふ人もあれば、ピアノが美しいといふ人もある。一樣には考へられないかもしれぬ。しかし、絃の音にしても、管の音にしても、或は歌にしても、ピアノにしても、その音はとにかくみな美しい音である。きれいな音である。氣もちのいゝ音である。決して人に悪い氣もちを起させる様な音ではない。どんなに下手にヴィオリネの絃を弾いても、それが實際、鋸の目立の音と同じ様に聞える事はあり得ない。どんなに下手にピアノを弾いても、ピアノである以上は、それから鐵槌で板を叩く様な音の出る事はない。猫がピアノの鍵盤の上を歩いて、やはりピアノの持つてゐる美しい音だけが出る。楽器は、その音自身が已に人の耳に愉快に響くものである。ちやうど、砂糖は菓子に造つても、またはそのまゝで舐めても、とにかく甘い事には變りはない様なものである。そして砂糖の甘味は、誰の舌にも氣もちのいゝ味である。砂糖の甘味には、身ぶるひがする様な悪

感を感じる、といふ人は、その人の神経の方が少し變つてゐる。その様に、管絃やピアノの音は、音自身が已に誰の耳にもきれいなものである。もしピアノの音を聞くのは、工場の鐵槌の音を聞く様に不愉快だ、といふ人があるならば、それは、やはり、さういふ人の神経の方が少しかしい。音楽が好きだ、嫌ひだ、と言ふのは、それは或る人は餅菓子が好きだ、或る人はキャラメルが好きだ、といふ事に相當する。その中の砂糖が嫌ひだ、といふのではない。音楽の音自身は、つまり砂糖の様なものである。誰にでも、或る程度のいゝ氣もちを與へる。カフェーで音楽を聞くのは、ちやうど、その砂糖の甘味を味はふ様なものである。誰にでも或る程度のいゝ氣もちを與へる。

砂糖を加工して餅菓子にしたり、キャラメルにしたりすると、人々によつて多少の好き嫌ひが出来てくる。そして、さうなると、たゞの甘味といふ事だけではすまなくなる。しかし、砂糖を少し舐めるのならば、誰からも別に苦情は出ない。カフェーで聞く音楽は、つまりその砂糖を少し舐めるのである。誰からも苦情は出るわけではない。もし、喧しい、といふ様な苦情が出るなら、それはさう言ふ人が今肝心な談話中か何かで、音楽を聞いてはゐられないからであ

る。音楽の罪ではない。音楽のあるカフェーで、そんな不粹な用談などをする方がまちがつてゐる。とにかく、カフェーで聞く音楽は、音楽の一番簡単な場合である。菓子をぼろ／＼に壊して、それをたゞの砂糖の甘味として味はふ様なものである。材料だけの價值を私共に見せる様なものである。これより簡単な音楽の享樂はあるまい。

これが音楽の一番廣い用途かもしれない。かうした使ひ途があるからこそ、音楽がこの社會に存在してゐるのかもしれない。音楽に何の心得もない老人諸君が、淺酌の間に藝者の常盤津や清元を聞いて相好を崩すのもさうである。子供の一隊がアメリカの戦争映畫の眞似をしながら軍歌を唄ふのもさうである。そして、この様な時に、音楽の材料である音そのものは、よく本來の面目を發揮する。音はいつでも人の心を樂しませる。人の心をうき／＼させる。また心の楽しいとき、心がうき／＼してゐるとき、音の刺戟はよくそれに調和する。酒の席に出る藝者は、どうしても三味線を弾かなければならぬといふ事になる。カフェーには、どうしても音楽がなくてはならぬといふ事になる。従つてその反對のときには、普通には音楽は禁止せられ

る。國民こぞつて哀悼の意を表する大喪のときには、きつと音曲停止の命が下る。

まづこれが私共聴衆の前に音楽が示現してくれるその第一の姿である。たゞ氣もちのいゝ姿である。私共はまづこの様な音楽の姿を出來うる限り享樂しなければならぬ。

三、音樂會の退屈

音楽はカフェーで聞くのが、一般の人々にとつては、一番無難である。老人諸君なら藝者のどゞいつでも聞いてゐれば、それでいゝ。それならたゞ面白くて、愉快で、いゝ氣もちである。しかし音楽だけを聞くためには音樂會といふものがある。この音樂會で音楽を聞くのは、カフェーで音楽を聞くほど簡單には行かない。音樂會で音楽を聞いて、そしてそれを相當に楽しむためには、どうしても私共は難關を一つ越さなくてはならぬ。

その難關は、退屈を我慢する事である。

たいていの音楽には、退屈がつき物である。欠伸を噛み殺す、といふ事は、私共が長いジューフォニーやゾナーテを聞くときに、しばしば繰返す不愉快な經驗である。

音楽の面白さに我を忘れて聞き入つた。——といふ様な文句は、たゞ音楽の形容としては甚だ美しいが、しかし實際には、なか／＼容易にそんな場合には出會はない。殊に古典的な長い曲では、我を忘れてその全體を聞いてしまふ、といふ様な事は、私共の生活には殆ど無い。たとへばベートーヴェンの雄大なジューフォニーでも、或る退屈さを我慢しなくては、とてもその全體は聞いて居られない。

私共が普通に音樂會に来て、音楽を聞いてゐるときの心もちは、まづかうである。——

私共は、始めは、もちろん、あらゆる熱心をもつて、音楽を聞いてゐる。しかし、しばらくすると、私共の心は、ふと音楽から離れる。いつとはなしに、演奏臺上の音楽は心から消えてしまふ。音楽など聞いてゐるか、ゐないか、わからない様になる。そして前に坐つてゐる人の着物だの、髪結び方などが目に付いて来る。或は遙に彼方の席に坐つてゐる友人の姿などが目にはいつて来る。そして昨夜彼と銀座を散歩しながら話した事などが心に浮んで来る。私共

はまた足を組みなほしたり、椅子に坐りなほしたりする。手ではハンケチを弄んだり、曲目の紙を巻いたり、ほどこいたりする。その間には、音楽は殆ど耳にはいつてゐない。しかし、しばらくすると、また私共の心は、ふと演奏臺の上に歸つて来る。或は管絃樂が急に強くなるとか、または音色が急に變る、といふ様な事が、私共の心を再び演奏臺の上に引きもどす機會になる。また、その様な事がなくても、場所が音樂會であるから、自然に心は再び音樂の上に歸つて来るのは、もちろんの事である。心が音樂の上に歸つて来ると、音楽は明瞭に耳にはいる。そして私共は音楽を非常に美しいと思ふ。

この様な心の動搖を幾度か繰返へしてゐる間には、欠伸を噛み殺すぐらゐることはしばしばある。そして退屈だといふ感じが、しらすく起つて来る。たゞ、人はそんな事を口に出して言はないだけである。曲が終つて拍手の音が音樂場に響きわたると、私共は始めて、ほつとす。やれくすんだ、といふ様な感じが、心の何處からともなく淡く漂うて来る。しかし、曲の面白さや、きれいさに昂奮した感じも、もちろんある。たゞ心の中がその様な感じばかりで一ぱいになつてゐない事は確である。感激と共に必ず退屈もまじつてゐる。これが恐らく、音

樂會での私共の心の有様であらう。

もし、これが、普通に私共が音樂會で音楽を聞く時の心の有様であるとするならば、まづ私共は非常に損をしてゐる事になる。演奏臺では實際、十だけの音を出してゐるとしたならば、私共はその半分の五か、或は事によると、それよりもまだ些なく三か四ぐらゐの音をやつと耳に入れるだけである。あとは、みな注意の外に逃げてしまつて、聞いたも聞かないも同じ事になる。そして曲が長くなればなるほど、その耳にはいらぬ部分は多くなる。私共がベートーヴェンのジューフォニーと思つてゐるものは、實際に演奏されたジューフォニーの半分か、或は十分の一ほどのものにもあたらないかもしれない。ちやうど木戸錢を完全に拂つて芝居にはいりながら、そのうちの僅に一幕か、或は仕出しの藝でもちよつと見て歸る様なものである。或は美しい一巻の繪巻物を、ほんの僅に處々だけひろげて、あとは黒い布か何かでかくしてあるのを見て、それでその巻物の全體を見たと思ふ様なものである。

音楽といふものは、一體、感情がはつきりしないものである。悲しい曲か、嬉しい曲か、そ

んな事は、大ていの場合には、よくわからない。大ていは悲しくも、嬉しくもない。たゞ耳に聞いて、氣もちがいゝ、といふぐらゐな事である。ショパンの『送葬行進曲』を聞いて、思はず涙をこぼした、といふ様な人があるならば、それはよほど物を誇張して言ふ人である。つまり、でたらめである。本當は『送葬行進曲』だといって、別にさう悲しくも何ともない。あれを花嫁の行進曲といつても、或はさうも受け取れるかもしれない。中のトリオのメロディで『めでた、めでたの若松さまよ』と唄つても、或は唄へない事もないかもしれない。殊にベートーヴェンのゾナーテやジムフォニーの様な古典的な曲では、その感情は極めて曖昧である。そして私共の心に感情として一番親しみのある悲しいとか、嬉しいとかいふ様な感情は、その様な曲からは殆ど感じられない。悲しいゾナーテ、或は嬉しいジムフォニーといふ様な言葉があるならば、それは實際の經驗を言つたものではない。たゞ物のたとへに過ぎない。

それかと言つて、音楽はまた何事かを私共に話すものでもない。音楽は意味のある言葉でないから、それが別に何を言つてゐるといふわけでもない。たゞ楽器が鳴つてゐるだけである。山があるのか、月が出たのか、犬が喧嘩をしたのか、人が御辭儀をしたのか、何が何だか少し

もわからない。たゞきれいな音が絶えず流れてゐるだけである。私共が目で見える様な世界の事は音楽の中には何一つもない。つまり意味のあるもの、言葉で言はれる様なものは、音楽の中には何一つない。たゞきれいな音が耳にはいるだけである。結局、音楽はわけのわからないものである。

悲しくも嬉しくもないもので、そして何が何であるか少しも意味のわからないものを、少しも心を外に散らさずに、じつと神妙に聞いてゐる、といふのは、それはさう命ずる方が無理かもしれない。いかに耳にはきれいな氣もちのいゝ音でも、さう長い間そればかりに注意を集めて聞いてゐられるものでない。それは人間の心理がゆるさなない。音楽を聞いてゐて、忽ち退屈になつたり、欠伸が出たりするのは、それがむしろ人間の心理のあたり前である。

音楽の音は、普通の場合では、私共の心の全體をすつかり占領してしまふ事は出来ないものらしい。音楽には非常な魔力がある、といはれてはゐるが、それには多少のおまけがあるらしい。音楽が私共を本當に有頂天にして、音楽だけで私共の心が本當に一ぱいになる、といふ様

な事は、それは實は珍しい場合である。場所がカフェーなら、その一ぱいにならない心の餘地を、コーヒーや葉巻の味で埋めてしまふ。心が音楽から離れたら、書きかけた手紙の上にも心の心を持つて来る。しかし、音楽會ではコーヒーもなければ葉巻もない。もちろん、手紙を書くわけには行かない。一ぱいにならない心の餘地を埋めてくれるものがない。前の座席の人の着物を見たり、曲目の紙で紙鶴を折つても、そのくらゐでは、とてもコーヒーや葉巻の代りにはならぬ。そこから、自然に退屈さが湧いて来る。欠伸がこみ上げて来る。

しかし、音楽會に来るからには、私共は音楽が嫌ひではない。心が音楽の上に歸つた時には、音楽は美しいものだとは思ふ。たゞ自然に湧いて来るこの退屈さと戦はなければならぬといふのが、甚だ難儀である。

私共はこの退屈さと戦ふ事を恐れてはゐない。この退屈さと戦つて、もつと十分に音楽を享樂しようと思つてゐる。たゞ、どうしてこの退屈さと戦へばいゝかを知りたいだけである。

こゝで音楽の聴衆と聴衆でないものと斷然區別される。この退屈さと戦つて、音楽を享樂し

ようといふ人々だけが音楽の聴衆として残る。あとの大衆は、音楽なんて退屈なものだ、といつて二度と音楽會に顔を出さなくなる。これで音楽の愛好者、音楽の聴衆、或は音楽の世界に住まうとする人々の數がはつきり定まつてくる。話は多少わき道にはいるが、私共は、こゝで、この音楽の世界の住人の數を大體數へて置きたいと思ふ。

この數は残念ながら、日本ではさう大したものではない。それは同じ日本でも地方々々で違ふであらうし、また年々その數に異動はあるであらう。しかし、音楽の聴衆は、何といつても、東京が一番多く集つてゐるであらう、その大體の數はどのくらゐあるか、その人々はどういふ種類の人々であるか、それを私共は知りたいと思はない事もない。それは將來日本での音楽の發達を卜する一助となるものである。

東京には大音楽會場といふ様なものは今は一つもない。十年前には麻布區飯倉の或る貴族の邸内に、オルゲルまで備へ付けられた音楽堂があつたが、震災以後私共はその消息を聞かない。この頃では、青年會館や、日比谷の奏樂堂や、朝日講堂の様な新聞社、雜誌社の講堂で音楽會が開かれる。また東京には豫約會員をもつてゐる管絃樂團が一つある。そして月に二回の演奏

會がある。私共はこの豫約會員の數は知らないが、いろ／＼な音樂會の入場者の様子や、いろ／＼な講堂の座席の數などから推して東京での音樂の聴衆は、まづ二千人まで、決して三千人は越えまいと思つてゐる。東京の人口を二百萬とすれば、正にその千分の一である。この數は専門的な音樂會業者に聞けば、あまり狂はない見つもりは得られるが、この本では、それほどの事をする必要はあるまい。大體の見當は音樂會場の座席の數や、その満されぐあひや、或は音樂會の會員の數からつかない事もない。

芝居ならば、歌舞伎座と新橋演舞場とで、殆ど毎月二十日以上打つてゐる。もちろん毎日滿員ではあるまいが、しかし毎月興行してゐるからには、經濟上非常な損失にはならないといふ事だけは明かである。活動寫眞館は東京に全體いくつあるか知らないが、とにかく大小數十の小屋で、西洋物と日本の劍劇とで毎日些くも二回興行して、それで十分に經營して行かれるらしい。音樂では、とてもその様な事は出来ない。たゞ蓄音器でよく名を知られてゐる世界的な演奏家が來ると、帝劇が數日間滿員になる事もある。しかし、これは例外である。この時帝劇に押しよせる人々は、準音樂愛好者である。また入場料がいらぬか、或は非常に安い日比谷

の奏樂堂の演奏會にも、かなり澤山の人が來る。これも準音樂愛好者である。この人々を加へても、音樂で芝居や活動だけの興行成績が得られるかどうか甚だ疑はしい。音樂は、數から言へば、まだ／＼心細い話である。

たゞ頼む處は實である。些いながらも音樂の世界に住む人々は、まだ年の若い人々である。年の若い學生諸君が多い。そしてそれも男の學生が多い。管絃樂團の演奏會に行けば、澤山の若い男に出會ふ。そして、歌舞伎座や三味線のおさらへ會で見える様な女には、この音樂會ではあまり出會はない。能樂の會で見える様な裕福さうな老人にもあまり出會はない。この音樂會には、日本の文教を司る人や、音樂學校を管理する様な人はゐない。また代議士もゐなければ、老教授もゐない。その代りオイレンブルクの樂譜くらゐ讀めさうな若い男たちが大勢ゐる。たゞ若々しい男の大勢が熱心に管絃樂を聞いてゐる。この若い男、——それこそ實に頼もしさの象徴である。この若い男たちがこれから日本の社會を作り上げるであらう。彼等は決して女のように、力なく家庭の中に埋もれてしまはない。彼等は能樂の老支持者の様に、すぐ死んでしまはない。彼等は長い、望の多い將來を持つてゐる。もちろん、若い學生の間はベーター

ヴェンのジムフォニーに親しんでゐるけれど、それが年をとり、金が出来ると、段々と藝者の三味線の方がよくなつたり、能樂會の幹事をいひつかつて得意になる様な人もあるであらう。しかし、決してその様な人ばかりではない。また日本人は年をとると、必ず三味線や謠曲が好きになるとは限らない。やはり、西洋の音樂は、この様子で續いて行けば、將來、日本でも相當に榮えるであらうと思はれる。

この望みの多い、長い將來を持つてゐる若い人々、主として若い男の人々が、まづ二三千人ぐらゐる東京にゐて、そしてその人々だけが、たとへ音樂會の退屈さと戦つても、なほ音樂を享樂しようとする人々である。カフエーで音樂を聞き、藝者の三味線を喜ぶ人々は殆ど數は知れない。大ていの人々はその中には數へられる。今、私共は、この大衆の中からかりに東京にゐる二三千人の若い人々を、殊に音樂の世界の住民として選出したのである。私の話は、これからは、この様な人々にだけ通用する事になる。私は、これから、この人々と共に、音樂會の退屈と戦つて見よう。

四、歴史の追憶

退屈さと戦ふ。——それは甚だぼんやりした言ひ方である。もう少し細かに、私共はその退屈さを考へて見なければならぬ。

音樂を聞く時の退屈さは、音の事や音樂の事でのその時の頭の中が一ぱいにならぬからである。そしてその一ぱいになりきらぬ頭の中を、どうかして無理にも一ぱいにしようとするからである。或は、どうして一ぱいにしていゝかわからないからである。そして、どうして一ぱいにしていゝかわからない時には、退屈であると同時に多少不安な氣もちにもなる。音樂は退屈でもあるが、またわからないものでもある、といふ様な不安な氣もまじつて来る。

そして音樂は藝術である、と繰返へし／＼私共は教へられてゐる。音樂には一種の藝術的な權威があつて、たゞぼんやりと聞き流してはならぬものゝ様に教へられてゐる。藝術には藝術としての理解の道があつて、たゞぼんやりと聞き流してゐる人々は、つまり藝術がわからない

人々と罵られなければならない様に教へられてゐる。音楽を聞いてゐる間は、頭の中はその音楽の事だけで一ぱいにしておかなければならぬもので、耳で音楽を聞きながら、手では紙鶴を折つてゐる事は、藝術を汚すものだと思はれてゐる。その様な事を考へると、たゞぼんやりと音楽を聞いてゐて、少し時間がたつと退屈して來た、など言つてはゐられない事になる。しかし何と言つても、實際には退屈する。私共はそれをどうしたらよからうか。私共は、音楽會では、いつもこの退屈と不安とに襲はれがちである。どうしても、私共は、それからのがれる道求めなければならぬ。

第一の道は、恐らく、歴史の追憶であらう。

私共は毎日新聞を読む。その三面の雑報を読むには別に何の用意もいらぬ。別に何の深い専門的な研究もいらぬ。歴史上の物語といつても、結局は三面雑報と違つた事ではない。誰にもわかる事である。そして誰にも興味のある事である。

もし或る曲に、この様な三面雑報に類するものがついてゐるならば、私共は出来るだけそれ

を知ればいゝ。それには別に何の専門の研究があるわけでもない。たゞ何かそんな事が書いてある本を見ればいゝ。そしてその曲を聞かるときに、たゞ音楽の音だけでは頭の中が一ぱいになりきれないならば、音と共にこの三面雑報を思ひ出す。或はこの曲はその三面雑報の曲であると考へてもいゝかもしれぬ。

たとへば、私共は今ベートーヴェンの有名なピアノの曲『ゾナーテ・アパシオナタ』を聞くとする。この曲はブルンシュウィック伯に捧げたもので、その伯爵の妹テレゼはベートーヴェンの戀人である。そしてその戀は遂に破れた。不幸なる樂人は失戀の苦い杯を飲まなければならなかつた。もしあの三通の『永遠の戀人』に寄せた手紙がこの時のものであるならば、その戀のかくも熱烈であつただけ、その失戀の苦痛も深刻であつたであらう。この失戀の物語や、或は『永遠の戀人へ』の手紙などは、正に『ゾナーテ・アパシオナタ』に關係した三面雑報の様なものである。もちろん、普通の雑報と同じ様に、この失戀の物語も、その真相が果してどんなものであつたか、それは今日からはわからない。しかし、私共は音楽を聞くのである。物語の真相などは問題ではない。たゞ物語があればそれで事は足りる。

今私共はこのゾナーテを聞いてゐる。ピアノの音は怒濤の様に、嵐の様に、私共の耳に迫つて来る。私共はその音と共に、ベートーヴェンのこの失戀の物語を頭の中に思ひ浮べる。さうすると、ピアノの激しい音は、ちやうどベートーヴェンの失戀の苦痛を私共に訴へてゐる様にも聞える。私共がこの物語の中の人物の姿や、動作や、或は手紙の文句などを、十分明瞭に頭の中に描き出せば、それから起るいろいろな感情が音から來る感情と一致して、かなり長い間、私共の頭をこの音樂の事で一ぱいにしておく事が出来る。そして前の座席の人の着物を觀察しなくとも、曲目の紙で紙鶴を折らなくとも、かなり緊張して、この音樂だけを聞いてゐる事が出来る。

そしてこれならば、音樂を熱心に聞いたとも言はれよう。音樂を聞きながら、その音樂を作つた人の事を考へるのである。聞くものと、考へる事とは十分な關係がある。作られたものと作つた人とである。ベートーヴェンの『ゾナーテ・アパシオナタ』を聞いて、ベートーヴェンの悲しい戀を思ふ、といへば、誰もそれを非藝術的だと罵る事は出來まい。そして、それはピアノの音を聞くと共に、或る物語を心に思ひ浮べるだけの事である。物語といつても、三面雜

報の様なものである。誰にも出来る心の働きである。

これは確に私共が退屈からのがれて音樂に親しむ一つの道である。たゞ鳴つてゐるだけのピアノの音に意味をつけ、感情をつける道である。音樂を聞く間に、音樂の事で頭を一ぱいにしておく道である。かうすれば、たゞ何が何だかわけがわからずに鳴つてゐるピアノの音が、私共の頭によくわかるものになる。私共の心の自然によくかなふものになる。

しかし、その様な場合は、音樂には甚だ些い。この聞きかただけでは、決してすべての音樂は聞かれない。まづ第一に、大ていの曲には、そんな三面雜報の様なものばついてゐない。ベートーヴェンは傳記に波瀾が多くて、私共にも十分に三面雜報らしい興味を興へるが、どんな作曲家でもみなさうだとは限らない。たとへばシューベルトの傳記を讀むならば、私共は殆ど戀の物語に出會ふ事は出來ない。また『永遠の戀人へ』の様な面白い手紙もシューベルトの傳記の中に出て來ない。その他、たゞ戀物語のみでなく、一體シューベルトの傳記には三面雜報になる様な場面が乏しい。シューベルトが作つた十曲のゾナーテは非常に美しいが、しかし、

私共は、そのどれ一つとして今、『ゾナーテ・アパシオナタ』を聞いた様にして聞く事は出来ない。聞きたくとも聞く種がない。そして、大ていの音楽は、みなそんなものである。

またもう一つ困つた事には、『ゾナーテ・アパシオナタ』の様に幸に雑報の種がある曲にしても、果してその雑報だけで、それを聞く時の私共の頭を一ぱいにして置かれるか、どうか、それが甚だ疑しい。それをもう一度よく考へて見る必要もある。まづ第一に雑報が短かすぎる。たゞベートーヴェンがテレゼに戀をして、そして遂にそれが失戀に終つた、といふだけである。言葉で言へばほんの一口である。あの戀の手紙はあるが、しかし、それを今さら一々文字を追うて読みかへしてゐるのは、その事自身が已に非常に退屈である。また、よしさうした處で、この長いゾナーテの續く間には、あの三通の短い手紙を何十度も繰返へしてゐなければならぬ。それは實に滑稽である。その上に、今聞いてゐる音楽のどの邊で何を思ひ浮べたらいいかがわからない。音楽のどこがベートーヴェンで、どこがテレゼであるか、わからない。音楽のどこが戀であるか、どこが失戀であるか、わからない。つまりこのゾナーテを聞きながら、ベートーヴェンの失戀の物語を思ひ浮べると言つても、それはほんの一瞬間の事である。どこ

でもいゝ。またどこと限つた事もない。たゞこの長い曲を聞いてゐる間に、時々そんな事も私共の心の中に、ぼんやりと浮んで來るといふくらゐなものである。

歴史の追憶だけで、音楽を聞くときの退屈と不安とから全然のがれようといふ事は、實際にはこの様な不便がある。そして、とても實行できさうにもない。私共は、どうしても、外の試みをして見なければならぬ。

五、註 釋

第二の道は註釋による事である。

それは、すぐれた音楽の鑑賞家が鑑賞した様に、私共も鑑賞しようといふ事である。すぐれた鑑賞家が如何に音楽を鑑賞したかを書き誌したものが、つまりその音楽の註釋である。私共はその註釋をたよりに、註釋の教へる様に、音楽を聞かうといふのである。

たとへば、ベートーヴェンの第九ジュフォニーを、ワーグネルが鑑賞した様に鑑賞しても、

それは決してわるくはないであらう。ワーグネルは實に近代の大音楽家である。音楽の精神を最も深く理解した人の一人である。そのワーグネルが第九ジュフォニーを聞いたとほりに、私共も聞く事が出来るなら、それで私共は十分に満足してもよからう。

もちろん、第九ジュフォニーには、『ゾナーテ・アバシオナタ』についてゐた様な雑報はない。ワーグネルもベートーヴェンの生涯の歴史を追憶しながらこの曲を聞いたのではない。ワーグネルはベートーヴェンとは全く縁のない事がらを考へながら、この曲を聞いたのである。それはゲーテの『ファウスト』である。つまり、私共が、前に『ゾナーテ・アバシオナタ』を聞くときにテレーゼとの戀を考へた様に、第九ジュフォニーを聞くときには、ゲーテの『ファウスト』の事を心に思ひ浮べようといふのである。

たとへば、私共は、第九ジュフォニーの第一章の意味は、『歡喜を渴望する心。地上の幸福を破壊するあらゆる敵に對して屈せざる心の奮闘である』と考へる。その第一の主題が聞える時には、――

『闕乏に堪へよ、忍べよ』

といふ詩の句に現はされた様な事を心に思ひ浮べる。曲がだん／＼に進むに従つて、私共はファウストと共に、陰慘な、絶望の底にある様な氣持になる。或は私共自らファウストとなつてこの曲を聞いてゐると考へる。

『己は毎朝恐怖の念をして目を醒ます。

.....

また夜闇が下界を包みに降りて來ても、

己は恐る／＼身を臥所に倒す。

そこでも甘寐の安さを食ふことは出來ずに、

恐ろしい夢に驚かされる。』

かうして第九ジュフォニーの第一章を、退屈せずに、氣を散らさずに、そしていつも心を音楽の上におく様にして聞かうといふのである。

音楽が私共に與へる感情は、もちろん、非常にわかりにくい。悲しいか、嬉しいか、非常に曖昧である。然し、私共が、『ファウスト』を読んで、あらかじめ心の中で用意をしておけば、

音楽は全くその様に聞えて来る。いはんや、大作曲家ワーグネルがその様に感じたからには、第九ジュムフォニーの第一章は、正にこの様な感じを起すべき曲であらう。そしてその第二章も、第三章も、第四章も、みなワーグネルが『ファウスト』の詩の句を説明したとほりに聞くべきものであらう。それで、もし私共が、第九ジュムフォニーを聞いて、この『ファウスト』の詩の様な氣持ちになり、またファウストの事などを考へて、それで私共の頭の中が始めから終りまで一ぱいになつてゐたならば、それは誠にけつこうな事である。その時こそは、私共は第九ジュムフォニーを十分に享樂したと言はれるであらう。私共がこの様にして音楽を聞いたら、この聞きかたこそ、或は全く藝術的だとも言はれるかもしれない。

しかし、それにもまた、多少の困難がないではない。まづ『ファウスト』の詩の句が短かすぎる事である。ワーグネルが引用しただけの數十行の詩の句だけでは、實際の場合には、音楽の幾小節ぶりにもあたらない。ワーグネルの意志も、もちろん、この詩の句だけを音楽と同時に考へるといふ事ではあるまい。その章の大體の氣もちを、たゞこの詩をかりて言ひあらはし

たものである。その章を聞くときは、まづ大體その詩の様な氣もちで聞けばいゝ、といふ、いはゞ聞き方の目安を示した様なものである。または音楽の表はす感情が非常に曖昧であるから、その曖昧な處を、よく私共にわかる様に説明しただけの事であるとも考へられる。従つて實際の場合には、も少し何か内容になる事がなくては、とても私共の頭は、これだけでは決して一ぱいになりきれない。

それで、も少し詳しく楽譜をあげて、音楽の内容になる様な註釋を書いたものもある。音楽を聞くときに、曲の進むに従つて、それに適したいろくいな光景を頭の中に描いたらよからう、といふ様な一種の忠告である。またはその章の大體の感情を説明して、聴衆はかういふ様な感情で聞くべきものだ、と教へてゐる。私共は今ベートーヴェンのジュムフォニーを例にとつたが、それならばマルクスやノールの『ベートーヴェン』を讀めば、私共はその様な例を到る處に發見する。或は有名なクレッチェマールの『音楽堂案内』もその様な例に満ちてゐる。大ていの場合に、音楽の説明とか、解釋とか言はれるのは、この様な仕事を意味してゐる。曲の大體の感情を説明し、そしてその感情に適合する勇士の奮闘だとか、戀の悶えだとかいふ様な内容を

想像する事である。

これはワーグネルが、たゞ『ファウスト』の詩の句を引用したのよりも詳しくて、そして内容にも富んでゐる。曲を聞きながら、かうした人生の場面を考へて、それで頭が一ぱいになつてゐれば、それも或は藝術的な音楽の聞きかたかもしれない。また実際には、多くの人はかうして音楽を聞いて満足してゐるかもしれない。私共も、或る場合には、この様な場面を想像し、十分に面白く音楽を楽しんでゐる。

しかし、これでは満足してゐられない人も必ずあるに違ひない。その第一の理由は、いかに細かい註釋にした處で、やはり、とてもそれだけで音楽を聞く時の私共の頭は一ぱいになつてゐない事である。たとへ第三ジムフォニーの様にナポレオンを描いたとわかつてゐる曲でも、第六ジムフォニーの様に田園の光景を描いた曲でも、とてもその内容だけで、一時間近い演奏を聞いてはゐられない。結局ワーグネルの詩の句の引用とあまり違はない、といふ事になる。

また他の満足しない人々はさう言ふであらう。——そんな註釋は馬鹿々々しい。なるほど、これも一理ある言ひ分である。私共も、そんな註釋を讀むと、ちよつと馬鹿々々しいといふ氣

もちもしない事はない。この馬鹿々々しいといふ氣もちを起させるのは、註釋があんまりでた
らめである事である。ベートーヴェンはそのジムフォニーのどこにも決してそんな事の標題を
書いてゐない。またベートーヴェン自身も、この曲はかういふ事を考へながら聞くものだ、と
は決して言つてゐない。全く註釋者が勝手に作り上げた勝手な註釋である。ベートーヴェンの
少しも知らぬ事である。ベートーヴェンと少しも關係のない事である。この作曲者の意志と少
しも關係のない勝手次第な註釋といふ事が、私共に馬鹿々々しく思はれるのである。そして大
批評家でもなく、大音楽家でもない音楽記者の勝手な空想を、私共は必ずしも眞似なければな
らぬといふ事はない。その上に、この様な註釋は、どの曲も、どの曲も、大てい同じ様な事
なる。私共が正直に註釋をよんでゐると、幾度となく、勇士だの、運命だの、戀だのに出會つ
て、忽ち飽きる。それから、馬鹿々々しさが湧いて來る。

たゞ、近頃發展して來た標題音楽だけは、こゝに、もう少し詳しく考へて見る必要があるかも
しれぬ。たとへばリストの『ジムフォニーの詩』や、シュトラウスの『音の詩』の様なもの
である。それならば、些くとも、内容の單調な事からはまぬかれられる。彼等の音楽の標題は、

或はシルレルやラマルテーヌの詩であつたり、或はニーツェの哲學であつたり、ドイツの古い物語であつたり、或はアルペンの山の光景などである。ありふれた勇士だの、運命だの、戀だのいふ註釋よりは遙に文學的である。私共がリストのジムフォニーを聞きながら、シルレルの『理想』の詩を考へたり、シュトラウスのジムフォニーを聞きながら、ティル・オイレンシュピーゲルの物語を思ひ出したりする事は、私共の耳を樂しませると同時に、確に私共の心の内容を豊富にする。些くとも私自身は、音樂にはこの様な標題のついてゐる方が面白いと思ふ。またその方が遙に親しみやすくもある。どうせ私共普通の聴衆は、音樂を聞きながら何事かを考へないではゐられない。同じ何事かを考へる程なら、作曲家がこれを考へてくれと註文した事を考へるのが、一番安心な方法である。それには少しも不安がない。

言ふまでもなく、これはたゞ五十歩と百歩の違いである。一方から考へると、いかに標題がシルレルの『理想』の詩であらうが、いかに内容がオイレンシュピーゲルの物語であらうが、それはたゞ標題だけのものである。その内容がシルレルの詩や、ドイツの古い物語であつて、決してそれより外のものでない、といふだけの事である。いざ實際にこの曲を聞くとなつたら、

やはり註釋がいるかもしれぬ。この音樂のどこがシルレルの詩の句にあたるか、オイレンシュピーゲルのどの物語にあたるか、そんな事は譜には書いてない。それは全く私共の空想にまかせるか、或は誰か音樂記者の註釋によるより外にはない。さうなつたら、つまり標題のないベートーヴェンのジムフォニーを聞くのと、さう大した違いはないといふ事になる。やはり、でたらめの註釋がいる、といふ事になる。たゞその註釋の標題だけが作曲家から與へられてゐるだけの違いである。しかし、私には、それだけでも有る方が無いよりも遙にいゝ様に思はれる。もちろん、すべて程度の問題である。

要するに、音樂を註釋で聞く事も、或る處まで私共を満足させるだけである。私共が尊敬する大批評家、大音樂家の書いた註釋は、大てい簡單すぎる。それだけでは、私共の頭は決して一ぱいになりきらぬ。音樂記者の書いた細かい註釋は、實際馬鹿々々しくて、私共は、多くの場合には、それによりたくない。標題音樂ならば、いくらかいゝかも知れないが、しかし、それもやはり程度の問題にすぎない。

私共は、何か少し外の方法を考へなければならぬ。

六、内省

36

雑報や註釋より外に、まだ實際に音楽を聞く方法があるであらうか。

私はもう一つあると思ふ。もう一つ註釋の方法があると思ふ。それは他人の註釋による代りに、私共自身が註釋を作る事である。私共自身が勝手次第に註釋をつけて聞く事である。

音楽は、とても内容の註釋なしには聞かれない。それなしに聞かうとすると必ず氣が散る。そして退屈する。しかし、私共が信賴する藝術の大家の書いた註譯は短かすぎる。細かい註釋を書いたものは馬鹿々々しい。それならば、始めから音楽は必ず氣が散るものである、退屈するものである、ときめておけばいゝ。さうきめた處で誰からも叱られる氣づかひない。誰も私共を叱る權利をもつてゐるものはない。たゞ私共自身が、それでは何だから藝術の神聖を汚す様に感じれば感じるだけである。

さう感じる人は、音楽を聞く間、なるべく氣を散らさない様に努力する事である。もちろん、

人が違ふだけ、その努力のしかたも違ふであらう。或る人は、注意を音そのものに集めて、なるべく音の快い刺戟を樂しまうとするであらう。あゝ美しい音だ、あゝ面白いふしだ！——出来る限り、絶えずさう思つてゐるべき。そして、もはや、さう思へなくなつたら、それはそれまでの事である。

或る人は音楽を聞く間、自分の過去の經驗を追想するであらう。早い、愉快な章には、昔の樂しかつた生活を想ひ起すであらう。靜かな、物哀しい章には、不幸の多い今の身の上を考へて、思はず涙を落す事もあらう。その間には、或は昔の戀人の面影も、ありくくと眼の前に浮んで來るであらう。或は昔訪ねた遠い異國の春の野、秋の山の姿もありくくと眼に見えて來るであらう。或はなつかしい昔の友の聲をも聞くであらう。或は亡き父母と昔を語る思ひもするであらう。そして私共は、この果敢ない人生について、いろくくと考へて見る様にもなるであらう。音楽の音の與へるいろくくさまざまの刺戟と、それから起る氣もちは、もし聞く人の方で十分に努力するならば、この様ないろくくさまざまの聯想の種になる事が出来る。そして逆にこの聯想をすべて音楽の中に投げこんで、この音楽は實に昔の戀人の面影を描き、昔遊んだ

37

異國の風物を描き、昔の樂しかつた家庭を描いたものである、といふ事も出来る。私共が、たとへばベートーヴェンのジムフォニーに、勝手にこの様な私共の聯想を投げ入れて、それを私共の戀人の曲、私共の昔の家庭の思ひ出の曲として聞いても、やはり別に誰からも叱られるわけではない。誰にも叱る權利はない。そして、そのために、私共がベートーヴェンのジムフォニーを、割合に氣を散らす事が此く、熱心に聞く事が出来るならば、それもまた音樂を聞く方法であるに違ひない。また、もしベートーヴェンのジムフォニーが、私共にこの様な冥想や反省の機會を與へ、そして私共にこの人生に就て何事かを考へさせるものならば、ベートーヴェンのジムフォニーは、正に高僧の説教の様なものである。そしてこの説教は耳に聞いて非常に愉快なだけ、たゞの説教より面白いわけである。

しかし、ベートーヴェン自身と何の關係もないといふ點では、これも前に述べた註釋と全く同じ事である。ベートーヴェンはその第九ジムフォニーで、例へばワーグネルが引用した様な『ファウスト』の詩の句を描寫したわけでは決してない。その様に、ベートーヴェンは、その第九ジムフォニーで私共の戀の悶えや、生の悩みを描いてくれたわけでも決してない。私共が

この大曲を聞いて、それに勝手に私共の生活を聯想するのは、前のいろ／＼な註釋を聯想するのと、そのでたためである事にかけては全く同じである。ベートーヴェンの決してあづかり知らない處である。

しかし、また考へ方によつては、ベートーヴェンは、私共にさうさせるためにこそ、その音樂を作つた様でもある。私共の感情に何の關係もなく、私共の生活と全く没交渉なものならば、たとへばベートーヴェンのジムフォニーの音樂上の構造がどれほど美しくても、彼の作曲上の技巧がどれほどすばらしくとも、それは私共にとつては意味の些ないものである。私共にとつては全く死物である。私共がベートーヴェンの音樂に興味を感じるのは、たゞそれが私共の心の生活と深い關係があるからである。そしてその深い關係といつても、それをよく碎いて考へるならば、結局その音の面白さと、そしてその音が私共に與へるいろ／＼な聯想の豊かさが一番重要なものであらう。前に述べた様な註釋も、それは私共の生活にベートーヴェンのジムフォニーを一番近くもつて來ようとする方法である。その註釋のファウストや、運命や、争鬭や、戀などが、私共自身の生活の一種のジムボルである。そのファウストや勇士は、つまり私共自

身である。その運命の争闘は、つまり私共自身の運命の争闘である。その戀の悶えは、つまり私共自身の戀の悶えである。私共はさう思つてこの註釋によりながら、音楽を聞いてゐる。それではなくては、百の註釋も千の解釋も、何の役にも立つはすがない。そして音楽も、さうして聞いてこそ始めて私共の心と本當に關係のあるものになつて来る。私共の藝術となつて来る。

それならば、この註釋によらないで、私共の生活を直ちに音楽から聯想するのは、たゞ直接と間接との違ひがあるだけである。註釋の勇士によらずに、直ちに私共自身を聯想する事である。結局、根本に於ては同じ事である。つまり私共自身を音楽と同時に聯想する事である。そしてこの音楽には、私共自身が一番深酷に描かれてゐると思ふ事である。またベートーヴェンも、私共にさう思はせるためにこそ、さうした感情を與へるためにこそ、その音楽を作つたのであらう。それならば、註釋は一種の豫備練習で、それによつて段々と私共は音楽を聞く事を學び、そして遂にはそんな間接な方法によらずとも、直接に私共自身の心、私共自身の面影を音楽の中に聯想する事が出来る様になる。そしてそれが恐らく私共が音楽を聞く最後の段階であらう。私共が音楽をこの様に聞けるならば、それ以上に音楽を享樂する餘地は殆どないであらう。

らう。

よし一曲の處々には氣が散つて、注意がぼやけて、印象に殆ど何も残らぬ處があるにしても、大體でその曲が私共にこれほどの心の働きを惹き起したならば、恐らくそれは音楽の非常な成功であらう。音楽は音楽であると共に、高僧の説教ともなつたのである。たゞ聞く人々で、各各その追懷や冥想の内容は違ふ。つまり一曲のベートーヴェンのジムフォニーは、百人の聴衆には百人の高僧の説教として聞かれる、といふ事になる。従つて、誰か、もしベートーヴェンのジムフォニーとはどんなものか、と問ふたならば、百人から百色の違つた内容の答が出るわけである。そして、ベートーヴェンのジムフォニーとはこんなものである、と誰にでも言はれる様な、一定した動かない内容はない、といふ結果になる。それもいさゝか心細い結果である。私共はいつも一般的なもの、普遍的なもの、一定不變のもの、永久に變らぬものを欲してゐる。それは殆ど人間の性質である様に見える。しかし、音楽といふものが、始めから、さういふ一定不變な、一般的な内容のないものなら、どうもしかたない。たゞ誰の耳にも快感を與へると

いふ事だけが、音楽の一定不變な、一般的な處であると思つて満足するだけである。そして、これで私共が音楽を聞く聞きかたは、まづ一とほり盡きてゐる様に見える。音楽はたゞ耳を悦ばせるものとしてカフェーで葉巻を吹かしながら聞くか、或はそのつもりで音樂會にも出かけに行つて、音楽だけを聞いて退屈するか、或はその退屈を防ぐためにいろいろな内容の註釋をつけて聞くか、——まづその外には、しかたもなささうである。退屈を防ぐために、或は歴史を讀み、或は註釋を讀み、或は深く藝術や人生を考へて見ようとする人は、もちろん、さう澤山にない。そして、それが音楽の世界の普通一般の住民である。

言ふまでもなく、音楽の歴史や、音楽の逸事や、いろいろな註釋などは、音楽を聞くときの退屈を追ふために書かれてゐるわけではない。それは一種の學問である。智識の要求から書かれてゐるものである。音楽に興味のある人々には、その興味のある音楽について、さらに深く何か知りたいといふ様な要求が必ず起つて来る。それは、ちやうど私共が音楽を聞く時に、その内容になる何物かを知りたいと思ふ様なものである。そして、それがだん／＼と進むと、立派な音楽の學問になる。私は今この學問の領分から、いろいろな事をたゞ音楽を聞く時の註釋

としてかりて來ただけである。

今の日本に何千人かある普通の音楽の愛好者、音楽の國の普通一般の住民だちにとつては、これより以上に音楽を聞く道はなささうである。これでもまだ音楽は退屈なものならば、もうどうにもしかたない。退屈してゐるだけである。たゞ幸にして、人間の心には習慣といふものがある。私共が音楽を聞く場合にも、習慣が非常に役に立つ。始めは、なるほど、私共も音楽を聞いて退屈する。そして退屈しない様に、なるべく熱心に音楽を聞く様に、音楽だけに全心を集注する様に努力しようとする。しかし、實際には、それは、なか／＼さう考へ通りにうまくは行かない。人の心は實に複雑至極なものである。さう簡単に、さう自由に、私共の心が私共の思ふ様になるものではない。結局私共は、かなり熱心に音楽を聞いてゐても、心の状態はしばしば變るし、また氣が散つて、音楽は耳にはいらぬ事もしば／＼ある。これは人の心の自然で、どうもしかたのない事である。

たゞそれが何度も何度も繰返へされると、私共はその様な心の状態に馴れきつてしまふ。氣

が散つても、音が耳にはいらなくなつても、しらすく音楽といふものは、つまりこんなものだ、と思ふ様になる。別に熱心にその内容を求めなくとも、我慢出来る様になる。たまには曲目の紙で紙鶴を折る事があつても、それが少しも氣にならなくなる。そして氣が散つたり、注意が薄くなつたりして、殆ど穴だらけなジュフォニーの印象を得ても、それで立派にこのジュフォニー一曲を聞いたと思ひこむ様になる。全く習慣の力である。そして私共多くの音楽會訪問者は、まづこの様にして音楽を聞いてゐる、と言つても、それは非常な間違ひではあるまい。

七、音楽の構造

私共は、これでまづ一とほり、私共が音楽を聞く時の心の中を考へて見た。しかし、最後に、もう一つ、他の一群の音楽愛好者がある事を必ず見落してはならぬ。その一群の人々の數は、或は非常に些いかもしれない。また、その人々は、必ずしも私共と同様な普通一般の音楽愛好者の中には數へられないかもしれない。この人々は、私共の様な單なる音楽愛好者と音楽専門

家との中途にゐる人々である。即ち、音楽の音そのものに、心の大部分を傾けて聞く人々である。音そのものゝ印象で、頭の中を殆ど一ぱいにする事の出来る人々である。

たとへば、私共が演説を聞くならば、たゞその演説の意味がわかりさへすればいい。しかし、特に演説のしかたに興味をもつ人ならば、或は自分でも演説をして見ようといふ人ならば、ただその意味がわかつたばかりでは物足りない。必ずその演説のしかたに氣をつけるであらう。あの言葉をどう言つたとか、あの文句をどう話したとかいふ様な事が、この人々に取つては非常に大切な事になつて来る。演説の内容などは、結局どうでもいゝ事になつて来る。大切なのは言葉づかひや、語氣のめりかりなどである。

この例は決して適切なものではない。演説には、必ずその内容があつて、それを聴衆につたへるのが第一の目的である。誰もそれには異論はない。言葉づかひや、語氣のめりかりに特に氣をつけるのは、よく／＼稀な場合である。實際には、私共は殆どそんな事は経験しない。

音楽は演説とはよほど違ふ。音楽には演説の様な意味のある言葉がない。第一に大切なものはその内容である、とは決して斷言出来ない。その内容が何であるか、誰にもよくわからない。

それどころでなく、演説にある様な確かな内容が音楽にもあるか、ないかさへも、誰にもよくわからない。第九ジュフォニーを演説だと思つても、それが何を言つてゐるのか、決して誰にもわからない。わからないからこそ、前に述べた様に、いろ／＼な註釋が必要になつて来る。それほどならば、そんな註釋などにたよつて、極めて曖昧な内容を感じる代りに、誰の耳にも、これだけは明瞭に聞える音それ自身に心を集注して、音そのもの、面白さを主として楽しまうといふ人々も出て來てもいゝはずである。音楽といへば、實は音そのものである。これこそまぎれのない音楽の本體である。この音そのものだけに心を集注するのも、確に音楽を聞く一つの道であるに違ひない。

音楽の音が耳に聞いて氣もちのいゝものである事は、私共が已にカフエーで聞いてわかつてゐる。その上にも、なほこの音に心を集注するといへば、今度はその音を詳しく知るより外に方法はない。つまり音楽の音に心を集注するといふ事は、ぼんやりと耳に聞いて氣もちのいゝ音を、つぎには智識の上からその音を知つて、知るといふ事の楽しさを味はうとする事である。これはなか／＼容易でない。ちやうど私共が日本語の演説を聞いて、その意味を知る事は何で

もないが、その言葉づかひや語氣のめりかりを一々知るのは、なか／＼容易でないと同じ事である。それには、それ専門の學問をしなければならぬ。

音楽の音を知るには、私共はせひとも和聲學を一とほり心得てゐなければならぬ。和聲學を少しも知らぬ人の耳には、音はたゞ氣もちのいゝ刺戟である。たゞ氣もちがよく聞える、といふだけで、それが何の音か、何といふ名か、そんな事は全然わからない。和聲學を心得た人の耳には、音は氣もちのいゝ刺戟であると同時に、その音は一定の名の付いた存在物である。一定の名が付いてゐる以上、その音は決して外のどの音ともまぎれない存在物である。つまり確に私共の頭で認められた存在物である。それは私共が路傍で名も知らない赤い花を見た時と、私共が薔薇の花を見た時との違ひである。路傍の赤い花も、もちろん、きれいであらう。しかし、たゞそれきりの事である。何だかわからないし、また何にでもまぎれる。薔薇の花は私共が明かにその名を知つてゐる。そして薔薇は薔薇であつて、決して堇でもなければ、櫻でもない。つまり私共は路傍の花は知らないが、薔薇の花は知つてゐる、といふ事になる。そして知らない花と知つた花とは、きれいな事は別として、私共の頭に花として印象されかたが違ふ。

音楽でも、音を知つてゐるのと知らないのでは、ちやうど、この様な違ひがある。

薔薇の花は、一度これは薔薇だと思つたら、それでおしまひである。それ以上には、何時間見てゐても、別に變つた事は起らない。しかし、音楽の場合は、それとは違ふ。音一つ一つは、かなりの早い速度で、どん／＼流れて行く。たとへば、薔薇の花や、葦の花や、櫻の花や、千種萬種の花が入り亂れて、私共の眼の前をどん／＼通つて行く様なものである。その時に、これは薔薇の花である、これは葦の花である、これは櫻の花である、といふ事を、はつきり見定めるには、前に十分にそれ／＼の花を見て知つておかなくてはならぬ。それはなかく／＼容易な事でない。しかし、その智識がなかつたら、たとへば何だか知らないがいろ／＼な花を見た、といふ極めてぼんやりした印象より以上のものは得られない。

そして、まだそれだけではない。音楽では、その音一つ一つがつながつて、長い一章が出来てゐる。その一章のうちには、また節もあれば句もある。それには、それ／＼の組み立ての型がある。また大きな曲になると、たとへば一章きりでない。三章も四章もあるのがある。そしてその章毎に、またそれ／＼組み立ての型がある。音一つ一つを知つたら、次ぎには、どうしても

花束の型

この組み立ての型を知らなければならぬ。それを全體知つてからでなければ、音楽の形は十分にはわからない。音楽の形がわからないで、音楽を聞けば、すべてが名も知らぬ千種萬種の花束が、ちら／＼と眼の前を通り過ぎた／＼なる事になつてしまふ。實際の花束の數、花びらの數と、私共の印象に残つた花束の數とは、誠に比較にもならぬ大きな差が出来て来る。千の花束を見ても、十の花束を見た／＼にしかあたらぬ。

もし音楽の音の一つ一つを明瞭に知つて、その組み立ての型を心得て、それに心を十分集注して音楽を聞く事の出来る人があるならば、それは音楽の愛好者としては、恐らく、最高級に頭をつかふ人であらう。この人には、千の花束は正に千の花束と見える。その各々の花の名も明かにわかつてゐる。その多くの花束の花びらの數まで讀めるかもしれぬ。とても普通の人の眞似のできない、むづかしい心の働きである。音楽の學問をした専門家だけには、或はできるかもしれないといふ様な、非常にむづかしい心の働きである。

しかし、人の心の働きには限りがある。もしこの人々の様に、音そのものや、音楽の構造を明かに聞く事に努力すれば、注意はそれ集注して、音楽の與へる美しい感じを享樂する事は、

よほど疎かになるかもしれぬ。音楽はよほど智識的なものになつて、感情に訴へる部分は、非常に些くなるかもしれぬ。花束の花が何種あつたか、何の花が何色であつたか、といふ様な事ばかりに氣をとられてゐたら、その花束の美しさを味ふことはよほど些くなる。そして、もしその花束を知る事の方が非常に興味をひいてくれば、その美しさを味はうといふ様な事は、結局どうでもいゝ事になるかもしれぬ。そんな事は素人どもに任せて置いて、自分は素人には夢にも出来ない構造の妙を味はう、といふ氣になるかもしれぬ。もし構造の妙をも味ひ、その全體の美しい感情をも味はうと思ふならば、まづ構造の方は非常に容易に頭にはいる様に練習しなければならぬ。それには殆ど力を用ゐなくても、一度聞けば、その構造は、隅から隅まで、手に取る様にわかる様になつてゐなくてはならぬ。それでなければ、とても、その上に、ゆつくりと全體の感情の美しさを享樂する餘裕は出て來ない。そしてそれは非常にむづかしい。私共普通の聴衆の企て及ぶ處でない。

これで、いよいよこの章の終りが來た。私共は、音楽を聞くときの私共の心の中を、殆どあ

らゆる場合に見て來た。

私共は音楽をどう聞かうと、それは私共の勝手である。そして如何に努力しても、私共は、私共の心の能力相當に音楽を聞く事が出来るだけである。心の能力以上に、音楽を理解したり、享樂したりする事は、それは全然出來ない事である。

私共は、恐らく、以上述べたいろくの場合を、みな少しづつ経験してゐるのであらう。私共は、もちろん、音楽の音をきれいだと思つてゐる。音楽の音を聞けば、いつも愉快な氣もちになる。そして、それと同時に、何か知ら聯想をする。それは或は音楽家の事や、音楽の歴史の事などであらう。或は私共の生活の事や、或は藝術の驚嘆や、人生の冥想などもあらう。また多少心得た音楽上の技術の事を主として考へる場合もあらう。その間には、注意が外にそれて、音楽の音はまるで耳にはいらなかつた事もしばしばあらう。この様ないろく々な心の働きの裡に、一曲は夢の様に終つてしまふ。私共聴衆は、大てい、まづそんなものである。

たゞ私共は、決してなまじかの専門家にはなりたくない。せつかくのベートーヴェンの大ジムフォニーを、僅にその構造くらゐに氣を取られて、それでおしまひにしたくない。そんな事

をこそ、私共は喜んで専門家に一任する。私共には、そんな事など、實はどうでもいゝ。私共は音の名を特に知りたくない。どこの主題が何の調子でどう開展してゐるか、それが何といふ型であるか、そんな事は、よほどの餘裕でもあれば、聞いて置いてもいゝくらゐなものである。そんな事に氣をとられて、肝心な一曲の美しい感情を疎かにしてはならぬ。

私共は音楽に感激を求めぬ。美しい夢の世界を求めぬ。願くは私共の心の姿をジムフォニーの壯大な音の裡に描き出してもらひたい。私共のこの生活の有様を、あり／＼とゾナーテの美しい音の裡に表現してもらひたい。私共は音楽を聞いて感激したい。構造などどうでもいゝ。もし構造を明かに知らうとすれば、この感激が薄くなるものならば、私共は斷然音楽の構造は知りたくない。そんなものに氣を取られたくない。私共はやはり、第九ジムフォニーにはワーグネルの『ファウスト』の詩の句を思ひたい。クレッチマールやマルクスの註釋でもいゝ。とにかく、それでこの大音楽を私共の心の姿だと思ひたい。そしてその壯大なる音に、心の底から感激したい。夢中になりたい。涙を流したい。たとへジムフォニーと思つて序曲を聞いても、ゾナーテと思つてロンドを聞いても、少しも後悔しない。それでいかに専門家に笑はれても、

罵られても、少しも恐れない。私共は、音楽にはたゞ感激を求めぬ。美しい夢の世界を求めぬ。この感激こそ、この美しい夢の世界こそ、私共が他の何物にもかへようと思はないものである。

この章についての附記

私はこの章で言つた事について、なほ一つ二つの注意を書きそへて置く。それは或る種の讀者には極めて下らない事かもしれない。また或る種の讀者諸君には、多少参考になるかもしれない。私にはこの書物の讀者の種類は全然わからない。しかし、音楽について造詣の深い諸君にとつては、言ふまでもなく、この附記は何の用もないものである。

一、参考書

この章をよんだ諸君のうちには、さらに一步を進めて、この様な事について、自分も研究して見たいと思ふ人も或はあるかもしれない。研究といふほど大仕掛な事でなくとも、もう少し何か読んで見たいと思ふ人もあるかもしれない。著者には、どうしても、こゝで多少の参考書を

あげて置く義務がある。

しかし、それは實は非常な難事である。決して諸君の考へるほど容易な事でない。まづ私の讀んだ僅かな書物にしても、その全體をこゝに並べたら、それはかなり繁雜なものになる。そしてその上に、頗る本の體裁をきずつける。私の讀んだ書物は悉く外國の書物である。この縦書きの日本語の中に、幾ページか横書きの書物の名をあげる事は、見た目に甚だ不愉快である。そして、よしその書物の名をみなあげた處で、その書物はさう容易には諸君の手に入らないかもしれない。つまり諸君にも、著者にも、無駄な事である。また私の讀んだその書物の中から、諸君の手にも入りやすく、その上有名でもあるといふ様な處を少々選ぶ事くらゐは或は出来るかもしれない。しかし、それは著者にとつては甚だつまらない、退屈千萬な、微温的な仕事である。私はそんなお座なりな仕事には、寸毫の興味ももたない。

この書の讀者諸君のうち、十分に外國語が出来る人々のためには、——そしてその外國語の中でも、特に私の愛するドイツ語の出来る人々の爲めには、私はまづ左の一書をあげておく。

H. Riemann: Grundriss der Musikwissenschaft. 3. Aufl. 1918.

これはライブチヒのクエルレとマイル社の『ワイセンシャフトビルドゥンク科 學 と 教 養』叢書第三四編で、僅に一五〇ページに及ぶの小冊子である。そして、この書物は今から見れば、やゝ古くもある。しかし、その中には、音楽のいろいろな方面の事が、極めて手ぎはよく書いてある。そしてその上に、澤山の参考書があげてある。その参考書のあげかたも、甚だ要領を得てゐる。諸君が音楽の本を讀まうと思ふなら、まづこの書物の中にあげてある参考書から讀みはじめて決して間違ひない。

日本はシンガポールや香港の様に、何につけても英語でないといふ事が利かないらしい。しかし、私は、不幸にして、こゝに諸君のために、特にその名をあげようと思ふ様な英語の本を一冊も知らない。もとゞ私は英語なんかで音楽の事を學んだ覚えがない。もし強ひて英語の本の名をあげなければならぬとなれば、私は有名なグローブの『音楽辭典』をあげる。音楽に興味をもつ諸君は、この本を一部座右に置くのも非常にいゝ事であらう。とにかく何につけても便利な本である。

最後に日本語の参考書であるが、それをあげるのも、私にはなかく難儀である。恐らく、誰にとつても、なかく難儀であらう。最近、日本にも非常に澤山な音楽書が出版されるにはされた。諸君は銀座の楽器店に行けば、澤山な日本語の音楽書が、その書物棚を飾つてゐる盛大な光景をいつでも見る事が出来る。あの書物は一冊二冊と數へてゐるは、とても追付かない。むしろ三メートル、四メートルと書物の並んだ長さで計つた方が早い。しかし、この四五メートルの書物の中から、どれを選ばいゝかは、それは餘程考へものである。恐らく、その中には、極めて下らない本もあらうが、また必ずいゝ本もあるであらう。たゞ不幸にして、私自身がまだ何も讀んだ事もなく、従つて何も知らないといふだけである。私は、これまで、日本語の書物で音楽の事を學ぼうといふ様な氣は、曾て一度も起らなかつた。私は、日本の讀書階級の間に一般に音楽書も讀まれて、そして文學の本や、哲學の本や、或は科學の本が嚴重に批評されてゐる程度に、音楽の本も批評される様になる時期が、いつかは來てほしいと思つてゐる。

また、ラジオが初まつて以來、新聞のラジオ欄やラジオ版などに、音楽の解説が載る様になつた。その外にも、音楽會の曲目などに、わざわざ音楽の解説がつけてあるものもある。私はラジオさへも持たないし、音楽會の曲目解説なども、まだゆつくり讀んだ事がない。私は、それについても、責任のある事は言はれない。しかし、話に聞けば、それ等は何か外國の通俗的な書物によつて書かれたものが多いさうである。それならば、もしその通俗的な書物の紹介さへ間違つてゐないならば、諸君はその原書を読む勞力をはぶく事が出来るわけである。私は、この様な解説がなるべく正確に、そして十分に一般の人の信用を増す様に書かれる事を希望してゐる。音楽の通俗的な智識を求めてゐる諸君は、日々のラジオ版や、曲目解説などからも、恐らく何物かを得る處がないではあるまい。

二、樂譜

音楽會には樂譜をもつて行く方がよからうか。——私はしばしばさう問はれた。そして、そ

れは確に一考する價のある問題である。

私はベルリンの奏樂堂『フィルハルモ』で、幾度となく大管絃樂の音楽會を聞いた。この樂堂の入口では、その夜の曲目と共に、新作の譜はもちろん、オイレンブルク版の樂譜などを賣つてゐる事もある。しかし樂譜を見ながら音楽を聞いてゐる人は、いつでも極めて僅かであつた。それがピアノやヴィオリネの獨奏になると、樂譜を見る人はなほ些くなる。一般にベルリンの音楽會では、樂譜を見ながら音楽を聞くといふ様な習慣はないらしい。もし樂譜を見ながら音楽を聞く人があるならば、それは多くは専門家で、そして何か特に目的があつてさうするらしい。或る夜、若いピアニスト、ギーゼキングがフィッツネルの新作のコンチェルトを弾いた時に、有名なエドウィン・フィッセルは樂譜を持つて、非常に熱心にその演奏を聞いてゐた。また或る夜、フルトウエングレルがブラームスの第一ジュ・ファニーを指揮した時に、老碩學フリードレンデルは、ぼろ／＼に壊れたオイレンブルクを持つて來て、最後まで丁寧にページをめくつて聞いてゐた。この様な場合は、聴衆の中でも特に珍らしく目立つて見える。

ベルリンの音楽を愛する人々にとつては、樂譜などを演奏會に持つて來るのは、極めて野暮

くさい事かもしれない。それは私共が、たとへば、『勸進帳』の芝居を見る時に、普通にはわざわざ長唄の稽古本などを持つて行かないのと同じ事であらう。しかし、私共にとつては、音楽會には楽譜は全く必要でないとも言はれない。些くとも私自身は、音楽會には必ず楽譜を持つて行く事にしてゐる。そして私は、或る種類の人には、さうする事をすすめもした。

私共は、まだ、音楽に對して十分によく訓練されてゐない。音楽を聞く事が、まだ甚だ未熟である。私共が音楽會で一番困るのは、退屈する事である。氣が散りやすい事である。注意が音楽から外に逃げやすい事である。音楽などろく／＼耳にはいらないうで、何か他の事ばかり考へてゐる事である。目で楽譜を見ながら、それが今現に演奏臺の上から音になつて行くのを聞く事は、この逃れやすい注意をいつでも音楽の上に留めておく事には非常に有効である。私共は楽譜を見ながら音楽を聞くときの方が、何も持たないで、たゞ呆然と音楽を聞くときよりも十倍も二十倍もよくその音楽を耳に入れる事が出来る。そして譜の形から、多少でもその音楽の構造を知る事も出来る。とにかく、私共の心が音楽を聞く事に馴れるまでは、そして私共が長い曲でも、十分熱心に、初めから終りまで聞いて居られる様になるまでは、楽譜を見ながら

演奏を聞く事は決して悪くないであらうと思ふ。ちやうど、馴れない山道を歩く時には、陸地測量部の五萬分の一の地圖を見てゐる方が、今自分は何處に居るかといふ事がよくわかる様なものである。

しかし、楽譜を見ながら音楽を聞く人々には、もう一つまた別の理由があらう。それは智識の満足である。知りたいといふ要求の満足である。今現に耳で聞いてゐる音楽は、そも／＼どんな形のものであるか、どういふ組立て方から出来てゐるか、どこに段落があるか、どうしてこの曲は終るか、といふ様なことを、その音楽を耳に聞きながら頭の中では知らうとするのである。私共の性質が智識的であればあるほど、音楽に對しても、やはりその様な要求が出て來るものらしい。そして音楽に對しても、知りたいといふ要求が出て來た以上は、たゞ耳で音だけを聞いてゐるのでは、心はとても満足しない。ぜひ目でその楽譜を見たくなる。それは私共が散歩の時にも、陸地測量部の地圖をもつて行くのと同じ事である。それは、必ずしも、道を知るだけのためではない。道をよく知つてゐる場合でも、なほ一葉の地圖がほしい。そして今私共はこの地圖のどの點に立つてゐるか、あの岡まで何百メートルあるか、その何百メートル

は何分か、つたら歩かれるか、といふ様な事を知るのが非常に楽しみである。散歩と共に、知りたいといふ要求を満すことである。音樂會に樂譜をもつて行くのも、ちやうどそれと同じ事である。

それとはまた違つた性質の人々もある。

その人々はさう言ふであらう。——私共が散歩をする時には、地圖は全く邪魔物である。私共はどこを歩いてゐようと、そんな事は問題でない。私共はたゞ大自然の風物を楽しんでゐる。雲の飛ぶのを見、水の流れるのを見、野に咲く名も知らない小さい花が風に弄ばれるのを見、林の奥深くから幽かに聞えて来る鳥の歌を聞く。それで散歩の楽しみは十分である。それには地圖は、全く不必要であるのみならず、却つて邪魔になるばかりである。

そして音樂會に樂譜をもち込むのも、ちやうどその通りである。それで音樂の感銘は半分に減じる。音樂の興へる空想の楽しさは殆どなくなつてしまふ。音樂の美の大半は消えてしまふ。音樂に智識は不必要なものである。却つて邪魔になるばかりである。音樂の生命は感情である。

感激である。音樂は樂譜などを捨て、たゞ全身の感激をもつて聞くべきものである。——かう主張する人があるならば、それも實に正しい主張である。私は、その様な人の心をこそ、まづ何よりも尊敬する。たとへば、あの有名な碩學ヤーダズゾーンはその『和聲學教科書』の中にも明かにその様に論じてゐる。樂譜は演奏會の前か、或は歸つてから後に見るべきものである、と教へてゐる。さうして、私自身も、もちろん、それが音樂を聞く最上の方法であらうとは思つてゐる。音樂を聞きながら、知るといふ心の働きをも樂しまうとするのは、それは或は邪道かもしれない。氣を音樂より外に散らすまいとするために樂譜を見る習慣が付き、それから自然に馴致された極めてつまらない心の働きかもしれない。

その上に、樂譜を見てゐては、全く音樂會を見る事が出来ない。音樂會はまた見るものである。指揮者の指揮杖の躍る有様や、管絃樂隊が各々の樂器を演奏する有様は、確に、目に見ても愉快である。人の心に或る昂奮を興へ、或る感激を興へる。それが有名な獨奏者の場合であつたならば、目のあたりにこの名人を見る感銘は、恐らく非常に深いものであらう。樂譜を

見てゐる人には、その様な人間的な感銘は全く縁のないものになる。考へると、それも大きな損失である。

また、もし、この楽譜を見る人が、十分に楽譜に馴れてゐない場合には、それこそ實に情ない有様になる。オイレンブルクの楽譜を管絃樂の演奏と共に讀んで行くには、多少の熟練がいる。その熟練がなかつたなら、俄ち譜がわからなくなる。今管絃樂は譜のどこをやつてゐるか、全く見當がつかなくなる。その時の狼狽さは、側で見ても氣の毒である。あの人は譜をもちながら、それが讀めない、と思はれるのは、並んでゐる周圍の人々に對して、きまりも悪からう。さうなつたら、音樂はこの人の耳にははいらぬ。却つてオイレンブルクが恨めしくなるくらゐのものである。こんな目を見るよりも、楽譜を持たない方が遙にいい。

よし演奏と共に、完全に最後までオイレンブルクのペーヂをめくつたにした處で、私共が譜で見るのは、まづ大ていろいろな樂器のメロディやフィグールだけである。あの十數段の樂譜から、その和絃の構造までを、演奏を聞くと同時に頭に入れる事は、殆ど出来にくい。それどころでない。演奏會から歸つて、そのオイレンブルクの楽譜をピアノで弾いて見ようとして

も、それが已になかく、容易な事でない。それであるから、楽譜を演奏と共に讀むと言つても、普通はその讀む事は、楽譜の全部に對しては、ほんの僅な部分である。それくらゐならば、いづれも楽譜がない方がいゝかもしれぬ、とも言はれよう。

これで私は、一通りは楽譜についての問ひに答へたと思ふ。楽譜を見ながら音樂を聞く事のいゝ點も悪い點も一通りはのべたと思ふ。私自身は、どうしても性質として、また習慣として、今俄には楽譜からは離れられない。しかし、讀者諸君のうちには、斷然楽譜を見捨てる人もあらう。すべて人々の性質である。意見の相違である。どれが正しいとも、俄に判斷は出来ない。たゞ私は明瞭にさう言ふ事だけは出来る。——私自身も、だんく樂譜から離れて行きたい。楽譜なしにでも、完全に演奏を聞き得る様になりたい。それが私自身の音樂を聞く聞きかたの希望である。

第二批評家

„Kritiker und Recensent ist zweierlei; jener steht dem
Künstler, dieser dem Handwerker näher. —”

Schumann.

批評家、——それは私には、何故だかわからないが、非常に不愉快な言葉の様に聞える。極めて下らない仕事をしてゐる人の事の様に聞える。藝術家が一生懸命骨を折つてする事を、そばから懐手をして見ながら、しかも、それをかれこれと言ふ人の事の様に聞える。しかし、藝術の世界には、この批評家といふものが必ず住んでゐる。音楽の世界にも、必ず音楽批評家といふものが住んでゐる。一體、何故に音楽批評家などいふものが必要なものであらうか。彼はそもく、どんな役目をする人なのであらうか。本當に、音楽の批評家なしには、音楽の世界は成り立たないものであらうか。私は諸君と共に、音楽批評家の仕事を、少々考へて見よう。

一、註釋をする人

批評家は、まづ第一に註釋をする人である。私共聴衆に音楽の内容を詳しく話して聞かせる

人である。

私共聴衆にも、音楽は耳に愉快には聞える。しかし、それが何の意味であるかは、全くわからない。音楽は、たゞ美しい音の塊である。それでも、私共は、たゞ耳に愉快だといふだけではすましたくない。何か音楽に關係する事を考へて、頭の中を、いつでも、一ぱいにしておきたい。或は今現在にこの音楽を聞いてゐる私共自身自身の心をよく考へて、音楽を高僧の説教の様なものにもしておきたい。それが私共聴衆の望である。そしてこの望をかなへてくれるものが批評家である。批評家が、私共に、この音楽に關係するいろ／＼な内容を話してくれる。そして、それで私共が音楽を聞く時の頭の中を一ぱいにさせてくれる。或は批評家はその音楽と私共の心とをよく結び付けてくれる。結び付ける方法を教へてくれる。そして音楽を、私共にとつては、高僧の説教の様なものにもしてくれる。

それはワーグネルが、第九ジューフォニーについて『ファウスト』の詩の句を引用して説明した様なものである。或はクレッチェマルや、ノールや、マルクスなどが、いろ／＼にベートーヴェンのジューフォニーを解釋した様なものである。或はロマン・ローランが、英雄としてベ-

ートーヴェンを描き出した様なものである。これ等は、私共が見た甚だ優れた音楽の批評である。

批評家は、つまり最上級の聴衆である。

彼等は、まづ、音楽の要素である音の美しさを十分に楽しむであらう。私共普通の聴衆が、その美しい刺戟に飽きる頃にも、彼等はなほ飽きずに、じつと聞いてゐる事が出来るであらう。私共が、ぼつ／＼、曲目で紙鶴を折りたくなつたり、欠伸を噛み殺したりする頃には、彼等はますます深く、ますます熱心に、音楽の音に聞き入るであらう。私共と同じに、忽ち氣が散つてしまふ様では、とても批評家の役目はつとまらない。彼等には、特に、音楽の音に、長く、そして強く、注意を集注してゐる事の出来る様な能力がある。

しかしそれだけでは、もちろん、まだ事は足りない。批評家はその音の美しさに相當する様な内容を考へなければならぬ。またその美しい音楽が、どんな種類の感情を惹き起すか、まづ自らそれを十分に感じなければならぬ。或はこの感情を感じる方が第一であつて、後からその感情に相當する様な文學的な内容を考へるのかもしれない。或は特に文學的な内容を考へ出す代

りに、批評家自身の心の有様を物語つてもいい。この音楽が彼等自身の生活のどんな事を想ひ起させたか、どんな経験を聯想させたか、どんな事を教へたか、それを明かに私共に話してくれてもいい。それを明かに話す代りに、何か他の物をかりて象徴して話してもいい。その象徴がありふれた勇士であつても、運命であつても、戀であつても、もしそれが批評家自身の心の経験を基礎としてゐるものであるならば、それは、いつも、私共に、いき／＼として感じられるであらう。ロマン・ローランの名著『ベートーヴェン』が、いつも深く私共の心を打つのは、全くそのためである。ワーグネルの第九ジュフォニーの解釋が、いつも深く私共の心を満足させるのも、全くそのためである。

批評家は、つまり最も完成した聴衆である。聴衆の役目を十分に果す事の出来る聴衆である。そして、彼等は如何にその役目を果したかを私共に話してくれる。私共はこの代表的な聴衆が音楽を聞いた様に、その先例にならつて、安心して音楽を聞く事が出来る。またその先例を見て、それでよく音楽を理解する事が出来る。もし、ワーグネルや、クレッチェマルや、ロマン・ローランなどが、私共のために、その著書を書いてくれなかつたならば、私共はベイトー

ヴェンの音楽を、今の十分の一ほども理解する事は出来なかつたであらう。今私共がベイトーヴェンの音楽として享樂する事の出来るものは、實はベートーヴェンと批評家との合作の様なものである。ベートーヴェンは音楽を作つた。そして批評家は、それを私共に教へた。

批評家は誠に完全な、最上級の聴衆である。そして、私共は、とても、その様に完全に音楽を聞く事は出来ない。批評家は私共一般の聴衆のとても登り得られない様な最上の階段に立つてゐる。

その最上の階段は、藝術家の世界につながつてゐる。批評家は藝術家と、たゞ一步離れて立つてゐるだけである。それだから、批評家には作曲家の事が手にとる様にわかる。作曲家がどんな氣もちでこの曲を作りあげたか、この曲の中には作曲家のどんな夢が織り込まれてゐるか、どんな努力の塊がかくされてゐるか、それを十分に感じる事が出来る。そしてそれを私共に詳しく話してくれる。それを直接に話してもわからない場合には、或は物にたとへたり、物語にしたりして話してくれる。私共はそれを聞くと、音楽家の心の中が一層よくわかつてくる。そ

して音楽に對して一層理解の度が深くなる。

批評家がどうしてこの様な階段まで登つたか、それは私共凡人にはわからない。私共は音に飽きる時にも、ますますその音に深く聞き入る事が出来る様な修養を、どうして積む事が出来たか、それは全く不思議である。もと／＼音楽の好きな人は、それは練習一つで、かなりの處まで出来る様になるものかもしれぬ。或はそれは天性で、練習などは天性の前には案外に無力なものかもしれぬ。そして、たゞ、この注意の集注ばかりでない。私共には、美しい音の塊としか聞えないジューフォニーに、或は勇士の面影を夢み、或は運命の威力を感じ、或は戀の幻を追ふといふ様な豊富な空想がどうして起るものか、そして、その物語や、その空想が、一々私の胸にひし／＼とこたへる様な力はどこから湧いて来るか、それこそ實に不思議千萬である。偉大な批評家の心の力は、私共にはたゞ大なる驚異である。考へる事も、推し測る事も出来ない奇異である。それは、ちやうど或る大藝術家に、どうして藝術家となつたか、と問ふ事と同じである。たゞ、なる様になつただけである。すべて人間界の不思議である。

批評家は、もちろん、私共一般の聴衆よりも、遙に、遙に藝術家に近いものである。しかし、また一方では、批評家は私共凡人と全く同じ世界に住んでゐる事の出来る人でなくてはならぬ。私共と同じ様な喜びを喜び、私共と同じ様な悲みを悲む人でなくてはならぬ。私共の生活の有様を奥底まで體驗した人でなくてはならぬ。それでなくては、とても私共の心と音楽とを結び付ける事は出来ない。それでなくては、彼等の物語、彼等の空想が、とても私共の心に徹底するわけがない。

昔からの大批評家は、實際この地上の生活の味を悉く嘗めつくした人である。ワーグネルが第九ジューフォニーに大なる光明を見出したのは、彼がこの地上の生活の中の惡戰苦闘をよく體驗したからである。それでなくては、救済のありがたさが決して彼の身にしみるはずがない。ロマン・ローランがベートルヴェンを英雄の如く描き出したのも、全くそれと同じ事である。この平凡な、俗悪な世の中をよく見盡したからこそ、そこに英雄の仕事といふ一大光明を投じ得たのである。彼等が私共と同じにこの地上の生活を味はつたのでなかつたならば、彼等は決して私共のために、私共の胸の奥底まで徹する文句で、その批評を書く事は出来なかつたであ

らう。彼等が私共の生活の仲間の一人でなかつたならば、彼等の批評の言葉は、私共には空虚な、意味のわからない、まるで価値のないものゝ様に聞えたであらう。

批評家は、一方では、確に私共の仲間である。しかし、また一方では、作曲家の仲間でもある。私共の仲間としては、批評家は私共の心もちをよく理解して、そして私共が音楽を聞いた時に、はつきりと自覚出来ないものをまづ自覚して、それを明瞭に私共に教へてくれる。私共が音楽を聞いた時の心もちを自分自身にも十分體驗して、そしてそれを一番適切に言ひあらはしてくれる。私共は批評家の言葉を聞いて、はじめて自分自身の心の中がわかつてくる。

批評家は作曲家の仲間としては、作曲家の胸中をよく私共に傳へてくれる。作曲家の意志のある處を、よく私共に話してくれる。私共は批評家の言葉で私共自分自身の心の中がよくわかると共に、それに對して作曲家がどう教へるか、何を説くかもよくわかる。それで、私共は音楽に對して一層理解の度を深くする事が出来る。

批評家は、つまり、天上を夢見る作曲家と、地上にうろ／＼してゐる私共との間を結びつけ

てくれる媒介者の様なものである。批評家は地上をうろ／＼してゐる私共の仲間でもあり、また天上の樂園の夢に憧がれる藝術家の仲間でもある。天上と地上とはこの批評家の手で、はじめて橋わたしが出来る。私共には、この橋わたしによらずには、天上を見わたす事の出来る様な處は一つもない。そして音楽がむづかしくなればなるほど、私共にはこの様な橋わたしが必要になる。音楽が専門的になればなるほど、私共はこの様な橋わたしがほしくなる。天上と地上の隔りが大きくなればなるほど、その間を結ぶものがなくてはならなくなる。

二、値ぶみをする人

しかし、一般の人々が批評家に期待する事は、たゞ註釋や解釋ではないらしい。それは、むしろ第二義的なもので、批評家は、それよりも少し重大な、もう少し肝要な仕事をするものと思はれてゐるらしい。

作品の値ぶみをしてもらひたい。この作品はいゝ作品であるか、悪い作品であるか、それを

判断してもらひたい。——これが一般の人々が批評家に期待する一番主な仕事らしい。

音楽の場合では、さらにもう一つ別な仕事がある。それは演奏家の値ぶみである。この演奏家は、演奏家であるか、悪い演奏家であるか、上手であるか、下手であるか、といふ事の判断である。

音楽會を聞きに行く人々が、如何に音楽や演奏の値ぶみをしたと思つてゐるかは、東京の新聞を見ただけでもよくわかる。この頃の新聞には、大てい、音楽の批評といふものが載せられる。そして時々、それは甚だ下らないものである事もある。音樂會の様子を、さも景氣よささうに書いただけのものもある。或は演奏家の技巧を、御座なり半分に、きまり切つた文句で讚めそやしたのものもある。或はつゞめて言へば、この曲の作者は非常に偉い人である、といふより以上に出ない事を、長々しく文を飾つて書きたてた様なものもある。この様な記事を、時間をつぶして読んで見た處で、それが結局私共に何物も與へないといふ事は明かである。それでもなほその様な記事は決して跡を絶たない。それは、恐らく、讀者が音楽の値ぶみといふ事に非常に飢ゑてゐる證據であらう。どうかして音楽の値ぶみをして貰ひたい、といふ熱望

のあらはれであらう。

また、私共は、音樂會の歸りに、銀座のカフェーにでも休まうものなら、あちらこちらの卓上から、音樂會についての話し聲が、聞くともなしに聞えて來る。そして、その話の大部分は、必ず、あの演奏家はうまい、とか、或はあの曲はつまらない、とかいふ値ぶみの話だけである。私共は、もちろん、この人々が音楽について、果してどれほどの造詣があるか知らないが、しかし、中にはでたらめ至極の値ぶみもあるに違ひない。パルチツールもろくく讀めないで、ジムフォニーを論じたり、指揮者を批評したりする人もあらう。簡単なツェルニーさへも弾いた事なしに、ピアノの演奏家の手腕を批評する人もあらう。それは本當を言へば、全くでたらめである。決して出来るわけのない批評である。そのくらゐな事は、もちろん、その批評する當人にもうすくはわかつてゐるであらう。それでも音樂會を聞いた以上は、必ず、うまいとか、まづいとか、何とか言つて見なくては氣がすまぬであらう。つまり値ぶみといふ事に對しては、人々は非常な興味と熱心をもつてゐるといふ證據である。

私共は、どうして、さうまでして、音楽の値ぶみがしたいものか、それはよくわからない。

しかし、事實上、音楽のある處には、必ずその値ぶみがある。必ず、いゝか、わるいかの判断がある。いゝとか、わるいとか、うまいとか、まづいとか、さうした判断なしには音楽は聞かれないものゝ様に見える。そしてその判断、その値ぶみこそ、實に私共が批評家と名のつく人に期待する一番重要な仕事である様に見える。

批評家が註釋をする人や、私共の心と藝術家の作品とを結びつけてくれる人である間は、批評家は正に私共の仲間でもあつた。或は私共のうちの先覺者でもあつた。しかし、値ぶみをする人になつては、批評家は私共からよほど隔つて來る様に思はれる。もはや私共の仲間であるか、ないかさへも、よく考へて見ないでは、俄には斷言出來ない。

音楽のうちには、私共に非常に感動を與へる曲もあれば、全く退屈な曲もある。面白い曲もあれば、面白くない曲もある。決して、すべての曲がみな同じ様に聞える事はない。それは確かな事實である。そして私共は、私共に非常に感動を與へる曲の方を聞きたい。面白い曲の方を聞きたい。退屈な、無趣味な曲などは少しも聞きたくない。この事實を簡単な言葉で言へば、つまりいゝ曲と悪い曲とがある、といふ事になる。私共に感動を與へる曲は、私共にとつては

いゝ曲である。私共を退屈させる曲は私共にとつては、悪い曲である。いゝ曲は値うちのある曲で、悪い曲は値うちのない曲である。そして、私共は、いゝ曲の方を選んで、悪い曲の方を捨てようとする。つまり、それも一種の値ぶみである。私共は知らず、曲の値ぶみをするにはしてゐるのである。そして、この程度の値ぶみをしないでは、私共は音楽を聞く事は出來ない。

しかし、私共にとつては、いゝ、値うちのある曲であるものが、隣の席に坐つてゐる人にとつては、悪い、値うちのない曲であつても、少しもさしつかへない。隣の席の人がいゝ曲であると思ふものを、私共が悪い曲であると思つても、少しも不都合はない。世の中には、誰もこんな事で人に命令をする権利を持つたものはない。世の中には、この曲をいゝと思へ、と他人に強ふる権利を持つたものはない。人は各々その好む處に従ふだけである。つまり、私共は曲の値ぶみを知らずにはしてゐるが、その値ぶみは全く個人個人のもので、自分の値ぶみが他人の値ぶみと一致するか、どうか、それは全然問題の外である。

私共一般の聴衆にとつては、音楽のいゝ、悪い、といふ事は決してこれより以上のものでは

ない。誰にでも値うちのある、いゝ曲と思はれる様な音楽、萬人に共通な美しさをもつてゐる様な音楽、——そんなものがあるか、ないか、そんな事は私共の知つた事ではない。私共はただ私共である。他人は他人である。

しかし、これだけでは、少々ものたりない處もある。私共は、音楽のいゝ、悪いといふ事は、たゞ、私共だけにとつての事である、と思ふと、何となく、私共の心に満足しきらない處が出来る。私共は、やはり一般的なものの、萬人に共通なものを欲してゐる。自分がさう思ふ様に、他人もまたさう思つてもらひたいといふ欲望がある。それが人の心である。従つて、音楽でも、自分が値うちのある、いゝ曲と思ふものを、隣の席の人も値うちのある、いゝ曲と思つてもらひたいといふ様な氣がする。隣の席の人が値うちのない、悪い曲だと言つてゐるものは、私共も値うちの無い、悪い曲だと思ひたいといふ様な氣がする。つまり、いゝ、悪い、といふ事に、何か萬人共通の標準があつてほしい。それでないと、曲のいゝ、悪い、といふ事は、全く個人個人の勝手な判断になつてしまふ。結局すべてが大混雜に陥つて、いゝ、悪い、なんか言ふの

は全くでたらめな事になつてしまふ。

いゝ、悪いといふ事が、全くでたらめなものでは、私共の心は決して満足しない。私共はいつても不安に襲はれなければならぬ。或は、曲のいゝ、悪い、といふ様な事は、全く考へるほどの價值もない様なつまらないものになる。しかし、私共が或る曲に對して、いゝとか、悪いとか言ふのは、これは根本的な、どうしても避けられない事實である。或る曲は、私共を感動させるか、感動させないか、二つに一つである。つまり、いゝか、悪いかの二つに一つである。値うちがあるか、ないかの二つに一つである。従つて、よくもなく、悪くもない曲といふ様なものは決して存在しない。もしあれば、それは、たゞ私共が音楽を聞かないといふ事である。曲があれば、そして私共がそれを聞いた以上は、必ず、その曲は、私共に對して、いゝ曲であるか、或は悪い曲である。

私共が音楽を聞いて、いゝとか、悪いとか思ふ事をやめない限り、そして私共の心の中に、何か一般的なものの、萬人共通なものを求める欲望がなくならない限り、どうしても、私共は明瞭に音楽の値ぶみをしてもらひたくなる。誰か權威のある人に、この曲はいゝ曲である、誰の

耳にも美しい音楽と聞えるべきものである、といふ様な、明瞭な、動かない判断がしてもらひたくなる。これが、恐らく、人の心の自然であらう。

もし或る權威のある人が、この曲は誰の耳にも美しい音楽と聞えるべきものである、と値ぶみをして、そして私共がそれを十分信用するならば、それで音楽の聞き方は定まつてしまふ。もし、私共がその曲を聞いて、實際美しい曲であると感じたならば、その時は、私共は正しく、本當に、音楽を聞いた事になる。もし私共がその曲を聞いて、美しいと感じなかつたならば、私共はまだ十分音楽を味ふ事が出来ないのである。そして、それを美しいと感じる様に努力をしなければならぬ。

音楽の値ぶみをする人も、さう考へると、全然必要でないとは言はれない。音楽の値ぶみをする人も、やはり私共の心の或る要求を満さうとする人である。たゞ實際に、この世の中に、そんな權威のある人がゐるか、ゐないか、問題である。そして、どこからそんな權威が出るかが問題である。

この世の中に、絶對的な權威をもつてゐる人は一人もない。この世の中に、本當に普遍的な、誰にでも異存なく認められる様な眞理を捉へた人は、まだ一人もない。權威ある値ぶみと言つても、それは、もちろん、たゞ比較的な話である。

値ぶみの權威は、私共自分自身の値ぶみを、どれほどよく、どれほど廣く、深く、代表してゐるか、といふ事から起つて來はしないかと思はれる。彼が値ぶみをした様に私も値ぶみをした、彼は美しいと言つたが、なるほど私も美しいと思つた、といふ人が、この世の中に澤山あればあるほど、彼の値ぶみはその人々の間には、本當の値ぶみだとして共鳴され、また權威を認められるであらう。つまり、人の心の自然を、なるべく廣く、多く、代表してゐるだけ、その代表されてゐる人々の間には、權威がある。そしてその値ぶみが正しいと思はれる。そして、どんな批評家も、たゞ、いゝとか、美しいとか、値うちがあるとか言はない。必ずその理由の様なものをつけ加へる。まづ私共が値うちの點でこの批評家と共鳴すれば、またその理由をも本當として認める様になる。

私共の仲間には私共の値ぶみを代表する人がある。それが私共の批評家である。しかし、隣

の席の人々の間には、またその値ぶみを代表する人があるであらう。それが隣の人たちの批評家である。そして人々の顔が違ふ様に心もちも違つてゐて、それがいろ／＼な値ぶみをするとなると、その値ぶみの代表者もまた、いろ／＼あつていゝわけである。さうしたら、世の中には、一つの曲に對しても、澤山の批評家がいろ／＼違つた値ぶみをするわけである。つまり、私共がめい／＼勝手に値ぶみをしてゐたものが、批評家といふ代表者で、いくつかの部類に分けられたといふだけの事である。また、實際にもさうでないとは言はれない。世の中には、一つの曲に對しても、いろ／＼違つた値ぶみがある。批評がある。それが紛々として一致しない。そして、誰もそれを判断する事は出来ない。それは、ちやうど、私共めい／＼勝手な値ぶみを誰も判断する人がないと同じ事である。私共がいくつかの部類に分れても、それは結局、同じ事である。多くの値ぶみのどれが正しいか、どれが誤つてゐるか、それは誰にもわからない。たゞ、いろ／＼な値ぶみのしかたが、事實上、あるといふだけの事である。

もし批評家の値ぶみが、たゞこんなものであるならば、値ぶみそのものには、實際、何の權

威もない、とも考へられる。最後の權威のあるのは、却つて私共自身自身である。私共が或る曲を美しいと感じてゐるのに、もし批評家が美しくないと云ふならば、それはその批評家は私共の仲間でないだけである。それは他の人々の仲間の代表者である。私共はまた別に私共の仲間の代表者を作ればそれでいゝ。ちやうど、政治で、私共の意見を代表しない様な代議士は他の政黨の代表者で、私共はまた別に私共の間から代表者を選ばいゝといふのと全く同じ事である。そして自分たちの選んだ代議士の演説は正しい意見の様に聞え、他の政黨の代議士の演説は誤つた意見の様に聞えるのと全く同じ事である。そして誰にもそのうちのどの意見が正しいか、といふ事は判断出来ない。どうしてもそれを判断しなければならぬ場合には、政治では、たゞ多数決があるだけである。一番多数の人の意見を代表してゐるものが正しい、といふだけである。

音樂の批評、音樂の値ぶみといふ事が、もし、たゞ私共自身の値ぶみを代表したものにすぎないならば、やはり、最後に落ち付く處は多数決であるかもしれぬ。一番澤山の人が美しいといふ曲が美しい、といふ事になる。そしてその曲を美しい、と値ぶみをした批評が正しい、と

いふ事になる。もし誰かゞ、或る曲が美しいといふ世論に反抗し、たゞ獨り、その曲は美しくないと主張した場合には、その判断は非常に簡單である。私共はこの批評家にさう言ふだけである。——お前の批評は多くの人の意見を代表してゐない。これから先き、どれほど澤山の人々の意見を代表する様になるかもしれないが、今さしあたり、お前の意見は少数者の意見である。だから誤である。今日の眞理の相場は今日の多數決でまゐる。

それは、たとへば、ベートーヴェンの第五や第九のジューフォニーの値ぶみの様なものである。それには、明かに、二つの値ぶみのしかたがある。その一つは、ベートーヴェンの第五や第九のジューフォニーは非常によくて、美しくて、十分に値うちのあるものだとする値ぶみである。他の一つはその反對で、ベートーヴェンの第五や第九のジューフォニーは下だらないもので、美しくもないもので、従つて十分な値うちの無いものだとする値ぶみである。前の方の意見を代表するものは、シューマンや、ワーグネルや、クレッチュマールや、ノールなどである。後の方の意見を代表するものは、シュポールである。そして、私共には、どちらが正しい値ぶみかわからない。多くの人々の中には、ワーグネルで代表されてゐる人々もあらう。またシュポール

で代表されてゐる人々もある。ワーグネル組には、ワーグネル組の理由がつくであらう。シュポール組にはシュポール組の理由があるであらう。しかし、それを多數決で判断するとなると、事は非常に簡單である。シュポール組は明かに少数組である。それだから、その値ぶみは間ちがつてゐる、といふ事になる。

こゝで多數決といふ事を、さらに一步を進めて考へて見なければならぬ。

多數決といつても、何も決して悪い事ではない。多くの人が實際に、或る曲を美しいと思つてゐる、といふ事である。そしてその曲が歴史的になればなるほど、その美しいと思ふ人の數は増して来る。昔から今まで、たとへば、ベートーヴェンの第五や第九のジューフォニーを美しいと思つた人の延人員は、非常な數に上るであらう。そしてシュポールの様に、それは下だらない、つまらない曲だと思つた人は非常に些いであらう。これほどの澤山の人が、美しくないものを美しいと偽つたとは信じられない。これほどの人がみな美しいと思ふならば、實際にその曲のどこかに、必ず人に美しいと思はなければならぬ様な大切な要素があるに違ひない。

音楽の中にそれさへあれば、大てい人間には、誰にでも美しいと思はれる、といふ様な肝心なものが、ベートーヴェンのジムフォニーの中にはいつてゐるに違ひない。それだからこそ、昔から今までの無数の人々に、みな美しいと思はれて來たのであらう。また、批評家からも美しいと言はれて、なるほど美しいと、無数の人々がそれに共鳴したのであらう。

もしそれが本當だとするならば、批評家は暫く一生懸命になつて、研究に従事すればいゝ。音楽の中にそれさへあれば、大てい人間には誰にでも美しいと思はれといふ様なものは、一體何であるか、どんなものであるか、——それをベートーヴェンのジムフォニーでも、シューベルトのズナートでも、何でもとにかく昔から今まで、なるべく多くの人に美しいと思はれて來た音楽について、よく研究して見ればいゝ。それは、ちやうど、経節や昆布などを分解して、誰にもうまいと思はれる味は何であるかを、研究する様なものである。全く分解的な仕事である。そして化學者は、それから、立派に『味の素』を作り出した。批評家でも、もしその努力が本當に成功するならば、ベートーヴェンやシューベルトの音楽の中から『音楽の味の素』を見つけ出す事が出來るであらう。そして、化學者が『味の素』を料理の中に入れて、なる

ほどこれさへあれば、何でもうまくなると私共に言はせる様に、批評家も音楽を分解して取り出した要素を私共に聞かせて、なるほどこの要素があれば、音楽は美しくなる、と私共に言はせるかもしれない。

もしそこまで批評家の研究が進むものとするならば、その批評には或る意味での確實さが出て來る。それは決してでたらめでない。音楽の美しいと美しくないとは、『音楽の味の素』の含有量の多いか、些いかで計られる。計る標準がある以上は、あとはたゞ計る人の手ぎは一つである。さうなれば、ちやうど化學者が、これは『味の素』が澤山含まれてゐないからまづい、と言ふ様に、批評家も、これには『音楽の味の素』が含まれてゐないから美しくない、と言ふであらう。食物のうまい、まづいは『味の素』の含有量できまる様に、音楽の値うちは、この『音楽の味の素』の含有量できまる。音楽の値うちは、或る物さしで計られる事になる。世の中に、物さしで計るよりも明瞭な事はない。決して動かない判断である。そして化學者が『味の素』をうまくないと言ふ人は、その人の舌の神経の方に異状がある、と判断する様に、批評家も、もし『音楽の味の素』を含んでゐる音楽が美しくないと言ふ人には、その人の神経の方

に異状があるから、この曲を美しいと思ふ様に努力しろ、と命ずる事が出来る。それでこそ批評に權威がある。その批評には誰も反對する事の出来ない強みがある。そして誰も承知しなければならぬ或る程度までの一般的な、普遍的な重みがある。それは、ちやうど、多數決できまつた法律を研究して見ると、それには、やはり、人間性の自然があつて、私共は、その法律に従ふ方が幸福である、といふのと多少似てもゐる。批評の權威は、さういふ動かないものに依つてこそ、初めて出て来るものではあるまいか。そして音樂の判斷、音樂の値ぶみといふ事で、動かないものを求めるならば、かうして多數決によつて、それから何か『音樂の味の素』の様なものを發見するより外に途はないのではあるまいか。――

たゞ今日までには、まだ不幸にして、この『音樂の味の素』は發見されてゐない。そして、また、當分發見されさうにもない。音樂といふものが、一體非常に複雑なものである。またその研究の基礎になる多數決は、さう思つたほど容易に出来ない事である。よしそれが出來たとしても、或る曲が美しいと思はれる條件は、殆ど數限りなくあつて、それを『味の素』の様に

分析して取り出す事は非常な難事である。また、よし取り出したと思つても、それはたゞ音を美しいと思はせる『音だけの味の素』で、決して複雑を極めた音樂全體を美しいと思はせる『音樂の味の素』ではないものが多い。

音樂の中から『音樂の味の素』を發見して、それで音樂を批評しようといふ事は、今ではただ一場の夢物語にすぎない。批評家も、私共も、『音樂の味の素』をみな少しづつは持ちながら、さて、どれが本當の味の素か、それをきめかねてゐる。きめる方法さへわからずにゐる。

それだから、批評は、やはりまち／＼である。まち／＼であるより外にしかたない。それを判斷する權威はまだ出で來ない。批評家は、要するに、或る仲間の人々の代表者である。私共の意見を代表しない様な批評家は、それは他の仲間の批評家で、私共とは關係のない人である。批評家が、たゞ代表者である限り、本當に權威のあるのは、その代表者を選んだ私共自身である。つまり私共が美しいと思ふ音樂が私共には美しい音樂である、といふ事になる。そして、たゞ、それだけである。萬人共通な音樂批評の眞理は、まだ世の中にない。

批評家のうちには、作曲の批評をする人もあるが、また演奏の批評をする人もある。

演奏の批評は、作曲の批評と少々違つた處がある。作曲の美しさの方には、まだ何を標準にして値ぶみをしていゝか、それがわからない。『音樂の味の素』はまだ發見されてゐない。しかし、演奏の方には、たゞ一つだけ、その標準がある。批評家は、演奏家の演奏が本當にこの標準にあつてゐるか、ゐないかを見さだめて、この演奏家はその點だけでは、上手であるか、下手であるかを、正しく値ぶみする事が出来る。その標準は樂譜である。作曲家の意志である。

演奏家が、もし、作曲家の書いた譜のとほりに演奏しなくともいゝものならば、それはでたらめに何をやつてもいゝといふ事である。つまり譜なんかどうでもいゝといふ事である。それなら演奏家は何も苦しい修業をして、わざ／＼譜を覚え、譜を解釋する事はない。手あたり次第に、勝手に、でたらめに、何でもやるだけである。たとへば、役者が舞臺の上で、脚本のせりふを覺えないで、自分の勝手次第なせりふを言ふ様なものである。それでは決して芝居は出來ない。音樂もその通りである。演奏家が譜の通りにやらなくてもいゝとなれば、それでは音

樂の約束はめちやくである。音樂は結局滅亡してしまふだけである。

やはり、演奏家には譜は一大標準である。演奏家は、譜のとほりに、譜の命ずるとほりに、一絲亂れずに演奏しなければならぬ。それが演奏家の義務である。そして批評家は、本當に演奏家がこの義務を果してゐるかを見定める役をしなければならぬ。そして普通には、なか／＼その見定めにつきかねる私共一般の聴衆に、この演奏家は義務に忠實であるとか、或はあの演奏家は義務に不忠實であるとか、それを詳しく忠告してくれる。私共はその忠告に従つて、義務に忠實な演奏家を安心して聽いてゐる事が出来る。恐らく、これが批評家に出来る一番確實な仕事であらう。

しかし、批評家がこの仕事をしとげるのは、決してなみ大ていの苦勞ではない。批評家はまづ譜を完全にのみこんでゐなくてはならぬ。殆ど、演奏家のみこんでゐるほどには、批評家ものみこんでゐなくてはならぬ。そして演奏家はそれを演奏するのであるが、批評家の方はそれを聞くのである。聞いて、そして、その聞いた事が譜と完全に一致してゐるか、ゐないかを判断するのである。もし違ふならば、どこがどう違つたかを明かに言ふ義務がある。これは私

共一般の聴衆には、殆ど想像もつかないほどむづかしい役目である。

たとへば、ピアノの演奏を聞くとする。批評家は、このピアニストが、果して、完全に、譜のとおりに弾いたか、どうかを判断しなくてはならぬ。ピアノの音は、奔湍の勢でどん／＼流れて行く。このピアニストが、もし何かの間違ひで、6の和絃の代りに、46の和絃を打たないとも限らない。澤山の和絃の中の音が一つや二つ落ちないとも限らない。早いパッサージュの中で、#やbの一つや二つが間違はないとも限らない。それを批評家は、はつきりと耳に留めなくてはならぬ。よしそれが何も間違はないとしても、やはり間違ひなく弾いたといふ事を、はつきりと耳に留めなくてはならぬ。どちらにしても、労力は同じ事である。これほど明瞭に、これほど敏活に、あの複雑したピアノの音を聞きわけける事が出来たとしたら、それは實に恐るべき頭腦の働きである。そのむづかしさは、舞臺の上で、役者が脚本どほりのせりふを言つたか、言はなかつたかを聞きわけける様なものでない。それが管絃樂であつたら、その複雑さは、とてもピアノどころのさわぎでない。それでも批評家である以上は、それをピアノと同じ様に明瞭に、敏活に聞きわけなくてはならぬ。もしそれが出来るならば、それは私共が考へうる限

りのむづかしい人間の頭腦の働きであるかもしれぬ。私共には、どうしてそんな事が出来るか、それを想像する事さへもむづかしい。そして、これほどの明敏な、牙えきつた頭と耳を持つてゐる人は、もちろん、さう澤山あるはずはない。これほどの事が完全に出来る批評家は、世界を通じて非常に些いかもしれぬ。

批評家が、もし、演奏家の演出を、譜を標準にして批評するとしたならば、それにはこれほどの困難がある。その困難を冒して、たとへば、或る演奏家をその義務に忠實である、と値ぶみしてくれたとしたならば、それで私共はどれほどこの批評家に感謝すればよからうか。結局、私共はたゞ安心してこの演奏家を聞く事が出来るといふだけの事である。

しかし、私共一般の聴衆は、演奏家から技術上の安心を求めするために、音楽を聞くのでは決してない。この演奏家が、本當に譜のとおりに演奏したか、どうか、といふ事を聞きわけけるのは、批評家にして已に非常に困難とする處である。私共一般の人には、とてもそれが聞きわけられるわけのものではない。もちろん、でたらめを演奏されては困るとは言ふものゝ、しかし、

實際では、6の和絃が4-6の和絃にならうが、バッサージェンの中の#の一つがりにならうが、和絃の中の音が一つ二つ落ちようが、そんな事は決して私共一般の人の頭の中にはいつて來るのではない。また、私共は、そんな事を聞きわけけるために、わざわざ音樂會に行くのではない。つまり、そんな事は、私共のためには、どうでもいゝ事である。このどうでもいゝ事を、批評家から一々丁寧に教へてもらつても、私共は全くあいさつに困るだけである。批評家が非常な困難を征服して、演奏の技巧を私共に値ぶみしてくれるのは、實に御苦勞千萬な話である。お氣の毒至極な仕事である。仕事としては、實にこの上もなく、馬鹿馬鹿しい仕事である。

昔から多くの音樂の批評家がゐた。そして、今日に至るまで私共を感動させる様な批評は、決して譜を最後の標準とした技術上の値ぶみではない。たとへば、シューマンは大作作曲家であつたと共に、また音樂の大批評家であつた。彼はレクラム版三冊の批評録を残してゐる。彼はまだ知られないブラームスを世に紹介し、ショパンをドイツの國に推賞した。或はリストを論じ、タールベルクを論じ、メンデルスゾーンを論じた。そしてその批評録は、今日でも、なほ私共を感心させる。しかし、シューマンはその中に、必ずしも技巧の正確さは論じてゐない。

彼の専門的に明敏な頭腦をもつてしても、なほ譜を最後の標準として演奏家の技術を値ぶみする様な事はしなかつた。シューマンの批評録が私共の心に訴へるものは、決して技術の値ぶみではない。やはり音樂の美しさの値ぶみである。もし、或る批評家が、一生涯、人の技術の正確さだけを考へて過したとしたならば、その批評家の生涯くらゐ下だらないものは、外にあまりないかもしれない。

批評家の最後の仕事は、やはり、美しさの値ぶみである。美しいものを美しいと言ふ事である。自分の美しいと感じた事を、私共聴衆によくわかる様に教へてくれる事である。私共の心と作曲家の作品との間に、美しさといふ橋を渡す事である。それが批評家の一番大きな存在の理由である。

それならば、話はまたもとに返る。そして何が美しさの最後の標準になるか、といふ事になる。そして、話はまた『音樂の味の素』の研究といふ事になる。そして、何が標準だか、何が眞理だか、一切わからなくなつてしまふだけである。そして、結局、私共や、批評家たちが、

めい／＼勝手な事を言ふだけである。

讀者諸君。こゝで暫く私に樂屋落ちの話をさせて下さい。

以前に、私の尊敬する友人の一人が目白の奥に住んでゐた。彼は哲學者である。カントの研究者である。そして私は彼と幾度かこの様な事を論じあつた事がある。私には、最後に價值のあるものは、私共自身の心だけである。私共自身の心が美しいと思はないものは、誰が何と言つても、決してそれで美しくはならない。私共は私共の心の中に已に『音樂の味の素』は持つてゐる。作曲家はその作品の中に『音樂の味の素』を完全に封じこめてゐる。批評家はたゞそれを分析して出してくれるだけでいゝ。それ以外に決して美しさの標準になるものはない。美しさの標準は、作曲家の仕事と、私共の心とから、歸納してわかるべきものである。そして人の心が變つて行くのと共に、美しさも變つて行つてもいゝものである。——私は、いつも、さう話した。

目白の奥の友人は、私を物質主義者と呼んだ。よほどよく言つて、ポジチヴィストと言つた。

彼は論理的に一切の物事を考へた。そして、標準や規範といふ事が、哲學上、どんな性質をもつかを説明した。Sollenといふドイツ語は、哲學上、何を意味するかを説明した。そして、いつも話は纏らなかつた。それも、もはや、二三年前の事になつてしまつた。

この小著の讀者諸君のうちにも、必ず私のこの友人と感を同じくする人々があるであらう。私のこの話を非常に平凡な、卑近な、考へ方の足りないものだと思ふ諸君があるであらう。美しさといふ事の基礎は、私共の心から歸納するものでもなく、多數決できまるものでもなく、それにはまた、哲學上の違つた特別の論據のあるものであると思ふ諸君も多いであらう。私もさう言ふ諸君の論據を全く理解しないのではない。私もカントが『判斷力批判』で何を説いたか、ハルトマンやロッツェがその哲學で、如何に美といふものを論じたかを、些くも哲學史上で讀まなかつたとは言はない。しかし、今私はさういふ風に物を考へようとはしない。よし、して見ても、それでは、容易には音樂の批評にまでは到着しない。一般の美の原理を論じる事と、今日の前にあるこの音樂の批評といふ事との間には、どう考へても、若干の距離がある。私はたゞ日常目の前にある事を、ある様に話したまでである。たゞ常識である。私のこの話を、

私は決して學問であるとは言はない。もちろん、夢にも哲學上の論據を持つとは言はない。また批評といふ事に、哲學上の意味をつけたとも言はない。

『批評家と論評家とは違ふ。彼は藝術家に近く、是は職工に近い。』——昔の音樂の大批評家はさう言つてゐる。私のこの話も、恐らく、職工の話に近いであらう。高遠な美の原理を知りたいと思ふ諸君は、願くは私の尊敬する友人と共に、カントなり、ヘーゲルなり、ロッチェなりについて、合點の行くまで學んで下さい。私はこの常識的な、平凡な話で、この一章を終る。

第三 音樂家

„Zur Bildung des Künstlers ist vor allem
ein Emporwachsen des Menschen nötig.“

Liszt.

私共の音楽の話は、たうとう、その最後の章に來た。そしてそれは、本當は、私共には話せない章である。話したくも話す事の出來ない章である。私共には音楽家の事はよくわからない。私共はこの地上を這ひまはつてゐる。しかし藝術家は想像の天國をペガスを驅つて高く飛んでゐる。藝術家の事は、どうしても私共凡人にはわからない處がある。うかゞひ知られない處がある。それは、たゞ、人間界の不可思議である、といふより外にしかたのない處がある。私共が作曲家の事を話すのは、わからない事を無理にわかつた様にして話すだけの事である。

一、カフェーの音楽の作家

作曲家は、まづ第一に、私共の耳を樂しませるものを作る人である。

作曲家の作つたものを聞くと、私共は實にいゝ氣もちになる。それはカフェーで葉巻を吹かしながら聞く軽い舞踏の曲でも、大音楽會で、あらゆる感覺の緊張の裡に聞くジューフォーニーでも、みな同じ事である。たゞ私共の耳を樂しませてくれただけで、或る種類の作曲家の仕事は

終つたとも見える様なものもある。實際、カフェーで演奏される様な軽い舞曲を作つた人は、それが私共の耳を樂しませ、私共を何となく氣もちよくさせ、私共の心を浮きくさせたら、もうそれ以上に何も望む處はないであらう。

たゞそれだけのものでも、それを作り出すといふ事は、已に、私共には一大不思議である。私共には、それがどうして作り出されるものか、少しもわからない。もちろん、樂器の音は、音自身が、はじめから美しい様に出来てゐる。聞けば氣もちのいゝ様に出来てゐる。しかし、私共が、たゞめちやく／＼にピアノの鍵盤を叩いても、それは作曲家の作曲ほどには決して耳に氣もちよくは響かない。そこに、何かしら、作曲家の心の力が働くと、このめちやく／＼の死んだ音が忽ち整頓され、忽ち生き返つて、私共の耳に美しく、面白く聞えて来る。この心の力が私共の不思議に堪へない處である。

それを私共はいろ／＼に細かく考へて見る事は出来る。まづ料理法と比べて見るのが簡便であらう。私共は鹽は鹽からいし、砂糖は甘いし、山椒はからいといふ様な事は、はじめからよく知つてゐる。ちやうど、樂器の音ははじめから美しい様に出来てゐる、といふのと同じ事である。

ある。それに料理人が一度手をかけると、いろ／＼のものが忽ち渾然として美しい一つの味に變つて来る。そして私共の舌を喜ばせる。その調味料のませ方には、大てい一定の法がある。その法でまぜると、誰がまぜても、まづ大體同じ様な味になる事はなる。それはその法が、料理人の多年の經驗から來たものであるからである。しかし、本當のいゝ料理になると、それはどうしても料理人獨特の手腕がある。私共がどう考へても、本當の板前の料理の様なものはいない。そこに、やはり、一種の祕訣がある。

音樂にも、この料理法の様なものがないではない。音のませ合せ方には、大てい一定の法が出来てゐる。或は料理の獻立に相當する様な作曲法もない事はない。そしてそれも、もちろん、作曲家の多年の經驗からなり立つたものである。しかし、作曲の方は料理よりもなほ複雑である。私共の耳を樂しませる事は、舌を樂しませる事よりも、遙にむづかしい。私共がこの音の料理法によつて音をませあはせても、それではあまり面白く聞えない。私共は3の和絃や、6の和絃は、よく調和した、いゝ氣もちのする和絃だと教はつてゐる。4-6の和絃は、それよりも調和の度が薄くて、主に一句が終る時にその前に、ちよつと使ふものだと教はつてゐる。五

度や八度の平行は、ふぐの毒の様なもので、決して使つてはいけないと教はつてゐる。音の極めて普通の料理法はまづこの様な事からはじまる。しかし、これによつて私共が音をどうませ合せて見ても、どう調合して見ても、それは決して美しくも何ともない。たゞ退屈な、ありふれた、下だらない音である。作曲にも何にもならぬ。

たとへカフエーで聞く様な軽い音楽にしても、それは、とても私共の手では出来ない。私共が音の料理法を知つてゐたからとて、それだけでは決して作曲は出来ない。料理にしても、いい料理になると、料理人獨特の手腕がいる。そして音楽は料理よりも、遙に複雑である。料理よりも遙にむづかしい。そこに、どうしても、作曲家獨特の心が加はらなくてはならぬ。この心、この心の力、——それがどんなものだから、私共には少しもわからない。たゞ不思議といふより外にはない。

音楽は、その一番簡単な、一番手輕なものからして、已にこの様な不思議な、私共にはわからない心が働いたものである。つまり、作曲家といふものは、一番簡単な、一番手輕な仕事をする人にして、已にこの様な不思議な心の力をもつてゐなくてはならぬものである。

料理人と作曲家とを比べて見ると、それは私共にいる／＼な事を教へる。

一體で、板前の手腕といふものは何であらうか。私共で、とてもまねられない様な料理の秘訣といふものは、そも／＼何であらうか。私共はまづそれを知りたいたい。

その秘訣の大部分は、恐らく智識であらう。料理人の腕の冴えは、つまり、あらゆる場合に應用出来る様な智識を豊富にもつてゐて、それを場合に應じて、いろ／＼と實行する事であらう。私共は料理を専門に研究した事がないから、それほどの智識をもつてゐない。かういふ場合には、どんな薬味を使ふか、かういふ材料はどうして煮るか、焼くか、それが少しもわからない。それだから料理もまづいし、その種類も些ない。もし私共が料理人ほどの豊富な智識をさへもてば、そしてその智識が誰にでもわかる様に出來てさへるれば、私共にも専門の料理人の作る様な料理が出来るわけである。それが出来なければ、智識が不完全なのであらう。肉を何センチメートル平方に切つて、何度の湯で、何分煮る、といふ様に、數量で書いてあるならば、私共はそのとほりに、正確に、料理が出来るわけである。そしてそのとほりに、正確に、

料理をするのは、あとはたゞ練習だけである。同じ事をわかるまで、そして出来るまで、繰返してやつて見るといふだけである。

実際には、それほど正確に料理法は書いてない。どうしても、経験でそれを補ふ必要がある。この経験を持つてゐるのが、つまり専門の料理人である。そして私共のとても及ばない處もそこにある。

さう言つてしまへば、事は非常に早くかたがつく。料理は、もとより、音楽よりも簡単である。舌の享樂は、普通には耳の享樂ほど複雑でない。或は板前の腕の冴えといふ事は、大部分は智識と経験とに歸する事が出来るかもしれぬ。しかし、そこに、もう一つ何か板前の腕の冴えを作るものが残つてゐないであらうか。たゞ智識と経験とだけでは、本當に冴えた腕前をもつた板前とは言はれない、といふ様なものがありはしまいか。料理の本當の味を出すものは、智識と経験との外に、もう一つ何かありはしまいか。

私には、それが有る様に思はれる。それは獨創といふ事である。ありふれた料理の味では、もはや人の舌は満足しない。人に飽きられる。何かそこに變つた、違つた、うまい味があるか

らこそ、私共はその料理を賞讃する。この新しい、何か變つてゐる味を作り出す事が、これが板前の一番大きな仕事ではないであらうかと思はれる。もちろん、舌の享樂は、ある點までは、生理的である。腹が空いてゐれば、大ていなものはうまく食はれる。そして同じものを幾百度食つても、やはりうまいといふ感覺は起つて来る。私共は、一生の間、毎日同じ様な朝めしを、大ていはいまうまく食つてゐる。この様な點から考へると、獨創などは料理にはいらぬ事の様にも思はれる。しかし、それは物の一面にすぎない。私共は、やはり同じ物に飽きるといふ事も確にある。私共は、しばしば、あの料理にも、もう飽きた、とも言つてゐる。そして、その時に、私共は切に料理人の獨創を希望する。

そして、その上に、私共は、飽きる、飽きないといふ事よりも、遙に強い、も一つの食物の要求をもつてゐる。それは、もう少しうまいものを食ひたい、といふ事である。飽きた、といふ事もそのうちの一動機であるかもしれないが、必ずしも飽きなくとも、私共はもう少しうまい物がほしいと言つてゐる。新しいものが欲しいのと、よりいゝものが欲しいのとは、その間に、若干の相違がある。そして一度、よりいゝものゝ味を覺えたら、それよりまづいものは、もう

食ふ氣がなくなる。そこそ料理人がその獨創の手腕を振ふ處である。よりいゝ味を作り出す、——そこに、恐らく、料理人の全生命があるのであらう。それは料理法の智識ではない。智識は、たゞ、今までの經驗を集めたものである。或は自分の經驗でもない。經驗は、たゞ、この智識を補ふだけのものである。よりいゝ味を作り出すには、どうしても、この智識や經驗を基礎にして、そこにもう一つ別の新しい心の力が働かなくてはならぬ。それは今まで無かつたものを新たに作り出すのである。工夫するのである。思ひつくのである。智識があつても、經驗があつても、それで必ずしも、いゝ工夫や思ひつきが出来るといふわけでない。それは、また、別の才能である。それが獨創の才である。そして私共、料理の獨創の才をもたぬものが見れば、どうしてあんなものを思ひついたかといふ事は、全く一つの不思議に見える。私共にわからない人間の心の祕密である。

料理にして、すでに、さうである。音樂では、それはなほさらの事である。殆ど、そこに、作曲家の全生命があるとも言はれよう。

たとへ、カフェーで聞く舞踏曲にしても、同じ様なものをいくつ作つても、それは殆ど作曲の意味はない。それほどならば一つあれば十分である。もちろん、カフェーでなぐさみ半分に聞くのであるから、それにはさう厳格な事は求められない。同じヨハン・シュトラウスのワルツェルを何度聞かされても、私共は別に非常にうるさいとは思はない。うるさければ聞かないだけである。しかし、作曲家の方から言へば、今までのどの曲よりも、一段すぐれて面白いものを作りたい。今までのどの曲よりも、遙に多く私共の耳を樂しませるものを作りたい。それではなければ、むしろ作らない方がいゝ。また作つたからとて、それが何にもならぬ。同じ作曲をするほどならば、今までの人の作らなかつた様な面白いふしや、今までになかつた様な面白い伴奏を考へて、そして今までのどの舞踏曲を聞くよりも面白くて、心がうき／＼するといふ様なものを作り出さなくてはならぬ。そして、一度こんな面白いものを聞いたたら、今までの曲は、みな下だらないものに聞えて來るといふ様なものを作り出さなくてはならぬ。この様な新しい、すぐれた曲を作る事は、全く獨創の才である。これまである曲の組み立て方や、作り方をよく知つても、それだけでは決して新しい曲は作られない。もちろん智識でも、經驗でもない。その智識や經驗を基礎にして、或る新しい、別なものを作り出すのである。無かつた

ものを有る様にするのである。全く不思議な心の働である。私共凡人には想像もつかない不思議な心の働きである。

私共がカフェーで煙草の煙の間から、聞くともなく聞いてゐる様な音楽にしても、それが音楽である以上は、作曲家にとつては、この様な不思議な心の働がなくてはならぬものである。その働のない人は、カフェーの音楽の作曲家にさへもならない。

心のどこから、そもく、この不可思議千萬な獨創の力が出て來るのであらうか。どうしたら、それが得られようか。——それは、一切わからない。私共凡人は、はじめから少しも持つてゐない能力である。身に何の覺えもない事である。それをどう考へて見た處で、どう理窟をつけた處で、事の真相に徹するはずはない。たゞ不可思議な祕密といふより外はない。そして世の中には、生れながらにこんな大祕密が心の中に供はつてゐる少數な幸福な人と、それが全然供はつてゐない不幸な千萬人の平凡人とがあるだけである。

二、ベートーヴェン

作曲家の中にも、カフェーの音楽の作曲家もあれば、演奏會場で萬人に襟を正させる様な大きなジュフォニーの作家もある。私共は、まづ、カフェーの音楽の作家を見た。そしてその心の中には、私共にわからない不思議な力のある事を知つた。もし、大きな藝術的なジュフォニーの作家を見たならば、私共はその心の働の不思議さに、全く驚嘆してしまふであらう。私共は代表的な作曲家として、しばらくベートーヴェンを考へて見よう。

(1) 音楽の量

ベートーヴェンは誠に空前の大作作曲家である。殆ど永遠に亘つて音楽家といふものを代表する様な大作作曲家である。私共凡人がこの大作作曲家、大天才の心の中を推し測つて見ようと考へるなどは、それこそ實に飛んでもない間違ひである。すつぽんが月の世界の事を考へる様な

ものである。

私共には、直接にはベートーヴェンの心の中はどうしてもわからない。それは、たゞ大なる祕密の塊である。暗い底しれぬ淵である。私共は、ベートーヴェンの心が外に現はれて出た音楽を通して、僅にその幾分かを推し測つて見ようと思ふだけである。

まづベートーヴェンの音楽は、カフエーの軽い音楽と、そもくどが違つてゐるであらう。私共は、なるべく明瞭にこの點を知りたい。この點こそは、今の私共の問題にとつて誠に肝心な點である。それは音楽の違いを知ること、やがてその音楽を作り出した心の違いを知る事になるからである。しかしこの相違を明瞭に知る事は決して容易な事でない。カフエーの軽い音楽とベートーヴェンの雄大なジュフォニーとの違ひと言へば、それは非常に大きな違ひである様にも聞えるが、よく考へると、それを明瞭に判断するのはなかくむづかしい。ベートーヴェンのジュフォニーが美しい音楽である様に、カフエーの音楽もやはり美しい音楽である。

一方にカフエーの軽い音楽をおき、一方にベートーヴェンの雄大なジュフォニーをおいて、この両方を比べて見れば、まづ誰にでも氣のつく相違は、一方は短くて、簡單で、一方は長く

て非常に複雑である、といふ事であらう。

もしそれを何かに譬へるならば、一方は小さい五號くらゐな畫布に、ざつと描いた靜物の様なものである。一方は大きな百號くらゐな畫布一ぱいに、むづかしい構圖を考へて、人物や風景などを極めて精密に、隅から隅まで描き上げた様なものであらう。五號の畫布に林檎を一つ二つ畫くには、畫家はこの林檎をよく觀察して、その形やその色を十分に頭に入れて、そしてそれを誤なく畫布の上に現はせばそれで事は足りる。そしてそれは仕事の量から言へば、そんなに多い事ではない。しかし百號の畫布一ぱいに、何か歴史的な題材を畫くか、或は宗教的な人物を描くとなれば、その仕事の量は非常に多くなる。まづ人體について、そのいろくんな細かな點をよく觀察しなければならぬ。もし或る單位の面積に、單位の量の觀察といふ様な事があるならば、人體は林檎よりも非常に大きな面積があるから、その觀察の仕事も従つて非常にふえて来る。それを描寫するにも従つて非常に手数がかゝる。その上に背景になる自然の風物を觀察し、それをも十分に描寫しなければならぬ。もし仕事のむづかしさが、それに費した時間間で計算されるものならば、五號の畫布へ林檎を畫く時間は、百號の畫布に歴史畫を畫く時間

の何十分の一にも當らないであらう。

言ふまでもなく、この様な議論は実際には決して通用しない。セザンヌの書いた小さい静物の畫が、ルーベンスの書いた大きな宗教畫よりも粗末で、ぞんざいで、骨が折れてゐないとは決して言はれない。セザンヌが小さい畫布に、僅かばかりの静物を畫いた骨折りは、ルーベンスの大きな宗教畫に優に匹敵するであらう。それは誰も疑はない明瞭な事實である。しかし、この判断には、いろ／＼さま／＼な美術上の條件がはいつてゐる。殆ど無数の美術上の條件がからみ合つて、その結果、初めてセザンヌの小さい静物も、ルーベンスの大きな宗教畫ほどに骨が折れてゐる、といふ事になる。そしてこれが實際通用してゐる普通の判断である。

私は、今は、その條件のうちの一つだけを考へてゐる。たゞ物を觀察して、それをそのまま畫布の上に現はすといふ仕事だけを考へてゐる。決してそれを美術的に現はすといふ様な非常にむづかしい仕事の方面は考へてゐない。そしてその範圍では、まづ大體で五號の畫布に林檎を一つ畫く事は、百號の畫布に宗教畫を畫くほどに骨は折れないとは言はれよう。

このたとへは、或る程度までは音樂にも通用する。カフエーで聞く短い舞踊曲の様なもの、

その量では、到底、大きなジュフォニーの比ではない。もしそれを時間で計れば、軽い、短い舞踊曲の様なものは、大抵は四五分か、長くとも十分以内には済んでしまふ。しかし、大きなジュフォニーは殆ど一時間くらゐかゝる。また、もしそれを使つてある音符の數で計るならば、——それは濱の眞砂を數へる様な、極めて下だらない仕事ではあるが、——軽い舞踊曲に使つてある音符の數が百あるならば、大きなジュフォニーに使つてある音符の數は萬も十萬もあるであらう。或る一人の音樂家が百の音符を考へて書く仕事の量は、十萬の音符を考へて書く仕事の量の何百分の一にもあたらない。それは、ちやうど五號の畫布に林檎を一つ二つ畫く事と、百號の畫布一ぱいに宗教畫を畫くとのちがひである。

しばらく質をはなれて、たゞ量だけを考へるならば、このたとへは必ずしも不當ではあるまい。つまり、四五分で済む軽い舞踊曲の作家は、百だけの音符を頭の中に思ひ浮べて、それを譜紙の上に書けばいいが、一時間かゝるジュフォニーの作家は、十萬の音符を頭の中に思ひ浮べて、それを譜紙の上に書き下さなければならぬといふ事になる。ジュフォニーの作家は、舞踊曲の作家に比べて、非常に多くの量の仕事をするわけである。従つて、まづそれだけでも、

ジムフォニーの作家の頭は、軽い舞踊曲の作家の頭よりも遙によくなくてはならぬ。遙に多くの仕事に堪へうる能力がなくてはならぬ。そしてこれが實にベートーヴェンの頭脳である。

(2) 音楽と数学

これはたゞ仕事の量の上の事である。藝術としては極めて平凡な、極めて下だらない方面である。言ふまでもなく、藝術の仕事の主眼はその質にある。如何に多量の仕事をして、その仕事の質がよくなつては何にもならぬ。たとへ千枚萬枚の譜紙に、隅から隅まで一ぱいに楽譜を書きならべた處で、その音譜がつまらぬものであるならば、その仕事は藝術としては、誠に下だらないものである。より多量の仕事に堪へ得られる頭脳といふことは、たゞ量の點だけでは優れてゐるであらうが、それでその他の點も優れてゐるとは決して言はれない。私共は、それよりも幾百倍も肝心な質の點について考へて見なければならぬ。そしてそれは量について考へるよりも、遙に遙にむづかしい。仕事の量にはそれを計る目安がある。演奏の時間でも計られる。音符の數でも計られる。しかし音楽の質はそんなものでは計られない。音楽の質のいゝ、

悪いを計る目安はどこにもない。音楽は長いから質がいゝとも言はれないし、楽譜の枚數が多から質がいゝとも言はれない。それは、ちやうど、畫は畫布の大きなほどその畫がいゝとは言はれないと同じ事である。問題が音楽の質といふ事になると、それを考へるのは非常にむづかしくなつてくる。

物は極端な場合を二つ取つて見なければその相違は明瞭にわからない。私共は、いつでも、一方にはカプエーの軽い舞踊曲をおき、一方にはベートーヴェンの雄大なジムフォニーをおいて、その相違を考へてゐる事を忘れてはならぬ。そして私共は、今はまづ第一歩として、舞踊曲そのものとジムフォニーそのものとの相違から考へて見よう。

この場合に、私共に氣のつく第一の相違の點は、智的な要素の種類がどれほど多くはいつてゐるか、といふ事である。

こゝで智的な要素といふのは、言葉は大變にむづかしいが、つまり頭で考へるものの事である。たとへば数学や力學の様なものである。従つてこれは胸の底で感じる、といふ様なものではない。そして音楽の中には、その数学や力學などの様に、頭で考へる要素がかなり澤山はい

つてゐる。私共が普通に考へたのでは、音楽と数学とは大變ちがふ様にも見える。似ても似つかないものゝ様にも見える。普通の人には、まさか音楽の中に、数学の様なものがはいつてゐようとは思はれないかもしれぬ。しかし、事實はその反對である。

まづ作曲家がペンを取つて音符を書く時の事を考へて見よう。この作曲家の頭の中には、音は恐らく觀念として浮んで來るであらう。cの音、eの音、gの音といふ様な或る一定の名をもつた一定した音の觀念である。そしてその名の違ふ様に、その音のいろ／＼な性質も違つてゐる。各々まぎれない、はつきりと獨立した個性をもつてゐる音である。作曲家はこの音を實際に人にピアノで弾かせて聞いてゐるのではない。またこの音を自分にピアノで弾いて見るでもない。作曲家と雖も手は二本きりである。音符も書くし、ピアノも弾く、といふ事は到底出來るわけではない。音符を書く時には、手にはペンを持つてゐる。音はたゞ頭の中に觀念としてあるだけである。その音の觀念を音符によつて紙の上に書くのが、つまり、作曲である。その時の作曲家の頭の中は、数学家が数字を書くのと似てゐるとも言はれよう。数学家にとつては数は觀念である。1、2、3、或はx、y、z、或は dy/dx といふ様なものは、たゞさうい

ふ一種の觀念である。この觀念を数字といふ符號によつて紙に書くだけである。作曲家が紙の上に音符を書く時には、その人にとつてのcの音、eの音、gの音といふ様なものは、つまり数学家の1、2、3や、x、y、zや、 dy/dx の様なものである。

しかし、この比較はたゞそれだけに止まらない。たゞそれだけの事ならば、特に音楽と数学とだけを比べるのは無意義である。人間のする事に、何等かの智的觀念が全く缺けてゐるといふ様な場合は極めて稀である。作曲家がまづ音を觀念として思ひ浮べて、そしてそれを音符として紙の上に書くのに別に何も不思議はないわけである。数学家も、もちろん、さうするであらう。畫家も、もちろん、さうするであらう。演説家も、もちろん、さうするであらう。これが、一般普通の人間の心理である。人間のする仕事は、大ていは、みな、さうした心理的な順序によるものである。しかし私共は、音楽と数学とについては、もう少し多くの類似の點を見出す事が出来る。

作曲家が頭の中に思ひ浮べたcの音、eの音、gの音などの觀念は、それだけでは音楽にも何にもならぬ。それだけでは、たゞばら／＼に離れた音である。音楽になるには、どうしても

この多くの音がいろいろに結び付いて、そして一つの全體にまとめられなければならない。このばらばらに離れた音をまとめるのは、それもやはり智的な仕事である。これを音楽の中に織込められた大きな智的な仕事である。作曲家が数學家の様に、頭をつかつて考へる仕事である。ばらばらに離れた音を、だん／＼に一つの完全なものにまとめあげて行くには、そこに一定の法則がある。この法則に従つて、一つ二つの音をつなぎ合せて行くより外に、音楽を作る方法はない。たとへば、私共は、基本の和絃はcの音とeの音とgの音とを結び合せたものである、と教へられてゐる。それは一つの法則である。私共はこの法則を頭に覚え込まなくてはならぬ。覚え込むといふ事は、これは全く智的な仕事である。頭でする仕事である。頭の中に、まづcの音、eの音、gの音の觀念を思ひ浮べて、そして次ぎには、この三つの音の觀念の間に、或る關係をつける事である。そして、さうして出來た新しい音の觀念に『基本の和絃』といふ様な名をつけて、それを外のものと同様ない様に記憶する事である。そしてこれは、まぎれもなく、智的な仕事である。

音楽は、たゞ一つの『基本の和絃』を覚えただけでは、もちろん、事は足りない。まづこの

様な和絃の種類をいろいろ澤山に覚え込まなくてはならぬ。また、この様な和絃の種類をいくらか多く覚え込んだにした處で、それだけでは、もちろん、音楽にはならぬ。たゞ和絃だけが、ばらばらに離れて、いくつあつたにした處で、それではたゞ音の塊があるといふだけである。ちやうど、パレットの上に繪具を出しはなした様なものである。その繪具を手ぎはよく畫布の上に塗つてこそ、はじめて畫が出来る。音楽もその音の塊が互々に或る關係をもつて、規則正しく排列されてゐてこそ、それではじめて統一した音楽の曲になる。

そのいろいろな音の塊——いろいろな和絃をだん／＼に排列して行くには、やはり、そこにむづかしい規則が澤山ある。作曲家は和絃の種類を覚え込んでしまはなければならない様に、この澤山の規則もみな完全に理解し、完全に覚え込んでしまはなければならない。たとへば、cの音、eの音、gの音、eの音の四つは基本の和絃である。この和絃からそのドミナントの和絃、gの音、hの音、dの音、gの音の和絃には直接には移られない。それは、さうすると、五度と八度との平行が出来るからである。そして五度と八度の平行を禁ずるといふ事は、和聲學上の大きな規則である。作曲家が、ぜひとも覚え込まなければならない規則は、まづ一例がそんな

ものである。

この様な規則を理解し、それを正しく覚え込むのは、それもみな智識的な仕事である。まづいろいろな音の觀念を明白に頭の中に思ひ浮べる事である。そしてその音を組み合せて和絃を作る事である。そしてその和絃と和絃との關係のつけかた、和絃から和絃へとだん／＼に移つて行く方法を、それも十分に明白に頭の中に思ひ浮べる事である。すべてが或る音の觀念と或る他の音の觀念との關係のしかたである。頭の中で考へる事である。すべてが頭の智的な方面の働きである。

そしてそれは、ちやうど、私共が數學を學ぶ時の心もちである。私共ははじめに一つ一つの數の觀念を頭に思ひ浮べる。そしてこの觀念の間に或る一定の關係をつける。そしてそれを法則として覚え込む。例へば、私共は、はじめに、 $\sin \theta$ が何であるか、 $\cos \theta$ が何であるかを教へられる。そのつぎには $\sin \theta$ が何であるか、 $\cos \theta$ が何であるかを教へられる。そしてそのつぎには、 $\sin^2 \theta + \cos^2 \theta = 1$ である事を教へられる。そしてこれでの二つの數の間の關係の或る一種だけは完全に明かになる。これは全く智的な仕事である。全く頭で考へる仕事である。そ

してこの數の觀念の代りに音の觀念を用ゐるならば、それがつまり作曲である。

數學に無數の定理や公式がある様に、作曲にも無數の法則や慣例がある。數學を學ぶには、ぜひとその定理や公式を覚えなくてはならない様に、作曲をするには、ぜひとその法則や慣例を覚えなくてはならぬ。そして或る法則を學ぶのは頭の仕事である。智識の働きである。如何に感情が豊かでも、如何に感覺が鋭くても、それでは數學の公式は覚えられない。數學の公式をよく理解し、よく覚えるのは頭腦の明快な人でなくてはならぬ。音樂もこれと同じ事である。如何に感情が豊かでも、如何に感覺が鋭くても、それでは和聲の法則は覚えられない。それでは和聲の法則は十分理解出来ない。たゞ音とその間の關係とを觀念として明瞭に思ひ浮べる事が出来る様な頭腦が必要である。すべて頭の問題である。

たゞ僅に基本の和絃と、そのドミナントの和絃とをつなぐ事だけを考へて見ても、その中には、この様な智的な頭腦の働きが必要である事がわかる。しかし、基本の和絃とドミナントの和絃を結び付ける事ぐらゐは、作曲といふ大きな仕事の前には、殆ど有るも無いも同じ様な些細なものである。作曲となれば、その幾千倍、幾萬倍の頭腦の働きが必要である。

作曲には、たゞ二つきりの和絃の音でなく、その幾千倍、幾萬倍多くの音を頭の中で一一明白に考へて、それをいろ／＼さまざまの和絃の形に組み合さなくてはならぬ。それには、また、メロディをも考へなければならぬ。そのメロディと和絃との關係を考へなければならぬ。たゞこれだけの音の觀念を頭の中に思ひ浮べるだけでも相當な大仕事である。そして、その上に、まだ法則がある。たゞ和絃と和絃とを結び付けるにさへ幾十となく法則がある。その和絃がメロディと結び付いて一句が出来れば、またその一句には一句の中にいろ／＼な法則がある。その一句がだん／＼重なつて一節になり、一章になれば、またそこにはそれ／＼のむづかしい法則がある。つまり、作曲家が或る一曲を作るといふ事は、この様に多くの音の觀念を明瞭に頭の中に作り、その音と音との間のいろ／＼さまざまの法則を悉く記憶から喚び起して、それでその無数の音を順序よく排列してしまふ事である。それで、もし、この作曲家が頭で取扱つた音の觀念を、數の觀念に代へるならば、それは正に數學である。むづかしい數學の問題を解いた様なものである。

そして、音楽家が一曲を作り上げるのには、かなりの時間がかかる。音楽家は机の上に譜紙をのべて、その上に、考へ考へ音符を一つづつ書きつける。大きな、長い曲になつたら、それを書き上げるには、どうしても何週間も何月もかかる。その何月もかゝつて作つた曲を聴衆の方では、何分か何十分かかるの間に一度に聞いてしまふ。そして、この曲の表はす感情がどうだとか、この曲のもつ気分がどうだとか言ふ。しかし、作る方になつて見れば、決してその様な或る一時の纏つた感情や気分から来て、それを表現するために曲を作るわけではない。何週間も、何月も、譜紙の上で考へ考へた結果である。いろ／＼考へて書き改めたり、直したり、削つたり、添へたりした結果である。この長い時間の間、或る感情や気分が變らずに續いてゐる事は決してあり得ない。たゞ、或る感情をこの曲で現はさうといふつもりが、この長い間續いてゐるだけである。そして、作曲家はいろ／＼経験を積んでゐるから、どうしたらこの感情が一番美しくこの曲で現はされるかを知つてゐる。また特に或る感情を描かない時でも、どうしたらこの曲が一番氣もちのいゝものに聞えるかを知つてゐる。それを十分明白に頭で考へて、その結果を始めて音譜の形に書く。作曲家が或る一時の感情にかられて一曲を書き上げた、といふ様な場合は、よしあるにしてもさう澤山はない。稀な場合である。普通の音楽は、

決してその様な事では出来ない。やはり数学家が長い時間をかけて、数学の問題を解く様にしないでならぬ。聴衆は、その苦心の末に漸く解けた答案の何ページかを、何の苦心もなしにさらりと読んでしまふ様なものである。

ここで、私共は、前の問題に立ち歸る。カフエーの軽い舞踏曲の作家と、あの雄大なジムフォニーを作つたベートーヴェンとは、はたして何處が違ふであらうか。それが、もし、直接にわからなかつたならば、一步を譲つて、カフエーの軽い舞踏曲とベートーヴェンの雄大なジムフォニーとは、はたして何處が違ふであらうか。

私共は、今は、些くとも、この最後の問ひには、或る程度までは答へられる。それは、この兩方の曲に含まつてゐる頭の働きの程度が違ふ事である。カフエーの軽い音楽は、まづ第一に曲が短いし、また第二にはその構造が簡單である。たいていは、軽い、おもしろいメロディに極めて普通な伴奏が付いてゐるくらゐのものである。それを作るには、まづ第一に、餘り多くの数の音を頭の中に思ひ浮べなくても事はたりる。またその音と音との關係も、餘り複雑でな

くともいふ。餘り澤山の作曲上の規則を用ゐなくてもいふ。すべて簡単な頭腦の働きかたで出来る。しかし、ジムフォニーは正にその反對である。極度に多くの音を考へなければならぬ。そしてその音と音との關係は複雑を極めてゐる。その上、それには數限りない多くの作曲上の規則が支配してゐる。すべて、非常にむづかしい、非常にこみ入つた頭の働きである。カフエーの軽い音楽は、數學にたとへたら、恐らく二次方程式を解く様なものであらう。しかし、ベートーヴェンのジムフォニーは、むづかしい函數論の議論の様なものである。もし、その作物からその作家を推し測つてもいふものならば、カフエーの軽い音楽だけの作家は、その頭腦は二次方程式の問題を解いてゐるくらゐで、雄大なジムフォニーを作つたベートーヴェンは、その頭腦は正に函數論の奥義を論じてゐるくらゐであるとも言はれよう。

そして私共聴衆にとつては、この二様の頭の仕事はまた別々な感銘を與へる。私共は、僅に二次方程式の問題を解いてゐるくらゐの頭の働きよりも、むづかしい函數論を論じてゐる頭の働きの方を遙に偉いと思ふ。その方を遙に尊重したくなる。そのむづかしい、複雑な頭の働きの結果を見ると、そこから驚嘆の念も湧いて来る。これが私共がベートーヴェンの雄大なジム

フォニーを聞くときの感じのうちの或る一種であらう。そしてカフェーの軽い音楽を聞くときには、私共は、普通には、この様な感じを起さない。も少し安樂な、平穩な感じのうちにそれを聞き流してしまふ。もちろん、人の性質によつて、物に對して感じる感じ方は違ふ。感銘の深さも違ふ。しかし、今一方にカフェーの軽い音楽を置き、一方にベートーヴェンの雄大なジムフォニーを置いたならば、誰にしても必ず或る程度までは、ベートーヴェンの複雑を極めた頭腦の働きを驚嘆せずにはゐられないであらう。

私は、今、かりに、音楽を數學に比べて見た。言ふまでもなく、それはたとへである。ほんの一場のたとへである。音楽の中にも數學に似た様な處がある、といふまでの事である。決して音楽そのものゝ目的までが數學と似てゐる、とは言はない。數學は科學である。音楽は藝術である。

また音楽と數學との間に、直接な具體的な關係があるといふのでもない。まづ音の觀念と數の觀念とは、觀念そのものゝ性質からして違つてゐる。cの音、eの音といふ様な觀念は、實

際耳で聽く事の出来る音の觀念である。音は外界に存在してゐる。そのはつきり感覺で捉へられる外界のものが、心の中に觀念となつて思ひ浮べられるだけである。しかし、1、2、3とか、 dy/dx とかいふ様なものは、それとは甚だ性質が違ふ。私共は1といふ様なものを目で見た事はない。 dy/dx といふ様なものを耳で聽いた事もない。音と數との二つの觀念は、性質からしてとても同じ様には論じられないものである。私がこの二つを比べたのは、その一つの觀念から他の觀念に結び付く有様が似てゐるからである。そして、よし種類こそ違つてゐても、音も數も、それが頭の中に觀念として浮んで來る、といふ事だけは似てゐるからである。

それならば、この比較は何も音と數學とだけに限つた事ではない、と言ふ諸君もあるであらう。もちろん、さうである。私も、たゞ音楽と數學とだけが似てゐる、とは決して言はない。畫と數學とでも、やはりこの様に似てゐる。畫家と雖も、その畫布の上に描き出すものは、彼の心の中に浮んで來たいろくさまゝな觀念である。たゞ空間的に畫が描かれて行く方法と數學とを比べる事は、時間的に流れて行く音楽と數學とを比べるほどには手ぎはよく行かないだけである。

とにかく、もしカプエーの軽い音楽とベートーヴェンの雄大なジュフォニーとを比べる事が、藝術としての音楽を知り、その様な音楽を作る作曲家の心を知る一つの方法であるならば、この二つの違ふ處は、まづ第一に頭の働きの分量である、と言つてもよからう。

(3) 音楽の表情——面白い音楽

音楽は藝術である。その目的は、決して私共の智識に満足を與へる事ではない。前の節で、私は音楽の中にも數學の様な智的な要素があるとは言つた。しかし、音楽の目的までが數學と同じだとは言はない。

音楽は藝術である。その目的の一つは私共の感情生活に満足を與へる事であらう。音楽は、まづ私共の感情を昂ぶらせる。私共の感情を躍らせる。そして或は私共を喜ばせたり、或は私共を悲ませたり、或は物を思はせたり、或は幻影を描かせたりする。音楽が私共の感情生活の上に及ぼす千様萬態な影響は、到底こゝに簡単に敘述する事は出来ない。私共は、しみんとその様な心の有様を味ひたいので、わざ／＼音楽を聞きに行く。それは音楽の様な藝術品でな

いと、決して味はれないものである。數學の様な科學で、この様な感情を味ふ事は決して出来ない。私共は音楽の中に方程式の解を求めるつもりもなければ、樂譜の中から函數論を讀むつもりもない。私共がまづ音楽に求めるものは、感情である。

私共は、まづ音楽に感情を求める。音楽も、私共に、何よりも先きに感情を與へてくれなければならぬ。この前の章で、私共はベートーヴェンの雄大なジュフォニーを見て、その頭の働きの複雑さ、精妙さに驚嘆した。そしてそれを、數學の高等な理論が發展して行くさまに比べた。しかし、それは音楽としては甚だ些細な事である。枝葉な事である。それよりも遙に、遙に重大なのは、ベートーヴェンのジュフォニーが私共の感情生活の上に非常に多くのものを與へる事である。その驚くべき頭の働きは、たゞそれを通じて、私共の感情の上に何物かを與へようとする手段である。決して、それが音楽の目的ではない。もし、ベートーヴェンのジュフォニーが、たゞ組み立て方が複雑で、巧妙で、私共はその頭の働きの偉大さを驚嘆させるだけのものであつたならば、私共は始めからそんなものを藝術品としてこゝで考へて見る氣は起らなかつたであらう。

音楽は藝術である。その第一の目的は感情である。それで、もし或る音楽が感情の上で、十分に、私共を満足させてくれたならば、その數學的な構造の面白さなどは、もちろん、第二義第三義の問題になつてくる。私共は、これまで、便宜のために管絃樂を例にとつて來た。管絃樂は音楽の中では一番大仕掛なもので、形の上の面白さ、構造の巧妙さといふ事は、どうしてもその鑑賞の中にはいつて來る。しかしそれがピアノとなると、この二つは、或る程度までは明白にわけて考へられない事もない。たとへばショパンの『プレリュード』の様なものである。その中には僅に二行か三行くらゐな短い曲がある。そしてその組み立ての技巧といつても、別に何も珍らしく、驚くほどのものはない。たゞ構造の上から見れば、誠に簡単な曲である。ツエルニーの子供の爲めの練習曲の中にでもありさうな曲である。この様な曲で、私共は決して作曲者の頭腦の働きの複雑さや偉大さを嘆賞する事は出來ない。この様な曲の全生命は、感情にある。それが私共にいろ／＼な美しい感情や氣分を與へる處にある。同じくらゐに簡単なツエルニーの練習曲からは、私共は殆ど何の美しい感情も感じない。ショパンの『プレリュード』は、構造こそ簡單であらうが、しかし、それが私共に感情の上では非常に多くのものを與へる。

そして私共はその様な音楽を非常に價值のある藝術品であると思つてゐる。

この章でも、前の例にならつて、私共は、再び、カフェーの軽い音楽とベートーヴェンの雄大なジムフォニーとを並べて見よう。そして感情生活の上では、大きな藝術品がたゞの娯樂品とどう違ふかを考へよう。もし多少でもそれがわかるならば、たゞの娯樂のための音楽を作る人と、藝術的な大ジムフォニーを作る人との心の違ひもわかるかも知れない。言ふまでもなく、それは昔からいろ／＼に議論され、いろ／＼に研究されて來た大問題である。そして、なかなか容易には解けない難問題である。讀者諸君も、もちろん、私などから、その満足な解答を得ようとは思はないであらう。私も、今は、こゝでは、たゞ僅に私の思ひつき、私の斷想を述べうるだけである。

一方にカフェーの軽い舞踏曲ぐらゐなものを置き、一方にベートーヴェンの雄大なジムフォニーを置くなれば、私共はまづ第一に、その與へる感情の種類が大變違ふといふ事に氣がつくであらう。

カフェーの舞曲曲は耳に聞いては非常に面白い。いゝ氣もちになる。何となく物が愉快になる。うれしくなる。氣がうき／＼する。自分も思はず一緒に口笛でも吹いて見たくなる。足で拍子がりたくなる。相手があつたら、自分も一つ踊つて見たくなる。——カフェーの音楽は、まづ、人をさうした氣もちにするものである。そして、多くの場合、たゞそれだけのものではない。人をさうした嬉しい、悦ばしい、うき／＼した氣もちにすれば、それでカフェーの音楽はまづその役目を果した事になる。

さういふ種類の快感は、實は、すぐ飽きられるものである。はじめのうちは、面白いから、喜んでその音楽を聞いてゐる。しかし、間もなく飽きて来る。もうけつこうだ、と言ひたくなる。そして、まだその音楽が続いてゐると、退屈になつてくる。眠くなつてくる。ちやうど、甘い汁粉の様なものである。はじめのうちは非常にうまいと思ふ。そして、そんなうまい汁粉を吸ふ事は非常に愉快である。しかし、大ていな人には、決して何杯も吸ふ事は出来ない。忽ち飽きて来る。そして溢い番茶がほしくなる。あまい汁粉は一杯か二杯にしておくに限る。その様に、たゞ私共の耳を悦ばせ、私共の氣をうき／＼させる音楽も、あまり長くてはいけない。

形が小さく、短くて、飽きられないうちに済んでしまふ様なものでなくてはならぬ。短い舞曲曲などは、甚だそれに適してゐる。

そして樂器の音といふものが、そも／＼、面白い、愉快なものである。人の氣をうき／＼させるものである。人の心は、美しい樂器の音を聞けば、誰でもみなうれしくなり、楽しくなる様な性質のものである。はじめから、さういふ様に出来たものである。音楽で人を悦ばせたり、人の心をうき／＼させたりする事は、それが音楽で一番やさしい事である。汁粉をこしらへて、人をそのあまみで悦ばせる様なものである。甚だあたり前の事である。カフェーの音楽の作家は、音楽の一番やさしい、一番あたり前な仕事をしてゐる人である。そして何事によらず、一番やさしくて、一番あたり前な仕事は、その仕事の範囲内では、まづ誰にでも出来やすい仕事である。平凡な仕事である。やつても、別に誰からも、特に珍らしがられもせず、特にほめられもしない仕事である。

この平凡な仕事の範囲内で、しかも何か目に立つた事をしようと思ふならば、音楽そのものの組み立ての中で、何とか珍らしい型を作るより外にしかたはあるまい。つまり變つたメロデ

イを作るとか、變つた和聲の使ひ方をするとか、或は變つた樂器の配合をすとかいふ様な事である。しかしさうなると、大部分は頭の方の問題である。記憶や比較の問題である。あの曲のメロディはかうであつたが、この曲のメロディはそれとは違ふ、——なるほど珍らしい、變つてゐる、よくこんな變つたメロディを考へついたものだ、といふ様な事になる。和聲でも、樂器の組み合せ方でも、やはりこれと同じ事である。澤山いろ／＼なものを聞いて、それをよく頭に覚え込んでゐればこそ、こんな判断が出来る。もしはじめてカフェーの音樂を聞く人や、或は強ひてそんな比較などを試みたくないと思ふ人にとつては、結局どの音樂も大ていは同じ様なものである。小倉でも、田舎でも、汁粉は結局汁粉である様なものである。そして、苦勞してこれからまた新らしくそんな種類の曲を作るのは、非常に無駄な事の様にも見える。

これがカフェーの軽い音樂である。こんなものを作るのが、カフェーの軽い音樂の作家である。そして、もし物を極端に言へば、些くも音を音樂の形に組み上げる事さへ知つてゐる人ならば、——そして自分の心に、こんな音樂を聞いて喜ばしい感じを起した經驗のある人ならば、誰もその様な作家だけにはなり得られるかもしれない。

これは、言ふまでもなく、非常に粗末な物の見方である。誠に皮相な觀察である。次ぎには、私共は、も少し明瞭にカフェーの音樂を考へなければならぬ。

たゞ一くちに、嬉しい感情だとか、氣がうき／＼する様な心もちだとか言つても、それにはいろ／＼な程度の違ひがある。非常に嬉しい氣もちもあれば、或はかすかに悦ばしさを感じる様な事もある。私共は有頂天になつて喜ぶ事も愉快であるが、しかし靜かな、ほのかな喜びを味ふ事もまた愉快である。そして、同じく嬉しいとか、悦ばしいとか言つても、その嬉しさ、悦ばしさにも、やはりいろ／＼な差別もある。實際の生活で、私共の心の中に起つて來る感情は、さう簡單に、型にはめこんでは考へられない。

カフェーの音樂も、實はさうである。大體は、同じ様に、私共の心を愉快にし、氣をうき／＼させるものではあるが、しかし、その中にはいろ／＼な違ひがある。私共を有頂天にさせようとするものもある。私共に靜かな、ほのかな喜びを味はせようとするものもある。或はこの様ないろ／＼な感情をいろ／＼な順序にませ合せようとするものもある。また同じそのほのかな

喜びにしても、或は有頂天な快樂にしても、それにはまたそれ／＼の差別もある。そしてそれには感情より外の心の働きもまじつて来る。違つたメロディを聞けば、よし實は同じ様に悦ばしい氣もちを起させるべき筈のメロディであるとしても、そのメロディの形が違ふといふ事から、知らず／＼、その與へる感情も違つてゐる様な氣もちがする事もある。或は作曲家の名が違つてゐるといふ事から、知らず／＼その與へる氣もちも違ふ様に思ふ事もある。それで、實際の場合には、千のカフェーの音樂には、結局似た様なものではあるが、しかし、千のいくらか違つた感情がつきまとつてゐる、とも言はれないこともない。そして、これは私の特色の出でゐるカフェーの音樂、これは彼の特色の出でゐるカフェーの音樂、といふ様な事も言はれよう。さうなれば、或る作曲家が、一生涯カフェーの音樂ばかり作つてゐても、必ずしも無駄でもないかもしれない。そして、これが恐らく一番同情をよせて考へた時のカフェーの音樂の作家であらう。

私共が、今までカフェーの音樂の事を話してゐて、そして、それから、すぐハイドンやモー

ツァルトのジムフォニーに移つたなら、讀者諸君は、それこそ藝術を侮辱するものだといつて怒るであらうか。しかし、私共は、今こそちやうど、ハイドンやモーツァルトのジムフォニーを考へるに適した時ではあるまいか。

ハイドンやモーツァルトのジムフォニーを聞いてゐると、大ていの場合には私共の心は何となく非常に嬉しくなつて来る。何となく氣がうき／＼して来る。氣もちがよくなつて来る。心ははれやかに、さわやかになつて来る。そして私共は、この曲は非常におもしろかつたと思ふ。實際、おもしろいとか、愉快だとか、氣もちがい／＼とかいふ言葉は、モーツァルトのジムフォニーをよく形容してゐるらしい。私共はこの様な言葉を、たび／＼モーツァルトの音樂について聞かされる。そして、これがまた實にカフェーの音樂が私共に與へる一番主な感情である。

モーツァルトのジムフォニーも、カフェーの軽い音樂も、それが私共に與へる感情は確に似た處がある。その基調になる感情は、いづれもみな快感である。私共を氣もちよくさせ、心をうき／＼させるものである。カフェーの音樂が、そのために、カフェーで演奏せられるに適してゐるものならば、モーツァルトの音樂も、同じ様に、カフェーで演奏せられても少しも不都

合はなささうである。今日ではモーツァルトのジムフォニーといへば、非常に高級な藝術品で、カフエーの煙草の煙の間で演奏されるのは、とてももつたない様に思はれてゐる。しかし、実際には、カフエーの音楽もモーツァルトの音楽も、その持つてゐる感情が結局同じものであるならば、モーツァルトの方だけを特に高い藝術として尊重するのは、理由のない、不公平な事であるかもしれない。誰か思ひ切つて銀座に『カフエー・モーツァルト』を始めて、そこでは音楽は、大ていはハイドンやモーツァルトのジムフォニーをやる事にしても、それに別に何の不都合も起らないであらう。

もしそれに何かの不都合が起るとしたならば、モーツァルトのジムフォニーは、カフエーでやるにしては、あまり長すぎる事であらう。たとへば、あの有名な長調のジムフォニー——『ユピテル・ジムフォニー』——を、始めから終りまで神妙に聞いてゐなければならぬ、となつたならば、せつかくのコーヒーは水のように冷たくなつてしまふ。あのジムフォニーはベートーヴェンの『第九』などに比べたら短い方であらうが、しかし、コーヒーを飲みながら聞くには長すぎる。たいていのハイドンやモーツァルトのジムフォニーは、とにかく、コーヒーをの

みながらちよつと聞くには確にあまり長すぎる。そして、この長すぎるといふ事には、いろいろな問題が含まれてゐる。

長いのはその内に、いろ／＼な内容が含まれてゐるからである。前に私共が考へた様に、同じ氣もちのいゝ感じでも、同じ有頂天になる様な嬉しさでも、それにはさまざまの程度がある。さまざまの種類もある。同じあまい物にしても、汁粉もあれば、コ、アもある。乾菓子もあれば、生菓子もある。化学的には、あまさその物には變りはあるまいが、實際の場合では、たゞ純粹にあまさばかりでない。それには香りもまじるし、あまさ以外の味もまじる。見た目にもいろ／＼の違ひがある。舌ざはりもそれ／＼のもので違ふ。こんな事がみな一緒に纏つて、同じあまみのものでも、いろ／＼な味の違ひが出て来る。モーツァルトのジムフォニーは、つまり一曲の中にいろ／＼な變つたおもしろさ、楽しさ、うれしさなどを順序よく織込んだものである。汁粉と、コ、アと、乾菓子と生菓子とを、順序よくつぎ／＼に御馳走する様なものである。カフエーの軽い短い音楽は、そのうちの一種、たとへば汁粉の一杯くらゐにあたる。モーツァルトのジムフォニーがそれよりも長くなるのは、誠にあたり前の事である。そして、汁粉

の一杯で十分である時に、私共はともそれ以外にコ、アや生菓子には手が出せない。

カフェーでは、私共はこんな長い間音楽ばかり聞いてゐられない。これほど長い間音楽を聞いてゐようと思へば、音楽が好きで、そして音楽だけを聞いて楽しむつもりでなくてはならぬ。こゝで、はじめに、カフェーの軽い音楽と、演奏會用のジムフォニーとが分れて来る。そして純粹に音楽だけを目的とする音楽には、だん／＼に藝術といふ名をつけられる様になる。藝術といふ名がつくと、またそれ相當の權威もついてくる。そしてその様なものを作つた人には、藝術家として美しい傳記が書かれる。そして作曲家の傳記から來る印象がその音楽にも深くつきまとふ様になる。さうなると、うっかりコーヒーなど飲みながら、そのジムフォニーを聞いてはゐられなくなる。

そしてこの長いモーツァルトのジムフォニーの中には、言ふまでもなく、前の節で私共が考へた様な頭の働きを讚嘆する部分も澤山はいつてゐる。實に巧妙に組み立てゝある！——さういふ感じなしには、私共はともモーツァルトのジムフォニーは聞かれない。そしてその様なまとまつた大きな形から來る威壓的な感じが、このジムフォニーをますます／＼大きな、堂々たる

藝術品とする。

もしモーツァルトのジムフォニーが、私共にとつてはその様なものであるならば、私共はそれによつて、多少はモーツァルト自身の心の中を察する事も出来る。モーツァルトは、恐らく、悦ばしいとか、氣もちがい／＼とか、或は有頂天に嬉しいとかいふ様な感じを主として音楽と一緒に感じてゐたのであらう。モーツァルトがピアノを弾くときは、その心の中は、いつも楽しくあつたであらう。モーツァルトが歌を唄ふときは、その心の中は、いつもうき／＼してゐたであらう。ちやうど、私共がカフェーで軽い舞曲を聞く時の様であつたであらう。そして、さういふものが、モーツァルトの音楽に對して感じた大部分であつたであらう。それであるからこそ、彼の作つた音楽も、自然と楽しい、嬉しい、氣のうき／＼するものがその大部分を占めてゐるのであらう。

その上に、モーツァルトはいろ／＼な音を運用する事にかけては、非常に明敏な頭をもつてゐた。當時の音楽で知れてゐた限りは、どんな複雑な和絃でも、どんなむづかしい管絃の組み合わせでも、彼は自由自在に使ひこなすだけの頭を持つてゐた。この明敏な頭の働きの出来るだ

け十分に働かすためには、短い曲では物足りない。音を組み立て、句を作り、句を組み立て、節を作り、章を作り、段を作り、すべてを一つの大きな、しつかりとした大曲にまとめ上げて、そしてその中に、音の運用についてのあらゆる技巧を用ゐるつくさなければならぬ。彼の頭脳は、細かい部分々々の音をこの様な大きな形に、一寸のゆるみもなく組み上げるに足る強い力をも持つてゐた。

この二つのもの、——音楽に對する愉快な、楽しい、嬉しい感じと、音を運用する非常に明敏な頭脳の働き、——この二つのものがモーツァルトの音楽を作つたであらう。カフエーの音楽の作家は、それと似てはゐるが、その二つについて、各々劣つてゐる點がある。まづ音楽に對する感じにモーツァルトほどの深さと、強さと、そして種類の豊富さを缺いてゐる。音を運用する事については、とてもモーツァルトほどの頭脳の働きのない。

しかし、カフエーの音楽のつぎには、どうしてもモーツァルトの美しいジュフォニーが來るものらしい。そのうちには、カフエーの音楽がもつてゐるべき筈の感情が、いろいろさまざまの姿で悉くはいつてゐる。或る一曲をとつても、その中にはカフエーの音楽の幾十ぶりの感

情がはいつてゐる。いろいろの種類が、いろいろの強さの程度ではいつてゐる。そして一曲の中に、これほどの感情を織込むためには、非常に複雑な音の組み合わせが必要である。私共はその巧妙な音の組み立てを見て、また更らに驚嘆の念を起す。これが、恐らく、私共が藝術品としての音楽に接するまづ最初のものであらう。この様な音楽を私共に與へてくれる人が、私共がまづ最初に接する音楽家であらう。

(4) 音楽の表情——音楽と生活

モーツァルトの次ぎに來る人が、それが偉大なるベートーヴェンである。私共は、こゝではじめて、ベートーヴェンに接する機会を得たのである。

ベートーヴェンの保護者であり、友人であつたワルドシュタイン伯は、まだ若いベートーヴェンの旅の門出を祝つて、さう書いた。——『希くは、ハイドンの手からモーツァルトの精神をうけ取るように！』しかし、この有名な言葉も、到底ベートーヴェンの一生涯の間の仕事を言ひ盡す事は出來なかつた。彼は、一生のうちには、それ以上の仕事をした。彼は十分にハイ

ドンの手からモーツァルトの精神をうけ取つた。そして、さらに、その上に、ベートーヴェン自身の新しい精神をも吹き込んだ。彼が、今日でもなほ、偉大なる音楽家として尊敬せられるのは、決してハイドンの技巧やモーツァルトの精神をそのまま承け継いだ事ではない。その上に、さらに、新たに何物かを付け加へた事である。

ベートーヴェンがモーツァルトの藝術の上に、さらに付け加へたものは何であらう。――

第一は、もちろん、頭の働きの量である。頭の働きの量が遙かに多くなつた事である。前の章にならつて數學にたとへるならば、二次方程式が三次方程式になつた様なものである。ベートーヴェンの音楽の中に含まつてゐる音の運用の技巧は、モーツァルトのよりも複雑である。彼はモーツァルトが考へたよりも多くの音の關係を考へた。そして多くの音の結び合せ方を考へた。彼はモーツァルトが考へたよりも込み入つた句や節の開展のしかたを考へた。彼の作つた音楽は、全體でモーツァルトの作つた音楽よりも大きくて、長さが長い。そして音楽が長くなればなるほど、その中に織込まれた音の技巧は多くなる。ピアノの曲でも、ジムフォニーでも、モ

ーツァルトに比べたら、まづ大體はさう言はれる。

それで私共は、モーツァルトのつぎにベートーヴェンを聞けば、まづこの頭脳の働きの驚嘆する。複雑な音の技巧と、巧妙な音の運用を驚嘆する。形の堂々として大きな事と長い事とが、私共を威壓する。そして、この威壓の力はベートーヴェンの音楽の方が、何となくモーツァルトの音楽よりも偉大である様に思はせる。莊重である様に思はせる。容易に私共の玩弄物にはなりさうにもない様に思はせる。ベートーヴェンの音楽はいかめしい。むづかしい。近づき難い。犯し難い。この事がベートーヴェンの音楽を、大いに權威あるものにする。モーツァルトのジムフォニーも、それをカフエーの軽い音楽に比べたら、私共は、もちろん、形の大きさから来る威壓の力を感じる。しかし、ベートーヴェンのジムフォニーに比べたら、そんな力は殆ど消えてしまふ。そして、むしろ、小さい、可愛らしいものになつてしまふ。これが、恐らく、頭脳の働きの量の違ひから出て来るベートーヴェンの音楽とモーツァルトの音楽との感じの違ひであらう。それは、つまり、モーツァルトの音楽がカフエーの音楽よりも優れてゐた點を、も少し大げさに、も少し徹底させた様なものである。

しかし、頭腦の働きよりも、なほ重要なものは感情である。もし、ベートーヴェンの音楽の感情はモーツァルトの音楽と別に何の違ひもなく、たゞ形だけが長くなつて、大きくなつて、その構造がむづかしくなつただけならば、それならば問題はこれきりですむ。話は甚だ簡単である。たとへば同じ小倉汁粉を、小さな椀に盛つたのと、大きな鉢に盛つたのとの違いの様なものである。あまり重要な違ひではない。むしろ下だらない違ひである。

しかし、ベートーヴェンとモーツァルトとの場合は、そんな下だらない違ひでない。決して、そんな簡単な話ではすまない。こゝに、さらに重要な感情の問題が残つてゐる。ベートーヴェンは、モーツァルトがその音楽で十分に現はし得なかつた感情を、も少し十分に、も少し明瞭に現はさうとした。そこが、恐らく、ベートーヴェンの音楽の一番大切な點であらう。そここそ、實に、ベートーヴェンの音楽の急所であらう。

モーツァルトの音楽は、愉快な、嬉しい、おもしろいものであつた。カフエーの軽い音楽の現はす感情と、感情の上では、さう大した違ひはない様であつた。そして、それ以外の感情は、

あまり現はれてゐなかつた。つまりモーツァルトでは、音楽は愉快な、おもしろい、楽しいものである、といふ事になる。しかし、人間の感情はそんな簡単なものでない。私共の一日の間の生活を見ても、愉快で、おもしろくて、楽しいといふ様な時間は、さう澤山はない。それよりも、苦しい事が多い。悲しい事が多い。怒りたい事が多い。泣きたい事が多い。私共は決して笑つてばかりは暮されない。私共の一生は、むしろ涙の一生である。もし、音楽がたゞ愉快な、おもしろい、楽しいものであるならば、私共の一生のうちで、音楽によつて現はされる部分は甚だ僅かである。私共の實際の生活と、音楽の現はしてゐる感情とは、あんまり深い關係はなくなる。たゞ私共の心が悲しい時や、苦しい時などに、愉快で、おもしろい音楽を聞けば、多少はその悲しさや苦しさを忘れて、心が慰む、といふくらゐなものである。それにしても、おもしろい音楽などで慰められる様な、そんな浅い、單純な苦しみや悲しみだけならば、世の中は至極平穩無事である。私共はそんななまやさしい悲しさや苦しきだけでは、世は渡られない。私共が實際に味ふ悲しさや、苦しきは、おもしろい音楽を聞いたくらゐで忘れられるものでない。そして、音楽がそんなものならば、音楽といふものは、私共の生活には、さう大して

必要なものでも何でもないとはいふ事になる。

モーツァルトにしても、已にさうである。モーツァルトの一生は、決してすべてが愉快な、おもしろい、楽しいものではなかつた。非常な天才を持ちながら、お金に困つた。のんきに作曲三昧にふけつてゐられる様な裕福な生活は出来なかつた。また彼の妻は、到底この大天才の内助の妻たるには適しなかつた。彼は妻のためにも苦しんだ。そして若くして已に不治の病は彼を襲つて來た。どう見ても、モーツァルトの一生は、楽しい、おもしろい、愉快な一生ではなかつた。しかし、彼の音楽は、それに反對に、愉快な、おもしろい、楽しいものである。悲しい、苦しい心が、楽しい、愉快なものを作つたのである。どうして、そんな事が出来たのであらう。どうして、そんな心が、そんな反對なものを作り出して、しかもそれで安心して居られたのであらう。それが私共にわからない點である。不思議な點である。つまりモーツァルトの一生は、モーツァルトの音楽の中には現はれてゐない、といふ事になる。音楽は音楽であり、生活は生活であつて、この二つは全く別なものであつた、といふ事になる。自分の一生の事業の中には、自分自身の生活はあまり現はれてゐない、といふ事になる。

ベートーヴェンの音楽が、モーツァルトの音楽と違ふ主な點は、恐らくこゝであらう。モーツァルトの音楽でまだ十分に現はれなかつたものを、ベートーヴェンはその音楽で現はさうとした。音楽の中に、自分自身の一生を織込まうとした。ベートーヴェンはよく知られてゐる様に、いろいろな人生の苦痛と悲哀とを體驗した。苦しい生活をした。煩はしい生活をした。戀をしては、いつも破れた。音楽家にとつて一番大切な耳の感覺を早くから失つた。それで彼は一生、いら／＼してゐた。沈鬱であつた。人と交はる代りに、野や森をさまよひ歩いた。これがおもしろいモーツァルトであつたならば、それにもかゝはず音楽の方は、明るい、楽しい、愉快なものを作つたであらう。しかしベートーヴェンでは、その音楽にもやはり自分の生活から來た感情が浮き出てゐる。彼の生活が暗かつた様に、その音楽も暗い色を帯びてゐる。沈鬱な氣が満ちてゐる。憂鬱な感じがたゞようてゐる。彼の生活が努力の生活であつた様に、その音楽も全體が緊張し切つてゐる。つまり、モーツァルトでは、音楽はたゞ愉快な、楽しい、おもしろいものであつた。しかし、ベートーヴェンはさらにその音楽の性質を擴大して、それ以外の感情をも現はした。音楽は、或る時には、沈痛なもの、憂鬱なもの、暗いもの、緊張し切

つたものともなつた。たとへば、今まではたゞ甘味だけであつた菓子に、さらに苦味も、酸味も、凡そ人間の味へる味をみな込めた様なものである。

言ふまでもなく、音楽の中に織込められたそのいろいろな感情は、決して實際の感情のまゝではない。たゞ假りにさう感じれば感じられるといふくらゐなものである。假りのものである。音楽そのものが、もと／＼面白い、愉快な、心地のいゝ音から出来てゐる。いかなる作曲家でも、この根本の性質をどうすることも出来るものでない。たとへば、悲しい音楽といつても、音楽である以上は、もちろん、面白い、心地のいゝものには違ひない。たゞその上に、曲の進行のぐあひや、メロディの様子や、その他いろ／＼な音楽上の技巧で、その曲がたゞ面白いばかりでなく、またどこことなく一種の悲調をも帯びてゐる、といふくらゐな事にすぎない。ちやうどあまい汁粉の中に、一さじの鹽を入れた様なものである。それは汁粉であるから、あまい事は必ずあまい。しかし、その上に、さらに、どこともなく鹽辛い味も出てくる、といふくらゐな事である。そして砂糖と鹽との入れぐあひで、さまざまの變つた味になる。もしそれが、たゞ鹽だけでなく、その外に、まだ澤山の味を入れたなら、そしてその入れかたがよく調和し

てゐるならば、その汁粉は、さらに豊富な味のものになる。これは全く料理人の獨創的な手腕である。音楽に愉快な感情より外のものを入れるのも、つまりはそれと同じ事である。

たとへば『ゾナーテ・アバシオナタ』は、ベートーヴェンのテレゼに對する戀の煩悶、戀の苦痛を描いたものだといはれてゐる。しかし實際の戀の煩悶は、決してこんな愉快な、心地のいゝものではない。戀の煩悶といへば、誠に身を切る如く悲しい、苦しいものである。私共がこのゾナーテを聞けば、まづ面白くなる。心地よくなる。うれしくなる。これを何も知らずに聞く人は、或はこれは面白い、愉快な曲だと言つてしまふかもしれない。そんなものは、決して戀の煩悶にはない感情である。しかも私共が、十分に注意して聞けば、この曲からはただ愉快な、面白い感情が起るだけでなく、また何となく一種の悲調を帯びた様な氣にもなれる。憂鬱な氣にもなれる。また時とすると、感情が非常に興奮して來たり、緊張して來たりする。たゞ愉快なとばかりも言はれない。これがこの曲のもつてゐる感情である。そしてそれは何となく、私共に、歴史で讀んだベートーヴェンの戀の煩悶を聯想させる。また私共が實際に戀の煩悶を胸に抱いてゐるならば、正にこの曲はその煩悶をまづ第一に想ひ起させる。しかし、

いかにその煩悶を想ひ起すにしても、それは背いた戀人の寫眞を見て想ひ起すのとは大にわけが違ふ。今現在私共は音樂を聞いてゐるのである。私共の氣もちの大體は、面白い、愉快な氣もちである。その間にかすかに戀の煩悶をも思ふといふだけである。今現在、戀人に背かれたといふのとは、その氣もちも似つかない。すべてがたゞ假りのものである。決して現實のものではない。よし涙が流れても、その涙はうれしい、あまい涙である。よし胸が痛んでも、その痛みは楽しい、心地のいゝ痛みである。音樂の中で感じる感情は、面白いとか、愉快なとかいふものを除いては、すべて夢の様な、現實から遠く離れた、假りの感情である。ベートーヴェンがその一生涯の喜怒哀樂をその音樂で描き出し、その音樂に織込んだといふのも、實は、たゞ、この様な夢の姿として描き出し、假りの姿として織込んだのである。

こんな現實を離れた假の感情を味ふ事は、それこそ實に私共の心の大きな慰めである。大きな楽しみである。私共はその夢の様な、假りの感情をこそ、特に藝術で味ひたいのである。それが誠に藝術的な享樂である。藝術でなくて他の何がこんな美しい夢を私共の心の上に結ばせるであらう。ベートーヴェンの音樂は、つまり私共に、人生のいろ／＼な複雑な感情を、この

様な美しい夢の姿にして與へてくれるものである。

音樂に、それだけ多くの感情が、こんな特別な、藝術的な形で織込められたために、音樂と私共との關係も、またこゝで餘程變つて來た。

モーツァルトの様に、苦しい生活をした人が、愉快な、楽しい音樂を作るのは、ちやうど泣きながら笑ふ様なものである。それは心ならずも笑ふのである。私共がそれと一緒に笑うても、その笑ひは決して泣いてゐる人の心には通じない。たゞ私共は笑ひたいから、その笑ひと一緒に笑ふといふだけである。しかし、私共を笑はせてくれる肝心な當人は、却つて泣いてゐる。甚だよそ／＼しい次第である。それでは、私共は、この人とは心の底から打ちとけたお友達になりようがない。つまり、私共を笑はせる音樂が、モーツァルトと私共との間を隔てゝゐる様なものである。

ベートーヴェンでは、私共との關係がそれとはやゝ違つてゐる。ベートーヴェンは實際泣いてゐる。そして、その作つた音樂もやはり泣いてゐる。私共にも泣いてゐる事がはつきりわか

る。それで、私共もその音楽と一緒に泣く事が出来る。もちろん、私共の一生は、殆ど泣く事ばかりである。この世の中は、誠に涙の世の中である。私共に泣いて見せる音楽は、誠に私共の心にびつたりあつた音楽である。そして私共が泣く時には、ベートーヴェンも泣いてゐる。音楽を通じて、私共はベートーヴェンと隔意なくお友達になられる。音楽を通して、ベートーヴェンの心と私共の心とが堅く握手する事が出来る。その間に、何一つ、よそくしいものはない。音楽は、私共の心とベートーヴェンの心とを堅く結びつけるだけで、決して隔てる事はない。モーツァルトの場合とは、大いに違つてゐる。

私共は、この偉大なるお友達を得た事を、どれほど喜んでゐるであらう。ベートーヴェンも私共の様に泣いてゐる。私共の様に悶えてゐる。私共の様に苦しんでゐる。それであるから、ベートーヴェンには私共の心がよくわかつてくれる。そして、ベートーヴェン自身は、その人生の悪戦苦闘を勇しく堪へて来た。遂にその悪戦苦闘に勝つて、花々しく歡喜の歌を唄つた。誠に人生の戦場の勇士である。ロマン・ローランは、この上もなく美しくその面影を私共の爲めに描き出してくれた。私共はそれを見て、實に心強くなる。私共は力をつけられた様に思ふ。

私共の心に勇氣を吹き込まれた様に感じる。それは實に大きな感激である。私共のこの苦しい、暗い生活に、希望の光を與へるものである。そしてこれがベートーヴェンの藝術である。どう考へても、モーツァルトの藝術とは、やゝ趣きが違つてゐる。そして、私共にこの様な藝術を與へたものが、それが實にベートーヴェンといふ偉大なる藝術家の心である。

ベートーヴェンの主な作品について、それがモーツァルトよりも變つてゐる處を探し求めるならば、誰の意見もみな大ていは一致する。ベートーヴェンの音楽の大部分は、モーツァルトの音楽と同じ様に、標題のない音楽である。音楽の標題は、多くはその作曲の型の名である。ジムフォニーとか、ゾナーテとか、コンチェルトとか言ふ様なものである。それでその作曲の意味や内容は、たゞ私共がそれを聞いた上で考へるだけである。そしてその種類の作曲のうちで、たとへば有名な第五ジムフォニーや、或は『ゾナーテ・アパシオナタ』などを取れば、私共の議論は、どうしても前に述べた様な處に落ちて来る。

しかし、ベートーヴェンの音楽の中には、稀には標題のあるものもある。『バストラール』

ジューフォニー』や、『ゾナーテ・いざさらば』などさうである。或は明かに標題には示してなくとも、第三ジューフォニーでは、ナポレオンの一生を描かうとした事は、彼の傳記から確められてゐる。この様なのもベートーヴェンの音楽の一特徴である。彼はその音楽の中に彼の生活から来るいろいろな感情を盛り込まうとした上に、また彼が明かに眼で見たものや、彼の頭の中に英雄として描いた人の姿を、それもやはり音楽の中で歌はうとした。その極端な場合は、第六ジューフォニーである。彼は小川の流れる野邊で鳴いてゐる鳥の聲を、そのまゝ樂器で模倣しようとした。つまり、この様な音楽で、彼は音楽に物語をさせようとしたのである。音楽の範圍をもう一步ひろめて、音楽を私共の言葉にまで近よせようとしたのである。ナポレオンの生涯や、田園の風趣を描くのは、本當は言葉でなくては出来ないものである。或は畫でなくては出来ないものである。

この傾向がさらに進むと、全く無形のもの、全く抽象的なものをまで、音楽の中に寫し出すやうとする様になる。それは第九ジューフォニーである。彼は、この曲で、彼が人生に就いて考へた事、感じた事を言ひ現はさうとしてゐる。彼の人生觀を述べようとしてゐる。それは、もち

ろん、そのためには本當の言葉を借りて來なければならなかつた。それはシルレルの『歡喜の歌』である。たうとう彼が詩をまで借りて來なければならなくなつたのは、一つは音楽の形式に新機軸を出し、その技巧を豊富にするためでもあつたであらう。しかしまた一方には、彼が音楽の中で、なるべくひろく、深く、自分の心の中を表現して見たかつたからでもあらう。

ベートーヴェンの音楽をモーツァルトに比べると、たゞ感情の範圍が非常に擴まつたといふ事だけでは、やゝ言ひ足りない處がある。ベートーヴェンは、たゞ感情の範圍を廣くしたばかりでなくて、觀念や思想といふ様なものまでを、音楽の中に描き出さうとしてゐる。彼の心の中のもの、殆ど残りなく音楽に現はれてゐる。彼自身の全面目が、音楽を通して私共に見えて來る。これがベートーヴェンの音楽である。これがベートーヴェンの藝術である。そしてこれがベートーヴェンがモーツァルトよりも、さらに進んだ、さらに内容の擴大した藝術を作り出したといはれる主な點である。

モーツァルトは、私共を楽しませた。私共をおもしろく、愉快にしてくれた。私共の心がモーツァルトの音楽と關係の出来るのは、たゞその様な狭い感情の範圍内だけである。そして、その上に、それはたゞ私共を愉快にしてくれる、といふだけの事で、モーツァルト自身とは、決してその音楽を通しては親密には交はられなかつた。

ベートーヴェンは、その音楽に、更に多くの感情を現はした。自分の一生のうちに體驗した感情や、事件や、思想までを、その音楽にも現はさうとした。それで私共は、その音楽の中に、私共自身の心の姿を見出すと同時に、その音楽を通して、よくベートーヴェン自身と交はる事が出来る。その偉大な人生の闘士としての姿に接する事が出来る。音楽の面目は、こゝで全く一新した。

この音楽の傾向は、近世になるに従つてだん／＼に發展して來た。多くの音楽家は、いやしくも自分の頭の中にあるもの、自分の胸の底にあるものは、何でも悉く音楽によつて表現しようとした。たゞ感じた事だけでない、たゞ悲しいとか、嬉しいとかいふだけでない。自分の思つた事、自分の考へた事、自分の思想、自分の觀察、その様なものまでも、悉く音楽で描き出

さうとした。さうなると、音楽は全く音楽家の言葉になる。音楽家が言はうと思ふ事は、何でも言はれる。たゞ悲しいとか、嬉しいとかいふだけの言葉でない。感想も言はれれば、議論も述べられる言葉である。そして、もし私共がこの言葉を了解しさえすれば、私共は音楽によつて、音楽家の心の殆ど全體に接する事が出来る。

その例をあげるならば、リストの『ジムフォニーの詩』の様なものである。或はシュトラウスの『音の詩』の様なものである。リストやシュトラウスは、その音楽でたゞ悲しいとか、嬉しいとかいふ感情を描かうとしてゐない。それよりも遙に、遙に、大仕掛である。たとへばリストは、そのジムフォニーの一つで、タッソーの生涯を描き出さうとしてゐる。この昔の熱情詩人の悲哀と勝利とを細かく音の上に寫し出さうとしてゐる。或はラマルテーヌやシルレルがその詩で歌つた様な深い、むづかしい人生の觀察と感想とをジムフォニーで歌はうとしてゐる。第六ジムフォニーで僅に野の風景を描き、第三ジムフォニーでナポレオンの面影を描かうとしたベートーヴェンの音楽に比べたら、それでも已に相當の大仕事である。それがシュトラウスになると、その内容はますます文學的になり、また思想的になる。哲學的にもなる。その音楽

でニーツェの『ツァラトシュトラ』の思想を歌つたり、人間の『死と浄化』を歌はうとする様になる。そしてこの様な音楽家のためには、音楽は、全く詩人の言葉や、哲學者の文章と同じものゝ様に見られてゐる。もうかうなれば、音楽も、文學も、詩も、殆ど同じものになつてしまふ。私共は詩人の筆から詩を読む様に、哲學者の筆から論文を読む様に、ちやうどそのつもりで音楽家の作曲から人生の事、世界の事、神の事、藝術の事を聞くわけである。その様な音楽家は、音楽家であると共に、詩人でもあり、哲學者でもあり、宗教家でもある。誠に音楽の大擴張である。音楽は殆ど人間の精神の働きの隅から隅まで行きわたる事になる。これをモーツァルトの昔に比べたら、音楽が如何に大きな變化をして來たかゞ明かにわかるであらう。モーツァルトには、自分のジムフォニーの流れが、だん／＼に世の變遷につれて、ベートーヴェンを経て、たうとうリストの『タッソー』となり、シュトラウスの『ツァラトシュトラ』にならうなどゝは、到底夢にも考へられなかつたであらう。

ベートーヴェンの心の底から湧いて出た音楽の泉は、たゞリストやシュトラウスなどの様な

大きな奔流になつただけでない。一方では、また、ブラームスやブルックネルの様なすばらしい深淵ともなつた。

それは、正に、ベートーヴェンの第三や第六のジムフォニーを除いた他のジムフォニーを、もう少し擴大した様なものである。或はその作曲の意志を、もう少し徹底させた様なものである。ブラームスも、ブルックネルも、その音楽で特に何を描寫しようとしなかつた。その音楽には『タッソー』とか、『ツァラトシュトラ』とかいふ様な標題はない。たゞ昔の型どほりのジムフォニーである。昔よりも發展したものは、その音の内容である。それは、ちやうど、ベートーヴェンのジムフォニーが、その型こそはモーツァルトのジムフォニーと同じ様ではあるが、その音の内容は大いに違つてゐた様なものである。

ブラームスやブルックネルのジムフォニーがした主な仕事は、恐らくベートーヴェンが始めて音楽で表現した人間のいろ／＼な感情や氣分を、さらに徹底してその音楽に表現した事であらう。或は、ベートーヴェンの音楽ではまだ十分に表現されなかつた感情や氣分までを、さらに範圍をひろめて表現し得た事であらう。或は音楽そのものゝ技巧をさらに複雑にし、新たに

し、なかばはその頭腦の働きの技巧さで私共を驚嘆させた事であらう。

私はこの小冊子で、音樂の歴史を話すつもりはない。それは音樂史についてよく考へてもらひたい。また、音樂の實際について、こゝに例にあげた一一の曲を詳しく解説する事も或る種の讀者には必要かもしれないが、それもこの小冊子の範圍以外である。私は、たゞ、藝術家の例にベートーヴェンを取り、そして、その音樂の有様を多少明かにするために、その前の時代のモーツァルトと、その後の時代のリストやシュトラウスや、ブラームスや、ブルックネルなどの名をあげただけである。そして、近代の様な人々までを取つても、やはり大體は、ベートーヴェンでそれを代表させる事が出来る、といふ事を言ひただけである。

(6) ベートーヴェンの藝術

これで、私はこの書の中の一番重要な部分を書いてしまつた事になる。

カフエーの軽い音樂に對して、ベートーヴェンの雄大なるジムフォニーはどう違つてゐるか。それがこの章の問題であつた。そしてその違ひを知る事は、即ちその音樂を作つた音樂家

の心の違ひを知る事であつた。音樂家が音樂に對する時の心の違ひを知る事であつた。

私はそれにかう答へた。

その違ひの主なもの、一つは、頭腦の働きである。智的に音を考へる考へ方の違ひである。そしてその違ひは簡單なものと複雑なもの、平凡なものと巧妙なもの、小さなものと大きなもの、些ないものと多いものといふ様な違ひである。私共は、いかに音樂でも、この智的な相違を決して見のがさない。そして形が複雑になり、龐大になり、或は音の使ひ方が非常にこみ入つて來ると、そこから自然に一種の威壓的なものが生れる。ちやうど、堂々たる大建築に對する様な感じがする。それが、私共が、まづベートーヴェンについて感じるものである。

しかし、それよりもなほ大切なものは感情である。カフエーの音樂は、私共をたゞ愉快にし、氣もちよくし、嬉しく、楽しくするだけである。モーツァルトはそれに智的な威嚴を加へた。そしてまた、その様な感情のあらゆる種類を、豊富に、美しく現はした。ベートーヴェンは、それにさらに一步を進めた。

ベートーヴェンは、音樂をたゞ愉快な、氣もちのいゝものに止めて置かなかつた。それに人

間の生活から来る他のいろいろの感情や氣分をも盛り込まうとした。彼自らの生活をその音楽の中に描かうとした。憂鬱とか、哀愁とか、悲壯とかいふ様な種類の感情をも音楽の中に十分たゞよはせた。或は彼が一生の間に経験した事件をも描寫した。或は彼の人生觀をも歌はうとした。その事がベートーヴェンの生涯を知る人にとつて、またこの實生活の反映と慰藉とを藝術に求める人にとつて、非常に大なる功績としてうけ入れられた。そして音楽の行くべき路は、こゝで大體はきまつてしまつた。

この感情の範圍、描寫の範圍が擴まつた事と、従つて音楽は私共に、たゞ愉快だけを與へるに止まらない事とで、カフエーの音楽とベートーヴェンの音楽との間に大なる相違が出来た。そして人々はベートーヴェンの音楽の方を『藝術的』と言ふ様になつた。

その後の藝術的な音楽の有様は、誇張して言へば、このベートーヴェンの開いた三つの路に、さらに深入りをして入つたまでである。私共はベートーヴェンの例で、まづ今日の『藝術的』と言はれてゐる音楽の有様を推して知る事が出来る。そして、私共にこの様なものを與へてくれる人を、私共は『藝術家』と言つてゐる。つまり、藝術家は、私共にたゞ愉快だけを與へな

いで、自分の心の全體を私共の前に表現する人である。私共もたゞ愉快だけをその作品の中に求めないで、私共自身の心の全體をその作品の中に求める事である。

私共は、まづカフエーの音楽から出發して來た。私共は、まづカフエーの音楽とその作家を見た。それからモーツァルトの藝術を見た。そして、今ベートーヴェンの藝術を見た。それは實に大きな發展である。實に大きな努力である。そして實に大きな成功である。かういふもの存在が、いかに私共の生活を豊富にし、いかに私共の生存を心強くするか、それはたゞ藝術を愛する人々だけが知つてゐる。藝術的な音楽の聽衆だけが、ベートーヴェンの藝術の偉大さや尊さを知つてゐる。そして、藝術家の心の働きの大きさ、深さ、不思議さを驚嘆する。

三、音楽の美しさ

私はこれまで、出来るだけ物を明瞭に言つて來た、大ていな事は、どん／＼斷定的に言ひ切つてしまつた。考へると、それは非常に危険な事である。この様な問題は、人々によつて、ど

うにでも考へられる。理窟はどうにでも付けて付かない事はない。そして、どの理窟が正しいか、その證據をあげる事は、この様な問題では到底望まれない。結局水かけ論に終つてしまふ。また、實際に、同時にいろいろな變つた理窟が存在するのが、物事の真相であるかもしれない。

讀者諸君の中には、私のこの敘述に大に反對したい人もあるであらう。私自身さへ、この敘述に強ひて反對な事を言はうと思ひさへすれば、いくらでも言へる。しかし、そんな論争は當面の仕事でない。私はこの本の一番大事な部分は已に書き終へた。この本のこれまでの章に述べた事こそ、私の本心である。私が音楽について持つてゐる考へである。従つて、この本もここで巻を終つてもいい。しかし私は、次ぎに、それについては是非とも言はなければならぬ事を少々言ひ添へて置く。

音楽の美しさ。——これがまづ第一の問題である。私はこれまで『美しい』といふ言葉を全くでたために使つて來た。しかし讀者諸君は、いつまでもそれではすませないであらう。

讀者諸君は、必ずこゝでかう問ふであらう。——たとへば、モーツァルトの音楽はベートー

ヴェンの音楽よりも美しさが足りないのか。しかし、人はみな、モーツァルトの音楽も實に美しいと言つてゐるではないか。大ピアニスト、ルービンシュタインは、モーツァルトを『音楽の世界の永遠の日光』と稱へたでないか。それでもモーツァルトは、ベートーヴェンほど美しい音楽を作り得なかつたか。作曲家がこの世の中で経験したいろいろな感情を、その音楽の中に織込む事が、果して音楽の美しさを増す事になるか。音楽の美は、そんなものより外に獨立したものではあるまいか。何の人間的な感情が現はれてゐなくとも、美しい音楽は、やはり美しい音楽ではあるまいか。モーツァルトの音楽は、その中に人間的な喜怒哀樂の情が十分現はれてゐない事のために、ベートーヴェンの音楽よりも美しくないと言はれるであらうか。音楽は、そんな事と無關係に美しいものは美しいのではあるまいか。

これこそ實に大問題である。

今まで私共の見て來た事は、モーツァルトの音楽の構造が、大體ではベートーヴェンの音楽よりも簡単な事であつた。その外には、モーツァルトの音楽の與へる感情は、主として愉快で、氣もちがいゝものだけで、ベートーヴェンほどの感情の豊富さがなく、またその感情の現はれ

方もベートーヴェンほど深刻でなかつた、といふ事であつた。さうすると、もしモーツァルトの音楽がベートーヴェンの音楽よりも美しさが足りないとなれば、それは構造が簡單なためか、或は感情が豊富でなく、また深刻でないためかであらう。しかし、そのためにモーツァルトにはベートーヴェンほどの美がないと言ひ切る勇氣が、果して私共にあるであらうか。

美しさといふ事は、またそれで一つの獨立した感じではあるまいか。そしてそれは構造の複雑さや大きさとも關係なく、また必ずしもいろ／＼な感情を表現する事とも關係なく、簡單なものにも、やはり美しいものもあるし、感情の種類之乏しいものにも、やはり美しいものもあるのではあるまいか。モーツァルトはその美しいといふ事にかけては、決してベートーヴェンにも、リストにも、ブラームスにも誰にも劣らないのではあるまいか。そして、この純粹な美しさを味ふ事こそ本當の藝術の享樂ではあるまいか。人間的な喜怒哀樂の情を、さらにその中に織込むのは、却つて藝術の美を掩ふ様なものではあるまいか。藝術を不純にするものではあるまいか。本當の音楽の美の享樂は、却つて純粹なモーツァルトの音楽の方にあるのではあるまいか。——私共には、確に、さうも考へられない事はない。

しかし、その反對の事も考へられる。モーツァルトの『美しさ』といふ事は、つまりその音楽が私共に楽しさ、心地よさ、愉快さなどを與へる事で、それ以外に特別に『美しさ』などいふものはない。そんな事は、物をわざともつたいぶつて考へる人の言ふ事である。音楽が美しい、といふ事は、音楽が心地がいくとか、愉快だとかいふのと同じ意味の言葉である。たゞ言葉が違ふだけである。私共がモーツァルトに、さも／＼純粹な『美しさ』といふものがある様に感じるのは、それは、實は、愉快さや心地よさの事である。たゞベートーヴェンや、リストや、ブラームスなどに比べると、それが非常に明瞭に私共の胸にしみ渡る。その時私共は、何となく、モーツァルトには純粹の『美しさ』が浮き出てる様に思ふだけである。實はその純粹な愉快さや、心地よさを、他のいろ／＼な感情も雜然として混つてゐるものと、特に比較して感じただけのものにすぎない。ベートーヴェンやブラームスには、この純粹な心地よさ、愉快さがモーツァルトほど單純に、明白に、音楽の表面に浮き出てるないだけである。

音楽に、特別に『美しさ』といふ様なものはない。音楽には、その特別な『美しさ』だけを享樂すればいゝといふ事は、つまり、心持よさ、愉快さ、面白さだけを享樂すればいゝといふ

事にすぎない。さうなれば、カフェーの軽い音楽は、一番美しい、理想的な音楽だといふ事になる。——私共には、確に、さうも考へられる。

私共はこのどちらを本當で、どちらを誤りだとも言はれない。證據のない事である。私共の感じを解剖して、この一センチメートル平方が『美しさ』の部分で、この二センチメートル平方が愉快さ、心地よさの部分だ、といふ様に、明瞭に私共の目の前には取り出されないものである。論理的に『判断力』^{ウルタイルス、ラフト}を音楽の範圍で考へ、その普遍性を考へる、といふ様な事は、もちろん、この小冊子の仕事でない。私共は、たゞ、世の中にはこの様な二つの見方がある、といふ事實を述べて置けばいい。そして、結局、言葉がどう違つたにしても、感じるものは同じものである。私共の今の目的には、この問題をこれ以上詮索しても、別に大に得るところはあまるまい。私自身のこれについての考も、今はことごとくしく論じない。

たゞ私は、私自身の趣味としては、明かにかう言ふ事が出来る。——私自身は大體で、その『美しさ』ばかりの音楽では満足しない。もちろん、人の心は時々違ふ。私も、時には、モーツァルトの可愛らしい、小さい、きれいな、美しいジュフォニーが聞きたい。しかし、もし

私が音楽家ならば、私はモーツァルトの様なものを作らうとは思はない。私の性格、私の趣好、私の生活、つまり私の全面目を音楽の中に歌ひたい。私は現代の最も複雑な表情の音楽よりも、もつと、もつと複雑な表情の音楽を作りたい。今の私の心を満足させるものは、純粹な、平靜な、典雅な、可愛らしい、そして枯淡なモーツァルトのジュフォニーでない。むしろ荒れ狂ふ様な、目まぐるしい様な、息のつまる様な現代の音楽である。そして、私はこの新しい音楽を、狭い意味でたゞ『美しい』とばかりは言はない。

私は音楽の中に、たゞ『美しさ』だけを求めようと思はない。モーツァルトのジュフォニーが、この『美しさ』の模範的なものであるならば、私は、むしろ美しくなくともいゝから、ベートーヴェンのジュフォニーの方をとる。或はさらに新しいリストや、シュトラウスや、ブルックネルやマーレの方をとる。私は音楽の中に、凡そ作曲家の心に映じた人間界のあらゆるものを、悉く深刻に表現してもらひたい。私は音楽の中で、私の心の姿の全體を見せてもらひたい。そしてそのためには、私は喜んでモーツァルトのジュフォニーのもつ様な『美しさ』は犠牲にする。

四、音楽の難關

この世の中には、何一つとして完全なものはない。この地上に存在するものは、みな不完全なものである。みな不満足なものである。それがこの世界の有様である。

音楽も、もちろん、そのたとへに洩れぬ、音楽もまた到底不完全なものである。不満足なものである。私は、これまで、その不完全、不満足については、まだ何事も述べずに置いた。もしこゝまで読んで来て、こゝでこの小冊子を捨てた人があつたならば、その人には音楽はさもさも目的に適つた藝術である様に思はれるであらう。ベートーヴェンや、リストや、ブラームスなどは、みなそれ／＼その思ふところを完全に仕遂げた人の様に見えるであらう。しかし、それは誠に大なる誤謬である。非常な誤解である。私は音楽については、決してその様な間の抜けた樂天家ではない。音楽の不完全さを述べないでこの小冊子を終るならば、それはこの小冊子を殆ど無意味にする。

(1) 啞

音楽の大なる難關の一つは、それに私共の見た事や、聞いた事や、考へた事や、頭の中に描いた事などを、そのまま寫し出す力が缺けてゐる事である。音楽には物を描寫する力が缺けてゐる事である。

音楽は言葉でない。音楽はどうしても言葉にはならぬ。音楽は音から出来てゐる。どう複雑に、どう巧妙にその音を組み合わせても、結局、音は音だけのものである。私共は時計の鳴る音を聞いても、雨だれが石を叩く音を聞いても、別にそれが何事を言つてゐると思はない。ただ音である。時計の音と雨だれの音とを一緒に聞いても、やはり同じ事である。たゞ音である。音楽もそれと變りはない。

ピアノのcの鍵盤を叩くと、cの音が出る。たゞ音である。eやgの鍵盤を叩くと、eやgの音が出る。それも、たゞ音である。cとeとgの鍵盤を同時に叩いても、やはり同じ事である。たゞ、eiegといふ和絃を聞くだけである。音はやはり音である。cの音が何を言つてゐるか、そんな事は私共にはわからない。cの音は言葉でないから、何を言つてゐるのでもない。

い。たゞ音が鳴つてゐるだけである。そんなものをいくつ合せても、結局その合せた音が一緒に鳴つてゐるだけである。それが言葉に變るわけではない。そして言葉でない以上は、意味はない。時計の音や雨だれの音に意味がないのと同じ事である。そのcの音をヴィオリネで出し、eの音をチェロで出し、gの音を笛で出して見ても、それは、つまり同じ事である。どの音にも意味はない。それを一緒に混ぜ合せても、それが言葉に變らない以上、それから何の意味も出るわけではない。

ベートーヴェンは、たとへば『ゾナーテ・アパシオナタ』を作つた。或は第五ジューフォニーを作つた。それはこれまでのピアノの音楽、管絃の音楽を通じての大傑作だといはれてゐる。またベートーヴェンの全生命、全面目はその内に躍動してゐる、といはれてゐる。誠にそのとほりであらう。しかし、その音楽には意味のない事だけは確である。非常に多くの意味のない音が、いろくさまぐくに組み合わせられてゐるだけである。その意味のわからないといふ點だけを取れば、『ゾナーテ・アパシオナタ』も第五ジューフォニーも、つまり啞の叫び聲の様なものである。

ベートーヴェンは、若い時からして己に耳が聞えなかつた。しかし、彼が音楽を自分の藝術としようと思ひ立つた瞬間から、彼はまた啞にもなつたのである。彼は自分の生命とたのむ藝術で、大いに自分の胸中を語つて見たいのであらう。自分の人生觀を天下の人々に訴へたいのであらう。戀人のギッチャルディやテレゼの面影をも描いて見たいのであらう。失戀の煩悶や、運命の無情や、或はそれを慰めるウィーンの郊外の野や森の光景や、そんなものを残りなく詳しく、その藝術の裡に表現して見たいのであらう。しかし、不幸にして、彼の藝術は啞である。言葉がない。物と言ふ事が出来ない。彼は如何に工夫しても、音楽家である限り、決してその音楽を通しては、たゞ一言『テレゼ』と言ふことも、『ウィーン』と言ふことも出来ない。『わたし』と言ふことさへも出来ない。全く啞と同じ事である。

ベートーヴェンは全く啞である。彼に與へられたものは、譜紙と筆である。音符をどう連ねて見ても、それから決して『テレゼ』といふ言葉は出ない。或は彼に與へられたものはピアノや管絃の樂器である。ピアノのどの鍵盤を叩いても、管絃のどの樂器を鳴しても、『ギッチャルディ』といふ言葉は出ない。それからは、みなたゞ美しい音が出るだけである。物が言へるの

は、たゞ人間の咽喉だけである。或はそこから出る音を寫す文字といふものや、或はそれを書き誌しておく筆といふものだけである。しかし、彼の藝術にはその咽喉や文字は決して與へられてゐない。

それならば、歌はどうであらう。歌には言葉もある。音楽もある。ベートーヴェン自身は、あまり歌では成功しなかつたが、しかし由來、歌といふものこそ、音楽家に言葉を與へ、音楽家を啞の境遇から救ひ出すものではあるまいか。——一應は、さうも考へられない事はない。

しかし、それは言ふまでもなく誤である。歌は決して音楽家を啞の境遇から救ひ出す様な力をもつてゐない。歌を作らうが、作るまいが、音楽家の啞である事には少しも變りはない。歌で意味があるのは、その文句だけである。文句は言葉であるから、もちろん、それには意味がある。しかし、その意味のある文句は、詩人が作つたものである。決して音楽家の作つたものでない。詩人は啞でないから、美しい言葉をもつて、美しい詩を作る。音楽家は、たゞそれに音譜を置いただけである。そして音譜は何も物を言はない。たゞの音にすぎない。

たとへば、ベートーヴェンはゲーテの『ミニヨンの歌』に音楽を置いた。しかし、その事で

決してベートーヴェンがその啞の境遇から救はれたとは言はれない。ミニヨンの詩はゲーテのものである。『レモンの花の咲く國を君は知りたまふや』といふ言葉はゲーテのものである。それにどんな音楽を書かうとも、この言葉は決してベートーヴェンのものにはならぬ。ベートーヴェンのものは、たゞその音楽だけである。私共はその音楽とその言葉とを全く切り離す事も出来る。私共はその歌のメロディをヴィオリネで弾いて、それにピアノを伴奏させる事も出来る。それでも音楽としては誠に立派な音楽である。しかし、もしさうなつたら、そのヴィオリネにもピアノにも言葉はないから、もはやそれはミニヨンであるか、何であるか、始めて聞く人には決してわからないはずである。

また、それだけでなくとも、私共はこの歌の文句を勝手次第に變へる事も出来る。メロディはただの音であるから、私共はそれにどんな文句を付けてもいゝわけである。字數を合はせ、そして、もう少し丁寧になれば、詩脚を合はせるなら、殆どあらゆる文句がこのミニヨンの歌のメロディで歌はれてもいゝはずである。それは、たゞ、ゲーテのドイツ語の詩と限らない。もちろん、ミニヨンの南の國への憧れの詩と限らない。フランス語の愛國の詩でもいゝ。ロシア語の